
ISーインフィニット・ストラトスー ~一羽の鴉の得た答~

一年柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS―インフィニット・ストラトス― ―一羽の鴉の得た答―

【Nコード】

N0081W

【作者名】

一年柚希

【あらすじ】

アーマードコアの世界を生き抜いた主人公がISの世界に転生する。

新たな世界で彼はどんな答を得るのだろうか……

ブローグ―鴉の辿ったその軌跡―（前書き）

どうも、一年柚希です。

ポツと浮かんだネタを頑張って綴りました。
拙い文ですが、どうぞよろしくお願いします。

ブローグ―鴉の辿ったその軌跡―

幸せだった頃の記憶は最早摩り切れた。

微かに残るのは幸せだったということと、嘗ての名前のみ。

家族の名前も恋人の顔さえも思い出せない。

……
俺は所謂転生者だ。

尤も、よくあるような理不尽な死とか、神様だとかは関係ない。

高校に入学したばかりの俺は平和でありふれた青春を謳歌していた。

だが、何の前触れもなくその日々は消え去った。

たまたま空港にいた俺はテロに巻き込まれ何のドラマもなくあっさり死んだ。

だが目を醒ますとそこは血と硝煙の臭いがする地獄の様な世界だった。

マックス・ルト・レサ・サード・コア
MTやACと呼ばれる10m級の機動兵器が存在する戦場

地下世界、レイヤード。そしてそれを管理する管理者。巨大企業、クレスト、ミラージユ、キサラギ。傭兵、AC乗りであるレイヴン

を管理し、各企業からの依頼を斡旋する中立なグローバル・コードックス。

企業同士が鎬を削りあい、昼夜問わず争いが起き、安全な場所など何処にも無かった。

今まで感じたことの無かった、悪意に満ち溢れた世界。

最初に人を殺した時すら分らない。あの地獄に巻き込まれてからはただ生きるのに、失わないようにするので必死だった。

誰からかの紹介か、歩兵として戦場に立ち生活の糧を得るために戦った。戦友と呼べるような人も出来た・・・と思っていた。だが、それは俺だけだったのだろうか。

ある戦場で突然銃口を突き付けられた。

『向こうの方が報酬がいいから』

惹かれあつたと思つた女性に裏切られた。

『アンタは甘そうだったからね』

無茶な依頼を押し付けられた時、俺が居た部隊の上司から言われた。
『オレが生きたために罔になつてこい』

裏切られ、甘さにつけこまれ、信じられるモノは無くなつていった。

俺は怒りに身を任せ裏切つた人間を、敵対する全てを殺した。

黒かった髪も数多のストレスからか色が抜け白銀になり、恐らく目付きも変わつていただろう。

その頃にはもう、人を殺すことに躊躇いは感じなくなつたし、誰かを信じることも出来なくなつていた。

なまじ幸せだったという記憶がある分、あの時の日々は辛かった。ACに出逢ったのはそのころだった。

何も信じられず、狂った様に戦場の出ていた俺は突如現れた一機、たった一機のACに味方がどんどん殺されていくのを見て呆気にとられた。

命からがら逃げ延びたあの時、このままだと為す術なく死ぬと悟った。

そしてレイヴン試験を受け、俺はレイヴンになった。

ACに乗ったからといって、安全という訳でも無い。逆により多彩な戦場に行くことになる。

『死にたくない。』

その一心で来る日も来る日も訓練し、依頼を受け続けた。

強くなるためにアリーナにも登録し、ランカーにもなった。

俺には才能なんて無かった。只がむしゃらに機体を動かし続けた。

パーツを買い、少しでも生き延びるよう、少しでも効率よく倒す^{コロマール}よう改造してきた。

中堅ランカーになった頃には請けられる依頼も増え、レイヴンランクも順調に上がった。

だが、結局は良いように使われただけかもしれない。

少しでも報酬のいい依頼を請けていたら都合が悪くなったのか、イレギュラー認定され偽りの依頼で誘き寄せられ、ランカー二人を差し向けられたこともある。要は使い捨てられたただけだ。

無論その二機も完膚無きまで破壊した。

依頼で中枢に侵入した時も、企業の依頼で入った筈なのに、体制の破壊を俺の責任にさせられた。

そして中枢のコンピュータを破壊して、久しぶりに陽の光を見た。

レイヤードから地上に出ても生活が変わることは無かった。

地上に出た企業は利益だけを求め開発を進め、更に発展していった。

数年後、未踏査地区の調査隊が音信不通になり、各種兵器の暴走、無人ＡＣの襲撃などが起きた。

やがて一連の暴走の信号がもう一つのレイヤードから発信され、またＡＩ研究者であり嘗て依頼で助けたセレ・クロワールが関係していることが判明した。

未踏査地区最奥部侵入時異形のＡＣ、ＩＢＩＳを撃破。

現在の企業の体制に疑問を持った故のセレの行為だったが、その後も企業は変わらず抗争を続けた。

変わらぬ戦場。変わらぬ地獄。だが、セレのせいか俺は何かが変わっていたのかもしれない。

居住区で起きた武装集団の蜂起。

その鎮圧に向かった俺はいつものように圧倒していった。

だが、偶然マイクが少女の泣き声を拾った。

今までなら気にも留めなかっただろうそれに、何故か脚が止まってしまった。

そして見てしまった。敵MTが声のする方に武器を向けているのを。何も考えてなかった。咄嗟にその射線上に立ち塞がり銃弾を受けつつ、破壊していた。

「……………マズったな」

運悪くコアに被弾していた。致命的だった。その上衝撃で頭から血が出てきている。

「ゴホッ……………よお、嬢ちゃん。怪我、無えか？」

『ヒック……………グズ……………だい……………じょうぶ……………』

「そうか。そりゃよかった」

『……………ヴン……………応答……………く……………イヴン……………レイヴン……！』

無線もやられたのか、聞き取りづらい。

「スマンな、エマ。俺は此处等でリタイアだ」

『そんな、レイヴン一体なにが！？』

「なに、柄にも無いことをして失敗した。只それだけの話さ。……………嬢ちゃん、向こうへ逃げな。ここは危ないぜ？」

『……………あり……………ヒック……………がとう』

「！？……………ハハ。まさかこの俺がお礼を言われるたあな……………」

」

ホントに、そんなこと言われる資格なんて無いのにな。

『レイヴン。早く退避を！！』

「もう遅いさ。死神がそこまで来てるのが見える。せいぜいこの嬢ちゃんを連れてかれないようにするので精一杯さ」

『そんな・・・レイヴン』

無線の向こうから悲痛な声がする。

「エマ。そんなんじゃないあオペレーター失格だぜ？しっかりやれ。

……………そろそろか。嬢ちゃん、早く逃げな！」

残ったエネルギーで殲滅しつつ叫ぶ。

全滅させ、少女の無事を確認してコクピットで息を吐く。

「チツ、視界が霞みやがる。……………ああ、……………これで……………」

……………やっと……………」

そして、意識を失った。

神様ってのはよっぽど俺のことが嫌いらしい。せつかく最高の気分で死ねたと思つたのに、また見知らぬ土地に身一つ放り出された。しかも、庇つた時の傷が癒えぬまま。

だがこの時はまだ幸運だった。

動くのも辛く、近くのＡＣの残骸に腰を掛けていると、緑色に光る粒子をばら蒔きながら飛んでくる機体が見えた。

こちらに気付いたのか、急に立ち止まった。

『……供！？……が……ノーマル……戦……生き残……
……』

内部マイクが拾った独り言が届く。

『こちらインテリオル・ユニオン所属、シリエジオだ。お前は……
……？』

「なに、しがない一羽の鴉だよ」

……それが俺と、彼女の出逢いだった。

そこは、レイヴンだったあの時代からかなりの、それこそ数世紀に及ぶ年月が経っていた。

レイヴンは消え、それぞれが企業に所属し変わらない抗争を続ける。

そして新たな動力、強い毒性を持つコジマ粒子とそれを使うＡＣネットワーク。それを駆けるリンクス。

人口爆発による食料不足。

エネルギー資源の慢性的な不足。

統治能力を失った国家に対し、力を持った幾つかの企業が世界に宣戦布告をした。

企業の持つネクストの強大な力の前に国家は為す術なく破れた、たった一ヶ月の戦争―国家解体戦争―

その後起きた最悪の戦争―リンクス戦争―

企業間で起きた直接戦闘だが、結果は企業の衰退とコジマ粒子による大地の汚染だけだった。

過半数の人類は大地を棄て、巨大なプラットフォーム―クレイドル―に逃れた。

俺がいたのはリンクス戦争の最後。その戦場跡で戦争に参加していた彼女―霞スミカ―によって保護された。

レイヴンとして生きて、既に30は過ぎていた筈だが、何故だか若返っていた俺は、彼女の下でACの操作技術をさらに鍛えた。

幸いにもリンクスに必須なAMS適性はかなりあった。

AMS―Allegory Manipulate System―搭乗者の脊髄や延髄を経て脳神経系の電気信号を送る機体制御システム。

脳と制御体を直接接続する為、思考から実機拳動へのタイムラグを限りなく0に近付ける事を実現する。先天的な才能が必要で、適性が低いと大きな負荷がかかり、脳や神経を損傷してしまふ正に諸刃の剣。

リンクスになり、スミカのオペレートを受けつつレイヴンの頃のよう
に何処に所属することなく独立傭兵として何度も戦闘に参加した。
セレン・ヘイズという名義でのスミカのオペレーションで巨大機動
兵器、アームスフットAFスピリット・オブ・マザーウィルの撃破を行なった。
ジャイアント・キリングを成したため、リンクスの上位30である
ランク入りをした。
これのせいでいろいろと目を付けられ厄介事に巻き込まれることにな
った。

ラインアーク襲撃。そして直接来た依頼、ウルナ侵入。

クレイドルを墜とすことを掲げた反動勢力ORCA旅団。そのNo.1
であるマクシミリアン・テルミドールに誘われ旅団に加わった。

そして頭になる企業の兵器アンサラー。
データを見て久しぶりに憤慨した。

「こんな物が……。これが貴様らの答か………テルミド
ール」

「ああ、解っている。元よりそのつもりだ。我々には倒せんよ。一
番の実力者であるお前以外にはな」

「セレン姐さん………」

『行つてこい。なに、フォローはしてやるさ』

「了解。（俺の手は血にまみれている。この機体のくすんだ紅は俺

の罪の色。だがこんな俺でも誰かを、何かを救えるなら）…………ノ
ーブライト・スカーレット。ヴィレン・ストレイド。行くぞー！」

結果は辛勝だった。なんとか倒したが、こちらの被害も軽微ではない。

脚部破損、腕部大破、コア損傷。後少しでこちらが死んでただろう。

何とか生き永らえ、帰還した俺を待っていたのは、テルミドールの死亡だった。

『カロードのリンクス…マクシミリアン・テルミドールだ。君がこれを聞いているのであれば…私は既に死亡している。

恐らくは、アルテリアクラニウムに倒れたのだろう。

メルツエルもビッグ・ボックスから生きて戻れまい。

ORCAは君一人になったという事だ。

頼む…私に代わりクラニウムを制圧してくれ。

クラニウムが停止すれば、クレイドルは最後の支えを失い、全ての人は大地に還る。

衛星軌道掃射砲は、クレイドルを支えたエネルギーを得て、アサルトセルを清算し宇宙への途を切り拓くだろう。

…全てを君に託す。

人類と…

共に戦った…

ORCAの戦士達の為に…！！』

遺された映像はそこで終わっていた。

「……………なあ、姐さん。」

「行くのか？」

「自分で決めた事だ。最期までやり遂げるさ」

「……………そうか。お前が決めた答だ。私はそれでいいさ。だが、私も最期まで付き合おう」

そしてクラニウムに侵入した俺は中枢でウィン・D・ファンションとロイ・ザーランドと対峙した。

アンサラー戦以上にきつかった。室内という狭い戦場。二対一という不利な状況。だが隙を突いたライフルの一撃がロイの機体を貫いた。

『ハッ…ダセエな…俺も…すまねえ、ウィンディー…あんまり…助けられなかったな…』

『クッ、ロイ……………』

貴様は、貴様も人類の為には人の死をいとわないか。ならば自分で死を実践してみせる。テルミドールのようにな！』

それから混戦は続いた。

ウィン・Dのデュアルハイレーザーキャノンを避け、右肩のミサイルを撃ち込む。だがそれを器用に撃ち落とし反撃をする。ライフルを撃ち込むが、ここで弾切れをおこした。

「クソッ！！こんな時に弾切れか！！」

『こちらも弾切れのようだ』

そう言い弾切れの武装をパージする。

「弾薬もP Aも無い。残った武器は」

『共にレーザーブレードのみ、か』

「案外気が合うのかもな、俺たち」

『何をふざけた事を』

「手厳しいねえー。まあおふざけはこのくらいにして」

MOONLIGHTを構える。

「行くぞー!!」

『殉ずるがいい。己の答に』

同時に駆け出す。

「ウオオオオオオ!!」

『ハアアアアア!!』

一瞬、交差する。

ブレードを振り抜いた格好のまま沈黙止まる。

『あと一歩、届かなかったか……………』

「いや、届いてるさ」

片腕を斬り落とされ、コアにまで斬線ができている。

対し、ウィン・Dはさらに深くまで斬られている。

『……………行くのだな？』

「ああ。……………だが、罪は償うさ。成すべき事を成した後で、な」

『……………そう、か』

そう呟き、ウィン・Dの機体は停止した。

中枢を破壊。だが、限界が来たのかそのまま俺の機体も動かなくなつた。

『……………える……………ヴィ……………しろ……………… 応答……………』

「聞こえるぜ。姐さん」

『ヴィレン、無事か！？クラニアムの停止を確認した。クレイドルが墜ちるぞ。早く脱出しろ！！』

「そうしたいのは山々なんだが、残念ながらもう動かねんだよ」

『そんな……………』

崩壊する音が遠くで聞こえてくる。

「なあ、姐さん……いや、スミカ。俺は誰かを、何かを救えたか？」

『……クツ……ああ。少なくとも、私はお前という存在に救われてたさ』

「ハハッ。そりやすまねえな、一緒にいれなくて」

まさかあのスミカに涙を流させちまうとはな……。

『この、馬鹿野郎が……』

ああ、崩壊がもうそこまできていやがる。

「人類のために死ぬ。それも悪くない、か」

そうして俺は三度目の命を失った。

ブログ―鴉の辿ったその軌跡―（後書き）

ちなみに作者はf aをやったことがありません。（PSS3および箱を持っていません）

よければ使ってたアセンブリやパーツを教えてください。

EP001―生まれ変わった鴉の新たな人生―（前書き）

何故かこっちは進みやすい。

実は原作三巻までしか読んでないのです。

未熟なフロム脳を酷使した結果こうなりました。

キャラが違つかもですが気にしないでください。

8 / 23 14 : 45

指摘があつたので改訂しました。

EP001―生まれ変わった鴉の新たな人生―

「どうしてこうなった」

周囲から好奇の視線を受けつつ呟く。

思い出すのは四度目の人生の始まりと、こうなった原因。

ヴィレンとしてクレイドルの崩落に巻き込まれた筈の俺は、気がつけば六歳児になっていた。

傷だらけのところを織斑千冬に拾われ、いつの間にか義理の弟にされ、織斑秋十おりむらじゅうとと名付けられた。

彼女が何を思ってた家族にしたのかは分からないが、一瞬眼に浮かんだ感情は憐憫だった気がする。

義理の妹である一夏と仲良くやりつつ、共に小学校に入学。
白い髪で苛められることもあったが、今までとは違う平和な世界に困惑つつも成長していった。

だが、事件は起きた。

義姉の千冬の親友である天才、篠ノ乃東がインフィニット・ストラトス通称ISを発明。最初は見向きもされなかったそれを世に知らしめるために世界中の軍事基地をハッキング。ミサイルを日本に飛ばした。

緊張する世界に対し、たった一機のISで総て撃ち落とし、捕獲、撃破を目論んだ各国の海、空軍を死者0で追い返すという『白騎士

事件』を起こした。

圧倒的性能を見せつけたISだが、致命的な欠陥がある。それは、女性にしか操れないということ。

だが、既存の兵器を超える性能に危機感を覚えた各国はアラスカ条約を結び、軍事利用を禁じた。

ISに乗れる女性は偉いという風潮が広まり女尊男卑になっていった。

篠ノ乃束は行方を眩まし、義姉はIS関連で忙しくなり、家に帰ってくる回数が減っていった。中学に上がってから、世界中を視てみたいと言って長期休暇には放浪をするようになった。

汚染されていない清浄な大地。長閑な風景。レイヴンだった頃も、リンクスだった頃にも見ることは叶わなかった平和な景色。何気ないものにも面白く感じ、何故か懐かしかった。

だが、俺は争いから離れられぬ定めなのだろうか。

行った先の国で偶然暴動が起き、巻き込まれぬよう近くの建物に忍び込んだのがまずかったのだろうか。

入り込んだ施設は何かの研究所だった。人の気配を感じないことに違和感を抱き、身を隠しながら暴動が治まるのを待とうと思っていたが、突如警報が鳴り響いた。

『施設内に侵入者を確認。防御装置が作動します。職員各員所定の位置へ移動してください。繰り返します……………』

それと同時に降りてくる隔壁。

ここにいたらマズイと、咄嗟に降りきる前に身体を滑り込ませた。

「……………あ、閉じ込められた」

自分の首を絞めただけだったが。

一ヶ所に留まるよりはましだろう、とダクトの中を這って移動していた。

「しかし、研究所侵入は久しぶりだがまさかこんなところを通る羽目になるとは……………」

小声で毒づきながら迷路のようなダクトを勘任せに進むと行き止まりに突き当たった。

部屋内に人がいないのを確認し、降り立つ。

「ッ！？何だこの部屋」

俺のような地獄を経験した、血にまみれた存在だからこそ理解した。綺麗にされているが、隠しきれない血の臭いを。

「……………こつちから一番しやがるな」

扉一枚隔てた先には、ガラスケースに容れられた球状の物体が置いてあった。

余りにも濃すぎる血の臭いに、思わず触れようとしたその時、

「あら、それには触れない方がいいわよ？」

背後から声をかけられた。

咄嗟に振り向くと、そこには一人の女性が立っていた。

長身で、艶やかな金髪に多くの女性が羨むようなプロポーション。そして少し幼さがあるものの、完成したような美貌。一瞬目を奪われてしまったが、長年の勘が告げている。

コイツは危険だ、と。

「フフ。そんなに身構えないで頂戴。此方に敵意はないのよ？」

反射的に懷に手を入れていた俺に、妖艶に微笑みながら言う。

「ああ、確かにそのようだ。どちらにせよ俺では敵わないようだ」

両手を頭の上に挙げつつ返答をする。

「あら、そうかしら？懷の銃でも袖口のナイフでも使えばいいじゃない」

「気づいていながら何を言う。それに、ISをいつでも展開できるようにしているのだろう？」

見つめ合ったまま黙り込む。

「……フフツ。フフフフフフ」

肩を震わせながら笑い出す女。

「いいわ！ 気に入った。貴方、名前はなんていうのかしら？」

「名を尋ねるならば、まずは自分から名乗るべきだろう？」

予想外だったのか眼を円くする彼女。……不覚にも可愛いと思っ
てしまった。

「ああ、ますます気に入ったわ。そうね、私はスコール。スコール・ミューゼル」

「ヴィレン・ストレイドだ」

「そう。ねえ、ヴィレン。一緒に来ない？ 貴方の事とても気に入ったの。私、ある組織の幹部なの。いい待遇にするわよ？」

「へえ？ その歳で幹部か。凄いいじゃないか。だが、生憎俺は傭兵だ。何処かに就くことは無いさ」

「……ねえ、私が幾つに見えたの？」

「俺とそう大差無いのだろう？」

その答にスコールは目をウツトリさせてきた。

「ああ、貴方は私をどれだけ虜にさせるつもり？ もう完全に捉えられちゃったじゃない。」

そう言いながら俺に正面から抱き着く。

「……………傭兵をやってるって言ったわよね？どれ程の戦場を経験したの？貴方の人を見抜く眼といい、身構えといい。さらにこの髪。これ、戦場のストレスで色が抜けたのよね？」

「さあな。そんなこと数える隙なんて無かったからなあ……………」

湿っぽい空気になってしまった。

話を変えようと抱き合ったまま切り出す。

「ところで、結局この施設は何なんだ？」

「ああ、ここ？ここはＩＳ関係の違法研究所よ。私たちに不利益になるものがあつたから壊しに来ただけだよ」

「成る程。外の暴動はお前らの仕業か。……………はあ、あれから逃げて来た筈なのにまさか大元に遭遇するとは……………」

背中に回した腕を離し、近くで見つめ合う形になる。

「あら、それは災難ね。私としては嬉しい誤算だったけれど」

本当に嬉しそうに言いやる。はあ、何でも運が悪いかね？

「それで？違法研究って何のことだ」

「そうね、ここ元々は普通の研究所だったのだけれど、手に入ったコアが問題だったの」

「コアがか？」

「そう。全467機の内、一番容量が大きかったコアを手に入れ研究を始めたのだけれどいきなり問題が起きたの」

「……誰にも反応しなかった、とかか？」

「いいえ、その逆よ。そのコアは誰にでも反応した。いえ、してしまったのよ。その挙句、勝手に起動、暴走を始め試験者全員が発狂して死んでしまったのよ」

「……だから、これから血の臭いが濃くするわけか」

「だから、コアNo.444に因^{キリング・ナンバー}んで欠番と呼ばれるようになったのよ」

興味深げに眺めていると突如コアが光だした。

「は？」 「へ？」

二人とも呆然としてしていると頭の中に声が響いた。

『あなたはなにをのぞむ？』

「なに………が？」

『あなたのもとめるものはなに？』

「俺が………求めるもの？」

「一体どうしたのよ」

彼女には聞こえないのだろうか

「声が……頭に」

「ウソ!?このコアに自我があるというの!?!」

『あなたのほしいもの』

「俺が、欲しいモノ。……………それは」

（これが貴様らの答か!?!）

（人類と…共に闘った…ORCAの戦士達のために!?!）

（殉ずるがいい。己の答に）

（お前が決めた答だ。私はそれでいいさ）

「己の答を貫く力だ!?!」

『遺伝子データを確認。——— 初期化モードへ、移行します』

コアが浮かび上がり、部屋に音声が響いた。

「まさか、貴方ISを起動させた!?男性には動かせない筈なのに……………」

流石のスコールも言葉をなくしたらしい。

『——初期化プログラム、最終レベル』

コアの光がさらに強くなる。

『——全システム、チェック終了』

一際輝くと、最後の音声がした。

『——最終フェーズ、起動

——フォーマット 確認、シフト 開始』

光が止んだ。

.....

それからが大変だった。

情報操作や専用機の製作を任せる代わりに彼女の所属する組織、
国機業システム・タスクからの依頼を二回タダで請けることになった。
亡^{ファ}

さらに別れ際に頬にキスをされ、

『諦めないから』

などと言われた始末。

帰国して暫くして、世界一のIS操縦者を決める大会、モンド・クロッソに前優勝者である義姉が参加。義妹と共に観戦に行くも決勝前に誘拐されてしまった。

助けに行った先で亡国機業のIS操縦者が現れた。

良い男がいなくて、百合にはしっていたスコールと付き合っていたらしく、俺がヴィレンと知るとケンカを売ってきた。

ケンカの末何故か気に入られ、亡国機業に誘われた。傭兵だから断ったけど。

レイヴンやリンクスにはアレな性格の人間が多かったからか、彼女の口調や態度がマシに見え、嘗ての知り合いの大半が変人なのだと再認識し、少し心がやさぐれた。

その後、近づいてくるISを感知した彼女―オータム―が退散。決勝戦を放棄した義姉がやってきた。

この時何故か義妹は俺が助けた事を知っていて、余計なつかれた。それこそ四六時中一緒にいようとするほどに。

そして高校受験。藍越学園の受験会場へ義妹と向かった筈なのに場所を間違えIS学園の会場に到着。

それを知らず内部を迷つてると一夏が何もないところでコケた。突然の事に対処もできずベッタリくっつかれてた俺も一緒に倒れる。手を突いた所に何故かISがあり、反応してしまった。そこに丁度試験官が登場俺が装着してる事に驚き、何処かに連絡した拳句強制的に試験を受けさせられた。

など、なんやかんやあり俺以外全員女子の学校に入学（拒否権無し）

させられた。

「……………斑君。織斑秋十君!!」

「ハイ？」

名前を呼ばれ現実逃避から戻ってくると先生（と思われる）がいた。

「あつ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』なんだよね。自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

「構いません」

そう言い、立ち上がるとクラス中の視線が集まる。

「（クツ。予想以上に辛いな。一夏、は駄目だ。使い物にならん）」
「ウツトリというか既に蕩けたような目でジツトリと見て（視姦してくる。）」

……………どこを間違えたかなあ？

「ンンツ。織斑秋十だ。これから宜しく頼む」
以上だ。とばかりに席に座る。

視線でもっとと訴えかけられてる気がするが無視だ無視。

「クラスの事を任せてすまないな山田先生」

微妙な空気を破るように入ってきたのは、我等が頼れる義姉、千冬

だった。

「いえ、副担任ですから。これくらいはしないと……」

「諸君、私が織斑千冬だ。キミたちを一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜く事だ。逆らっても良いが私の言うことは訊け、いいな？」

その後来るであろう喧騒を耳を塞いでやりすごす。

「それで、もう少し愛想よく出来んのかお前は」

「それでもマシになった方なんだがな」

パアンツ！！

……………出席簿で殴られた。

「敬語を使え」

「……………はい」

はあ、これからどうなるやら

EP001—生まれ変わった鴉の新たな人生—（後書き）

.....文句は受け付けません。あ、感想は下
さい。

最後に一言。

どうしてこうなったし

EP002―入学する鴉と再開―（前書き）

何故か出来た三話目。

一体どうした!?

主人公のキャラがブレる。

EP002 | 入学する鴉と再開 |

一時間目が終わり休み時間になった。

クラスはおろか、廊下も溢れかえるほど人がいる。しかも誰も話しかけてくる事なく眺めるだけ。

正直、胃が痛くなる。

だが、救いはあった。

「ちょっといいか？」

顔を上げると、見覚えのある奴だった。

「廊下でいいか？」

それに了承してついていく。

廊下の隅で立ち止まり向かい合う様に立つ。（言わずもがな、一夏はついてきている）

「久しぶりだな、箒」

篠ノ乃箒。かの天才篠ノ乃束の妹で、幼馴染みだ。

馴れ初めは、彼女の家が剣の道場をやっていて、低学年の頃から既に習い始めていた。

女子に剣はおかしい等という、子供らしい理由で男子に苛められて

いた筈を助けたのが始まりだ。
それから何故かなつかれ、転校するまで一夏と俺の三人でいる時間が多かった。

「そっぴゃ、剣道の試合で優勝したんだってな。おめでとう」

「なっ、何故お前が知っているのだ!？」

「偶々新聞に載ってるのを読んだな」

「何故新聞を読んでるんだ!？」

「……………なんて理不尽な。」

「しっかし筈よ」

「……………なんだ？」

「最初は誰だが解らなかつたぞ」

「そっ、か……………」

ん？何かシユンとしてるような…。

「いや、予想以上に綺麗になっててな。吃驚したぜ」

「きっ、綺麗だと!？」

「ああ、こんなに綺麗な娘知り合いにいたかとツツツ!？」

突然一夏に脇をつねられた。

「何をする一夏。痛いだろ？」

「フンだ。義兄さんのバカ。箒とばかりイチャイチャイチャイチャしてさ」

「イツ……………！？」

むくれる一夏と言葉に反応して真っ赤になる箒。

この微妙な空気をどうしようか迷っていると、ちょうど始業のチャイムが鳴った。

「機嫌直せって一夏。ほら箒も、教室戻ろっぜ？」

二人に教室に行くよう促す。義姉が担任だ、遅刻は許されんだろうからな。

つと、忘れてた。

「箒」

「ど、どうした？」

罪深い俺なんか幸せになっていいのかわからんが、それでも

「これからまた、よろしくな」

今この時を生きていこう。いつか罰されるその時まで。

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ——」

二時間目。退屈な座学の時間だ。この辺は既にスコールから教えられた事だ。

…秘密結社の幹部が法律を教えるって……。

「織斑君、何かわからないところがありますか？」

どうでもいいことを考えてると、山田先生が俺に問い掛けてきた。

「大丈夫です。この辺はだいたい覚ええましたから」

ホントに、覚えなければ俺の貞操が危うかったからな。

何故だろう？会ったたびにスコールの最初の印象が崩れていく気が……。

「そうですか。解らないところがあれば言うてくださいね」

山田先生はちよつと不安だが、いい先生のようにだ。
それに比べ義姉は…

パンツッ！！

「変なことは考えるな」

……心でも読めるのか？義姉さんはそこまで人が

パンツッ！！

「返事は？」

「…ハイ」

散々な目にあつた二限目も終わり、再び客寄せパンダな休み時間。

「ちよつとよろしくて？」

無視を決め込むべく机に伏せていたにも関わらず、無駄に偉ぶつた言葉をかけられた。

「何の用だ」

初対面で嘗められぬようわざと昔のように話す。

「まあ！なんですそのお返事は！この私が話しかけてあげたのですからそれ相応の態度という物があるのではないですか！？」

「……………」

ああ、なるほど。今どきの女ってことか。

「生憎、俺は貴様のことなど知りもしないのだが？初対面の相手にそんな態度で話す相手にどんな態度をとれと？」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを！？」

代表候補生。それは国によって選ばれた国家代表IS操縦者候補。いわばエリートのこと。

だが、

「候補生ごときを全員覚えろと？そうか、お前は覚えているのだな。それはすごいな」

所詮は候補生。代替のきく存在にすぎん。そんな取るに足らない存在を覚えるとは、存外鬼畜だな。

「なっ……！？ま、まあ、わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげましようと思ったのですが。なにせ入試で唯一試験官を倒したエリートですもの」

「ん？あの模擬戦のことか？あれなら俺も倒したぞ」

実践を知らぬ温い奴らに負けてなるものか。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「存外、女子だけというオチなのだろう」

皮肉を込めて唇の端を歪める。

「あ、あなたって人は！」

セシリアが叫びかけた時、幸いにも3時間目の開始のチャイムが鳴った。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって!？」

最後に俺を一睨みしてから席に戻っていく。

…セーフだな。あと少しで隣のあれ（一夏）がキレるとこだった。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

さつきまでの授業とは違い、山田先生ではなく義姉さんが教壇に立っている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

義姉さんは思い出したように言った。

しかしクラス代表者、ねえ……

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まる

と一年間変更はないからそのつもりで。

では、クラス代表を決めたいと思う、自薦・他薦は問わん、誰か候補はいるか？」

クラス中がざわめきだした。

まあ、俺には関係ないだろう。

「はいっ！織斑君を推薦します！！」

なん…だと？

「私もそれがいいと思います！」

その声を皮切りに、クラス中から賛同する声が出て来た。

「何故俺がやらねばならん！？」

「他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

無視された。と言うより一夏！！そんなキラキラした目で見るな！

「待つてください！納得が行きませんわ！」

机を叩いて異議を申し立てたのはさっきの女だった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

あ、マズイ。一夏がかなりキている。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！」

私はこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サ
ーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

…（一夏の）爆発五秒前。

「いいですか！？ クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ！」

三、二…

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては苦痛で……」

ブチンツと音が（隣から）聞こえた気がした。

「さっきからギャーギャーうるさいのよっ…！」

ああ、やつちゃった。

「こっちが黙って聞いてれば調子にのっちゃって！わたしの義兄さんに恨みでもあるの!？」

おい、さりげなく『わたしの』とつけるな。

「第一、候補生ごときで自慢して。義兄さんにも敵わなそうなくせ

に!!」

「なっ!?!このわたくしが男ごときより劣るといいますの!?!そんな白髪、髪の色を抜くようなチャラチャラしたような男に!?!」

やはり、白髪は目立つのだろうか?

「……………さんの」

あ…、ヤバい。本格的に一夏がキレた。

「義兄さんの髪の色をバカにするなあああ!!!!!!」

「ッ!?!」

「何にも知らない癖に!!義兄さんだって好きでこんな髪の色なわけがないのに!!」

クラスメイトがかなり引いている。義姉さん、止めてやれよ。

チラッと義姉さんを見ると、腕を組んで黙っている。冷静に見えるが、義姉さんもキレている。

まったく。俺には過ぎた家族だよ。けど、いい加減止めないとまずいかな?

「一夏。少し落ち着け。」

「義兄さんもなにか言つてよ!!」

「自分を強くみせるしかできない相手に何を言っても無駄だろう?」

「~~~~ッ！？決闘ですわ」

「挑むところよー!!」

いや、闘うの俺…………。

「言っておきますが、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い…
…いえ、奴隷にしますわよ」

「言つてなさい。勝つのは義兄さんよ。」

闘うとは言つてな…………

「そう？ 何にせよ丁度良い機会ですわ。イギリス代表候補生、このわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

いいぜ、腹括つてやる。

「それで、ハンデはどれ位がよろしくて？」

「ああ？ そんなもんいらねえよ」

その言葉に、クラス中から失笑が起きた。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強ったのなんて大昔の話だよ？」

「そつだよ、今からでも遅くないからセシリアにハンデつけて貰ったら？」

「代表候補生を舐めすぎだよ」

ああ、イライラする。戦場を知らないガキが……………。

「ハッ。引き金の重さも知らねえようなひよつ子に負けるわけねえよ」

「話は纏まったようだ。では、クラス代表決定戦を一週間後の月曜日に行う！」

ああ、ホントにイライラする。

放課後窓枠にもたれ掛かり外を眺める。

「……………スミカ。お前のおかげで今穏やかに過ごせている。なあ、今お前はどっしている？人類は宇宙へ出ることが出来たか？俺の答は……………いや、それはいい、か」

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

気が付くと、教室の入口に、山田先生が書類を片手に立っていた。

どうやら、黄昏過ぎたようだ。

「どうしたんですか？」

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて部屋番号の書かれた紙とキーを渡してきた。

「あれ、俺の部屋決まつてなかったんじゃないんですか？」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割を無理矢理変更したらしいです」

「そうなんですか……あれ、でも荷物は何？」

俺は荷物なんて準備してない筈だ。

「荷物なら私が勝手にやつておいたさ」

そのセリフと共に現れたのは、義姉さんだった。

「ちなみに、入れたのって……」

「着替えとか携帯の充電器だ。元々私物が少ないお前なら構わないだろう？」

「ま、まあ大丈夫ですけど」

そう言つて、紙と鍵を受け取つて行こうとしたが山田先生に呼び止められた。

「あつ、織斑君。お風呂なんだけど、織斑君はまだ大浴場は使えませんか」

「？なんで……ああ、そういうことか。了解しました」

俺だって、好きで女と一緒に風呂に入ろうとは思わないさ。

「じゃあ、俺は寮に行くので」

そう残し、廊下へ出ていく。

自分の部屋に入り、視界に入った無駄に豪華なベッドに思わず飛び込んでいた。

「スゲーフカフカだな」

余りの気持ちよさにうとうとしてきた時だった。

「あれ、誰かいるの？相部屋のひとかな。先にシャワー浴びてるからちよつと待っててくれる？」

聞こえてきた声に思考がフリーズした。

「……………（いやいや、待て待て待て待て待てえい。）」

ものすごく聞き覚えのある声があった。

「（一夏は、マズイ…）」

「こんな格好でゴメンね。私の名前は織斑、い、ち……………」

バスタオル一枚な義妹と目があつた。

「あ……………え……………にい、さん？」

「よ、よお、一夏」

「な……………なんで、この部屋に？」

「俺もこの部屋みたいだし……………」

「まさか、……………義兄さんから？」

「いや、兄妹だからだろ」

全く。何を期待しているんだか。

「それよりも」

視線をそらしながら言う。

「その格好、早く着替えな」

「へ？……………キャッ！」

自分の状況を思い出したのか、凄いスピードで洗面所のドアを閉める。

再びベッドに身を預け、天井を見上げる。

脳裏には、先程の一夏の姿が浮かぶ。

白いバスタオルから溢れて見えた、程よい大きさの胸と、上気して赤みがかった肌。濡れた艶やかな黒髪が艶かしさを――

「（つて、何を考えている！？あいつは妹だぞ）」

頭を振り、思考を追い出す。

「ハア、先行き不安だ」

EP002―入学する鴉と再開―（後書き）

何故だろう。一夏が半ばネタキャラに……。
ま、まあ気にしないで（汗）

ここでアンケート

作者は簪が好きです。

なので、この辺りからハーレム入りさせるか悩んでいます。

意見をください。それによって出てくるか決まります。

意見、感想待ってます。

EP003—対峙する鴉と蒼い雫—（前書き）

気がつけばPV16000、アクセス3000突破してた。

皆さん、ありがとうございます…！

EP003―対峙する鴉と蒼い雫―

「なあ、篤」

「……………なんだ？」

「気のせいならいいが、この一週間ISの事何も出来てないと思うのだが？」

「……………」

「目をそらすな」

そう、今日はあの日から丁度一週間。つまり、決闘の日だ。

「だ、大丈夫だよ義兄さん！義兄さんなら負けないって！」

「一夏……………なら、目を見て言え」

「だっ、大体、お前が弱くなっているのが悪いんだ！」

「だから、何度も言っただろ？俺の剣は全然使い物にならないって」

事の起こりは決闘が決まったあの日の翌日に遡る。

「あの人は関係ない！！」

授業中、箒が篠ノ乃束の妹であることがクラスメイトにバレ、質問の嵐が起こった。

それに堪えられず、大声を出して遮る箒。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことはない」

そう言って席に着く。

「山田先生、授業の続きを」

いや、せめてフォローしてあげようよ義姉さん。

クラスが微妙な空気のまま、昼休みに突入した。

箒は頬杖をつき、一人で窓の外を見ている。

「箒、昼食に行こうや」

「……私はいいい」

こりゃ相当引き摺ってるな。

アイコンタクトすると、一夏は箒の耳元に口を寄せ何事か囁いた。

「（一緒に来ないと、義兄さんは私が貰っちゃっつよ？）」「

「なっ！？」」

何を言ったのか知らんが、筈が顔を赤くして立ち上がった。

「行く、行くから」

そう言つて慌てて一夏の後を追つていく。

「ったく。何があつたかは知らんが、ここには俺たちがいるしお前は
お前何だ。だからあの程度の事気にすんな」

目の前を通る時にあわせて小声で呟く。

「えっ？」

おや？聞こえちまつたか。

「んじゃ、行こうか」

「ッ。……ああ!!」

食堂に移動した俺たちは思い思いのメニューを頼み、食べ始めていた。

さっきの事など感じさせないような、自然な会話をしながら楽しみに食事を進めていると、

「ねえ君つて噂の子でしょ」

声をかけられた。

温度が下がった気がする。

一夏と箒が妙な威圧感を出しながら女子生徒を睨んでいる。

それを知らずか、話を続ける女子生徒。

「代表候補生と戦うって聞いたけど、でも君、素人だよね？あたしが教えてあげよっか？」

少なくともあなたよりは実戦経験はありますよ？
と言えたらどんなに楽か。

返答に困っていると、見かねた箒が助け舟を出してくれる。

「結構です。私が練習相手になる約束をしているので」

「でも、あなたも一年生よね？だったら二年生の私の方が……」

「問題ありません。私は篠ノ乃東の妹ですから」

「っ。そ、そう。ならいいわ」

そう言って退散する女子生徒。

「ありがとうな、箒」

「ん、気にするな。私も鬱陶しかったからな」

「でも、咄嗟にあんな出任せが出るなんてね」

「一瞬何かと思っただぜ？」

一夏と笑いあう。

「な、なあ。放課後剣道の手合わせをしないか？」

「……は？」

「ああ言った手前、何もしない訳にはいかないだろう」

「いや、ちょっと待て。俺剣なんて使えな」

「そうだ、それがいい。よし、秋十授業が終わったら剣道場な」

何か筈が暴走している。

一夏に無言の視線で助けを求めるも諦めてとしか返ってこない。

「うむ、我ながらいい案だな」

「………助けてくれ。」

結局逃げることも出来ずに剣道場へ拉致られた。

……何故かギャラリーも大勢いるし。

「準備はいいな？」

「いや、だから俺は」

「問答無用！！」

いきなり上段で斬りかかって来る筈。

「うわっ！？ちょ、いきなり危ないだろ！？」

「気を抜いてるお前が悪い！ほら、反撃してみろ！！」

流石大会優勝者。剣速が半端ない。
それを恥も外聞も無く避ける俺。

「もしかして、織斑君って……弱い？」

「これで代表決定戦大丈夫かな？」

外野、勝手なことやってんじゃねえ！！
俺の得物は精々サバイバルナイフだ！！

外野に気をとられたその隙を箒に面を打たれた。

「何故だ！？昔は三人で剣道をやっていただろう！？何故こんなに弱くなった！！」

「俺、剣の才能無かったから箒が転校したあとすぐにやめたんだけど」

ありゃ？黙って俯いてしまった。

「——なおす」「……はい？」

「鍛え直す！IS以前の問題だ！これから毎日、放課後三時間、私が稽古を付けてやる！」

「だから、剣はつか」

「問答無用だ!!」

そして現在に至る。

「結局付け焼き刃の剣道しかやれなかったな」

「だ、だからスマンと言ってるだろう」

初めて聞いたが？

「その上、試合開始数分前なのに俺の専用機がまだ届かないとはな」

「ホントに、どうしちゃったのかな？」

既に第三アリーナのビット搬入口にいるのだが、専用機が届いていないため待ちぼうけをくらってる。

準備体操も終え、手持ちぶさたになっていると、

「お、織斑君織斑君織斑君っ!!」

バタバタと慌ただしく山田先生が入ってきた。

「先生、落ち着いて。ほら、大きく深呼吸」

すーっ、はぁー。

素直に深呼吸する先生。……………それでいいのか？

「落ち着きましたか？それで、一体どうしました？」

「あ、はい大丈夫です。それはそうと織斑君！専用機がやっと届きました！！」

やって来た方に行くと義姉さんが待っていた。

「義姉さん！！」

「先生だと何回言えば……いや、今回はいいか。これがお前の専用機だ」

そう言っただけで掛かってた布を剥がす。

そこにあったのは、——深紅だった。

体の殆どを覆う無骨な鮮やかな紅の装^{くれない}甲。ジョイント部分に走る黒いライン。

目元を隠すバイザーと横から伸びる一本のアンテナ。

流麗さが感じられない、悪く言えば荒削りな機体。

「名前は自分で設定しろ。時間が無い。初期化と最適化は実戦でやれ」

義姉さんに急かされ近づき手を触れる。

『やっと……。みせて、あなたのこたえを』

身体に埋め込まれているAMSから流れてくる意思。

「そうか、お前はあの時の……。いいぜ。魅せてやる。俺の答を」

「義兄さん、どうしたの？」

俺の呟いた声にに気付いた一夏が訊ねる。

「……いや、何でもないさ」

気を取りなおし、ISを装着する。

「ハイパーセンサーは問題なく動いているな、気分は悪くないか秋十」

「……ああ、大丈夫だ。問題ない」

人が少ないからか、姉として聞いてくる義姉さんに苦笑しつつも力強く頷く。

立ち上がり、カタパルトへ移動する前に見守る一夏と箒に向き直る。

「一夏、箒。行ってくる……。見ててくれ」

「ああ」

「ちゃんと観てるよ。だから」

「勝ってこい(きて)!!」

カタパルトへ移動し、戦闘前の最終確認をしていた。

「AMS接続——クリア

センサー各種——クリア

武装確認——CWGRF—200

CLBL—1551

武器が拙いな。やはり初期設定だからか？

……ん？コアにメッセージが一件？」

再生を選択すると、俺の頭に直接音声が届いた。

『ヴェレン、聞こえる？スコールよ。遅れてごめんなさいね。貴方の言ってたAMS？の調整に手間取ったのよ。その上まだ未完でちよっと違和感があるかもしれないけどそこは許してちょうだい。それ以外はほぼ貴方の要望通りにしておいたわ。後は貴方とこの子次第。』

それから、この試合の結果によって承けてもらう依頼が決まるからそのつもりでね。

じゃあ、期待してるわよ？しゅ・う・と」

「ハハッ。こりゃ遊んでられないな。OK、了解だ。レイヴンの力を教えてやる」

『織斑君、準備はいいですか？』

カタパルト内部のスピーカーから山田先生が聞いてくる。

「大丈夫です」

『では、発進してください』

ゆっくり開くハッチから零れる外の光に照らされる。まったく、俺の初舞台には過ぎた演出だな。

「織斑秋十、ノーブライトスカーレット、行くぞ！」

アリーナの上空に浮かびながら俺とセシリアは向かい合う。

「逃げずに来たこと、褒めて差し上げますわ」

先に口を開いたのはセシリアだった。

「最後のチャンスを差し上げます」

「…チャンスだと？」

セシリアの言葉に訝しげな表情を浮かべる。

「そう。このまま戦えばわたくしが勝つのは自明の理。今から泣いて謝るというのでしたら、許して差し上げないこともありますわ」

余裕の表情で言い放つセシリアに、思わず鼻で笑ってしまう。

「ハッ。何を言っている候補生風情が。貴様ごときに負けるはずがないだろ」

かたや命の軽さも知らず、死にかけたことのないISという揺り籠で守られてきた存在。

かたや人生の殆どを何も信じられない戦場で過ごし、頼れるものは自分の腕のみという極限の状況を必死に生き抜いた鴉。

確かに機体の慣れが違うだろう。しかし、絶対的な地力が違う。

『……………警告！敵IS射撃体制に移行。初弾エネルギー装填を確認————』

ISが警告をあげると同時に敵武装　スターライトMkⅡ　が俺に向けられる。

その銃口にエネルギーが収束しているが、軌道が見え見えだった。

「お別れですわ！」

『システム　戦闘モード　起動します』

黄緑色に光っていたバイザーが赤に変わるのを確認してからブースとを噴かし飛んでくるレーザーの弾をかわす。

「なっ！！」

心外だな。あの程度すら避けられないと思われていたとは。

「侮られたものだな。俺とノーブライトスカーレットも」

「くっ！…踊りなさい！わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！」

その言葉を引き金に幾条もの閃光が戦場を駆け巡る。

「このブルー・ティアーズを前にして初見でここまで耐えたのは貴方が初めてですわね。誉めて差し上げますわ」

開始から既に三十分近く経っていた。

「最初の威勢はどうなされたのですか？」

馴れない機体で闘っているため、反応しきれず何度もレーザーをくらってしまった。その上、

「（クソッ！！AMSの処理がズレる）」

そう、ここにきてAMSが仇になった。

もともと、AMSは十メートルもあるネクストを操縦を思考で行うためのもの。

だが、ISはパワードスーツだ。自らの身体を動かさなければいけない。その為、AMSを制御体と繋ぎ、動作補助に使ってたい。AMSが未完成のせいで、自らの動きとアシストの間で齟齬が生じ、思うように動けなくなっている。

「では、そろそろフィナーレと参りましょう！」

その言葉と同時に、彼女の肩の部分にあった非固定で存在したアーマーから四機のビットが飛び出し、アリーナの空を飛び交う。ブルー・ティアーズ。セシリアのISの名称の由来となった、思考制御型の遠隔射撃武装である。

四機のビットから次々とビームが放たれる。

「（こんな状況じゃ、ビットを避けるのに精一杯だ。今ここでライフルが来たら……）」

一撃の威力はレーザーライフル——スターライトよりもだいぶ劣るが、攻撃の数でそれを補っていた。

被弾が少しずつ増えていく中、右腕武器CWG—RF—200——実弾ライフルで撃ち抜くが、威力が低く何発も撃ち込まなければならぬ。

こんな動きが制限されている時にスターライトを撃たれたら堪ったものではない。だが、

「（なんで撃つてこない？）」

回避と射撃を続けながらも疑問が湧く。そう、先程から彼女はライフルを使わない。

「（……まさかビットの制御で手一杯なのか？）……それなら！」

一気に加速し、ビットを振り切る。幸いにもビットの速度はそう速くない。

セシリアに近づき、左手武器のレーザーブレードを構える。

「……これで、決める!!」

「かかりましたわね？」

不敵に笑うセシリア。そして

「ブルー・ティアーズは六機ありましてよ!!」

腰のパーツにつけられていた二つの円筒状パーツから一発ずつ、計二発のミサイルが放たれた。

「なっ、何だと!？」

レーザーブレードを使おうと接近しているため、ミサイルとの間に距離が撃ち落とせる程も無い。

「駄目だ、避けられん!!」

トップスピードで直進しているから、横に逸れることも出来ない。

「…………俺か、侮ったのは」

そのままミサイルが直撃。爆発に飲み込まれた。

オマケ

——何故か思い浮かんだ没ネタ

そこにあつたのは、——深紅だった。

体の殆どを覆う無骨な鮮やかな紅くれないの装甲。ジョイント部分に走る黒いライン。

目を隠すバイザーと横から伸びる一本のアンテナ。

流麗さが感じられない、悪く言えば荒削りな機体。

「名前は自分で設定しろ。時間が無い。初期化と最適化は実戦でやれ」

義姉さんに急かされ近づき手を触れる。

『やつと……。みせて、あなたのこたえを』

身体に埋め込まれているAMSから流れてくる意思。

『……………あ、まちがえた』

その言葉と同時にコアの記憶であろう映像が流れてきた。

それだけならよかった。だが、一気に入ってきた大量の映像は光の奔流となって俺を呑み込む……………。

「AMSから…光が逆流するー!!」

ギヤアアアアアアアア！！」

そのまま意識が落ちてった。

クラス代表決定戦――織斑秋十VSセシリア・オルコット

勝者――セシリア・オルコット

勝因――対戦相手が勝手に自爆したため

逆流

EP003―対峙する鴉と蒼い雫―（後書き）

コトブキヤのフラジールを買ったせいか、あんなのが思いついた。

反省はしている。だが後悔はしていない。

簪ちゃんに関してはまだ意見を募集してます。どうぞよろしく。

EP004―目覚める鴉と堕ちる雫―（前書き）

ああ、やっと書けた。

ただ、これからは学生なので宿題ガガガ……

本文で、セシリアの呼び方が違いますが、わざとです。そこまで気にしないでください。

—side others

「はあ、凄いですね、織斑君。ISに乗るのが二回目とは思えませ
ん」

その視線は、セシリアの放ったレーザーを避け続ける秋十を捉えて
いる。

「ああ、私も驚いている。あいつは昔から勝負事の類いには才能が
無かったのにな。」

「へえ〜。……あれ？どうしたんでしょうか。突然織斑君の動きが
悪くなりましたけど……」

その言葉が指すように、徐々にレーザーがかすり始めていた。

「あれは……。織斑本人の反応にISが着いていつてないな。山
田先生、あのISの稼働状況はどうなっている？」

「はい。織斑君のIS、名称ノーブライトスカーレットですが、現
在最適化の最中です。織斑君とのシンクロ率は依然高いままです」

その言葉に千冬は眉をひそめる。

「なに？ならば何故あんなに齟齬が………」

矛盾する状況に疑問を抱く二人。

その横で一夏と筈は黙って勝利を願いつけている。

「（勝つて。義兄さん）」

「（負けるな。秋十）」

だが、その祈りも空しく試合が動いた。

セシリアの腰部から分離した四基のビットにだんだんと防戦に追い込まれる秋十。

「千冬姉！！何あれ！？」

パンツ！！

「織斑先生と呼べ、まったく。…………アレの正式名称は『ブルー・ティアーズ』。パイロットのイメージによって動く半自立稼働式の砲台だ。オルコットのISの名もアレからとっている。

…………少し厳しいかもな。」

「織斑君の残りシールドエネルギー、100を切りました！」

徐に左手を構え突撃する秋十。

だが、セシリアの腰部からミサイルが発射。なす術なく直撃、爆発した。

「ッ！？義兄さん！！」

「…秋十！！」

その爆発を見て悲鳴をあげる二人。

「フツ。機体に救われたか、馬鹿野郎が……………」

徐々に晴れていく煙。そこから現れたのは形状が変わった秋十の姿だった。

——side 秋十

——フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

ミサイルが着弾した瞬間に目の前に文字が浮かんだ。
何も考えず、咄嗟にそれを押していた。

キュイイイン……………

甲高い駆動音がし、身に纏っていたISの姿が換わっていく。
さっきまでの鮮やかな紅から暗い緋とくすんだ鉄色になり、部分的だった装甲が全身を包んだ。

頭部は横がすっきりした物で、左後から一本のアンテナが伸びている。

胸部は前後に突き出し、前には銃口が一つ着いている。
右後方にミサイルポットがあり、反対には銃弾を大きくしたような奇妙な物がついている。

肩に大きな角ばった装甲がつき、左前面には鴉を模したエンブレムがあり右手には巨大なライフル。左腕には蟹のハサミのような物。

煙が晴れ、その姿を現していく。

「ファーストシフト!? あなた、いままで初期状態の機体で戦って・
・・!」

こつちを見たウォルコットが何かを言っているが、構ってられない。

「ハ、…………ハハハ。まさかまた、これに乗るとはなあ」

「何を言ってますの?」

「AMSも良好だ。行くぜウォルコット。派手に殺つてやる!」

それと同時に右手のライフル――MWG――KARASAWAを撃ち放つ。

「レーザーライフル!? な、なんですのこの威力!? 擦っただけでこんなに…………」

躲しきれず喰らったようだ。流石カラサワだな。

「まだまだ行くぜえ!」

パ、パ、パツ!

そんな音と同時に左肩後方から三つのビットがウォルコットの頭上へ射出される。

デiiiiiiン!!

そしてそこから小型レーザーの雨が降る。

「なっ、なんですのこれ!」

奴は避けるのに必死だ。だがなあ、

「こつちを忘れるなよなあ!!」

カラサワの引き金を引く。

青白いレーザーがカアオンという独特の音と共に飛んでいく。

「へ? キヤアアア!!」

ンウ!!

着弾と共に炸裂する。

視界が晴れないうちに^{オーバーブースト}OBを使い、今までと比べ物にならない速度で後に回り込む。

「これでえ……」

「なっ、速い!!」

左腕のレーザーブレード——MLB——MOONLIGHTを構え、斬りつける。

「トドメだあ!!」

ザシュッ!

アリーナに音が響き渡った。

『試合終了。勝者、織斑秋十』

「お疲れ、義兄さん」

「よくやったな、秋十」

ビットに戻り、ISを解除した俺を出迎えたのは一夏と箒だった。

「おう、二人とも。ありがとな」

手を伸ばし、二人の頭を撫でる。

喜色満面な一夏と、顔を赤くしつつも嬉しそうな箒。

「まったく、ヒヤヒヤさせおって」

そう言いながらも口元が緩んでる義姉さん。

「相変わらず、手厳しいねえ」

こういう時位は素直になって欲しいものだな。

「ところで義姉さん」

「……どうした？」

「それ、何？」

義姉さんの背後にあるそれを指差し聞く。

そこには、さっきまでは無かった白くて人よりも大きい物体が鎮座

していた。

「……………」

その場にいる皆が視線を逸らす。
こりゃ相当だな。

「……………これはだな、アイツが一夏にとついさっき送ってきた」

「……………まさか、東さん？」

「そのまさかだ」

溜め息がでる。ホントにあの人は天災だな。

「一夏、頑張れ。俺は先に戻ってる」

肩に手を置く。

「えっ、そんな！？一緒にいてよ義兄さん」

「俺はもう無理だ。……………箒、せめてお前だけはいてやってくれ」

「なっ、私がか！？」

「後は頼んだ」

逃げるように外へ出た。

反対側のビットの入口。壁にもたれ掛かり待っていると、暫くしてウォルコットが出てきた。

「ッ！？……私の事を笑いに來たのですか？」

怒りに肩を震わせながら叫んでくる。

「一つ、聞かせてくれ」

「…何を。油断した拳句素人になす術無く負けた。そんな私に何をッ！？」

「お前にとって、ISとは何だ？」

この戦い。一つだけ見過ごせなかった。

「それは……」

「直ぐには答えられないか？」

やはり、か。

「今の大多数の人間は誤解している。ISはどこまで行っても結局は兵器に過ぎない」

そう。ISを操縦できる事をステータスかファッションと勘違いしている人が多すぎる。

「兵器は戦場で使われる。なら、降伏等と温い事を言っな！戦場で

は生きるか死ぬか、殺るか殺られるかのどちらかしか無い。」

俺の剣幕に言葉を失っている。

「今回の勝負、貴様が初めから全力なら俺は負けていただろう。だが、結果はどうだ！？初めての機体に馴れてなかった俺の勝ちではないか！！」

その言葉に苦虫を噛み潰した顔になる。

「貴様はイギリスの代表候補なのだろう？責任ある立場なのだろう！？？」

「……ならば、NOBLESSE OBLIGE」その言葉を忘れるな」

——side セシリア

君の答を待っている。

そう残し去っていく彼の背中を呆然と見ながら先程の会話——とは言えない一方的な話を思い出す。

「お前にとって、ISとは何だ？」

怒りに任せ捲し立てていた私をジッと見据え問いかけてくる。

その真っ直ぐな瞳にのまれ、何も言えなかった。

「今の大多数の人間は誤解している。ISはどこまで行っても結局は兵器に過ぎない」

条約で禁じられているとはいえ、軍事利用されている事を見れば、一目瞭然だ。

「兵器は戦場で使われる。なら、降伏等と温い事を言っな！戦場では生きるか死ぬか、殺るか殺られるかのどちらかしか無い。」

彼の語る言葉が、まるで経験したかのようなその言葉が私に突き刺さる。

「今回の勝負、貴様が初めから全力なら俺は負けていただろう。だが、結果はどうだ！？初めての機体に馴れてなかった俺の勝ちではないか！！」

その通りだ。その言葉に私はきつと苦い顔をしているだろう。

「貴様はイギリスの代表候補なのだろう？責任ある立場なのだろう！？」

「……ならば、NOBLESS OBLIGE——その言葉を忘れるな」

NOBLESS OBLIGE——騎士道精神を表す言葉で、高貴な義務を意味する。

その言葉を聞いて、目から鱗が落ちた気がした。

私は今まで何をしてきた？

高貴な身分だからと、代表候補生になったからと胡座を掻いてその義務を、責任を果たそうとしてこなかった。

高い身分だからこそ努めなければならなかったのに、候補生だからこそ驕ってはいけなかったのに。

「ああ、敵いませんわね」

婿養子で、気弱で母の顔色を伺うばかりだった父と違い、明確な折れることのない意志を持つ瞳。

両親が事故で死に、残った名家と莫大な遺産。
それを狙う金の亡者から守るために、勉学に励み、ISに乗り、国家代表候補生にまでなった。

何の為にISに乗ったのか。何の為にここまで来たのか。それを思い出させてくれた。

「織斑……………秋十」

その名を呟くだけで、体が熱くなる。

「わたくしの、答……………」

彼の去った方を見て、鼓動が早くなるのを感じていた。

オマケだよ

NGシーンそのに

——フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

ミサイルが着弾した瞬間に目の前に文字が浮かんた。

何も考えず、咄嗟にそれを押していた。

キュイイーン…………

甲高い駆動音がし、身に纏っていたISの姿が換わっていく。

さっきまでの鮮やかな紅から暗い緋とくすんだ鉄色になり、部分的だった装甲が全身を包んだ。

頭部は横がすっきりした物で、左後から一本のアンテナが伸びている。

胸部は前後に突き出し、前には銃口が一つ着いている。

右後方にミサイルポットがあり、反対には銃弾を大きくしたような奇妙な物がついている。

肩に大きな角ばった装甲がつき、左前面には鴉を模したエンブレムがあり右手には——杭が付いていた。

煙が晴れ、その姿を現していく。

「ファーストシフト！？あなた、いままで初期状態の機体で戦って・
・・！」

こっちを見たウォルコットが何かを言っているが、構ってられない。

「ハ、……ハハハ。まさかまた、これに乗るとはなあ」

「何を言ってますの？」

「AMSも良好だ。行くぜウォルコット。派手にやってやる！！」

そして、OBを起動した。

フウィイイイン

背面の特殊なブースターが開き急激な加速をし、相手の背後に回り
右手の杭——KWB—SBR44を構える。

「なっ、速い！！」

「そのケツもらったあ！！」

だが、射出まで二秒ほどラグがあるため完全にこちらを向いてしま
い、それはウォルコットの下腹部に直撃した。

「イヤアアア！！」

その一撃でセシリアのシールドエネルギーは無くなった。

「ハッ、たった一発で盛大にイクとは。これだから女は……」

勝者――織斑秋十

勝因――前をとっついてしまい、セシリアが果ててしまったため。

知らない人のための解説。

秋十が放ったのは射突型ブレード。言わばパイルバンカー、杭打ち機。

通称とっつき。

その中でも、SBR44はアーマードコア・サイレントライン内では攻撃回数がたったの四回だが、その一撃は全右腕武器内で最も高い。

それこそ簡単にイってしまふほどに（当てればだが）。

EP004―目覚める鴉と堕ちる雫―（後書き）

最後の？ああ、ゲイブンの事ですか？

アレが頭の中に居座って、中々書けなかった（泣）

簪ちゃん、このままだとヒロインに入りますよ？構いませんね？そろそろ切りますよ？

でわ。

EP005—語る鴉と暗躍—（前書き）

遅くなりました。

何とか書けた。

EP005―語る鴉と暗躍―

「それでは、クラス代表は織斑秋十君に決定しました」

翌朝のホームルーム。教壇に立つ山田先生がそう告げると教室が沸き立った。

「やったね、義兄さん！」

俺の手を取って喜ぶ一夏。

「（忘れてた……………）」

決闘に氣をとられて、代表決定戦だったことがすっかり頭から抜け落ちていた。

「（今から何か言ったところで……………許してくれないだろうなあ）」

「

チラッと義姉さんを見てそう思う。

「ハア、憂鬱だ……………」

一夏にガクガク揺らされながら呟いた言葉は教室の喧騒に空しく掻き消された。

「秋十さん、隣よろしいかしら？」

昼、三人で昼食を食べているとウォルコットが話しかけてきた。

「む？構わんが」

何か名前で呼ばれた気がするが。

そんなことより、一夏と箒の機嫌がみるみる下がっていく。

「それで、どうしたんだウォルコット」

「私のことはセシリアと呼んでくださいまし。あと、そもそもウォルコットではなくオルコットですわ」

「……………そうなのか？それはすまなかったな。ちょっとした知り合いにウォルコットがいてな、てつきりお前さんもそうかと……………」

まあ、あのリリウムの家名と綴りは同じだしな。

「……………何か用か？」

不機嫌そうな箒。

「あの、秋十さん。昨日の答ですが……………」

「ん、もう見つかったのか？」箒を止め、セシリアを見据える。

「いえ、まだわかりませんの」

まあ、そうだろうな。一日程度で見つかるのは答とは言わん。それはその場しのぎでしかない。本気で探すからこそ長くかかるんだ。

「それで、その……」

セシリアが頬を染め、モジモジし始めた。

「私の答を探すのを手伝ってくださいませんか？」

「まあ、そのくらいなら……」

「な、ならさしあたって一緒にISの練習を……」

「あいにくと、義兄さんは私と箒と一緒に練習するんだから……」

セシリアの言葉を遮るように一夏が睨みながら言う。

「あら、お二人は訓練機なのでしょう？ならば専用機持ちの私が……」

「残念ね。私も専用機貰ったから」

そう、ビットにあった昨日のあの白い物体。それこそ束さんから一夏に送られた専用機、白式だ。

「それなら問題ない無いでしょ？」

「なっ……、代表候補でもないのに」

「それに、近接なら私が教えられるからな」

箒も加わり、言い争いが加速する。

「あー、盛り上がっていると悪いんだが三人とも」

「どうしたの？義兄さん」

「どうした？秋十」

「どうしたんですの？秋十さん」

同時にこちらを向く。

「俺の専用機なんだが、まだ調整が必要なんだよ。だから暫くは放課後は空かないんだよ。なあ、義姉さん？」

後から近づいてくる義姉さんに声をかける。

「先生と呼べ、まったく。……ほら、第三整備室の許可書だ。どこも空いてなくてな、少し割り込ませた。もう一人いるが、まあ仲良くやれ」

それだけ言つてさつさと帰っていく義姉さん。

「そういうことだ。そう気を落とすな。調整が終われば四人でやればいいだろ？」

微妙な顔をしてため息を吐かれたんだが、何故だ？

そして放課後。飲み物を二つ買い、第三整備室へ向かう。

扉を開け、中に入るが暗いまま誰もいなかった。

とりあえず椅子に座り、データを読み込む。

数分としないうちに、扉が開き一人の少女が現れた。

「……………誰？」

「ん？……………おお、今日から暫く同室させてもらう、織斑秋十だ。つっても、俺の名前ぐらいは知ってるかもしれないがな」

「……………私は更識簪」

簪……………どつかで聞いたような……………？

「ああ、打鉄式式の子か」

昔からの癖で情報収集は怠らない。その中に該当があった。

更識簪。

生徒会長の妹で、日本の代表候補生。

代表候補生ながらに専用機が未だに完成していない。

その専用機が完成していない理由は、白式の開発元が同じ倉持技研であり、初代ブリュンヒルデと世界で唯一ISを扱う男の妹のため……………という建前の下、束さんがごり押しし一夏の専用機の開発が優先された。そのせいで彼女の専用機、打鉄式式の開発は後回しにされたらしい。

「義妹が迷惑をかけたな、すまなかった」

「……………何で、知ってるの？……………あの人の差し金？」

「あの人が誰を指すのかはあえて聞かんが、昔からの癖だな。出来る限りの情報は集めてるんだよ」

「そう………なら、いい」

彼女はディスプレイを立ち上げ、作業に集中していった。

こちらも、データの読み込みが終わっていたので、作業を始めた。

キリがついたので、買っておいたお茶を飲み一息吐いた。

ふと簪の方を向くと、行き詰まっているのか手が止まっていた。

そっと近づき後から覗き込んでみる。

「へえ」。打鉄式式のデータか」

「ッ！？………見ないで」

睨みながら言うが、どうにも可愛らしく見える。

「それ、自分で作ってるのか？」

「………あなたも………馬鹿にするの？」

「馬鹿になんかするかよ。スゲエじゃねえか。俺にはさっぱりだよ」

「………でも、あなたも自分でやってる………」

「ありや調整だ。俺はちょっと特殊でな、他人には任せられないんだよ」

「…………男だから？」

「んゝ。ちょっと違うんだがな…………」

正確にはAMSだ。この世界には誰もいないだろうし。

「だから、一から自分でやっているお前のことを尊敬こそすれ、馬鹿になんかしねえよ」

話が切れる。ディスプレイに向き直った彼女の表情はわからないが、一瞬見えた顔は赤かった気がした。

俺も作業に戻るか、と背中を向けた時。

「…………妹は…………」

「ん？何か言ったか？」

「…あなたにとって…………妹は、どんな…………存在？」

どんな存在、か……。そりゃ、

「こんな俺を受け入れてくれた大切な存在だ」

「…………つけいれた？」

ああ、そうか。知らないよな。

「俺はな、一夏達とは血が繋がってないんだよ」

「……………え?…」

そりゃ驚くわな。

「丁度十年位前かな、血塗れで倒れてた俺を千冬義姉さんが拾って
手当てしてくれたんだよ。」

ちよつとヘビー過ぎたか?

「……………どうして?」

「何で倒れてたのかも、何で拾ったのかもそんなの知らないさ。た
だ、その時義姉さんに言われたんだよ。『弟にならないか?』って
その後一夏と会ったんだけどな、アイツ初めて会った同い年の、し
かもこんな髪の色をした人間を見て『お兄ちゃん?』とか言い出し
たんだぜ。笑っちゃうよな?」

「……………」

黙って聞く簪。

「だからな、俺を温かく受け入れてくれた義姉さんも一夏も大切な
存在で、こんな俺が護りたいと思える存在なんだ」

あー、言って恥ずかしくなってきた。
きつと柄にもなく赤くなってるんだろうな……………。

「……………いい、な。……………そう思えて……………うらやましい」

「何か姉妹のことで悩みでもあるのか？同じ、姉を持つ身だ。話だけでも聞こう。」

「……………いい。……………だいじょうぶ」

首を振り拒否するが、ちょっと強引にいかせてもらおうか。何かほっとけないし。

「ふむ、姉に対する劣等感か？」

「……………ッ！？……………あなたには……………関係、ない！」

触れられたくないことが。

「確かに関係ないが、俺も義姉に対して劣等感を持っていたしな」

「……………織斑先生……………に？」

「ああ、そうだ。なにせ義姉さんはブリュンヒルデだからな。剣で世界最強に登り詰めたから、周囲の『織斑千冬の弟』という期待が重かったよ。そんな色眼鏡で見られた拳句、何の才能も無かった俺を女尊男卑と髪の色も相まって、掌を返したように見下し始めた」

「……………そんな……………」

「そういうもんさ。まあ俺には一夏や仲の良い友達がいたからまだよかったがな。」

そんなこんなで、拾われた事もあって義姉さんにコンプレックスを

抱いてたんだよ」

俺には血塗れた存在という後ろめたさもあつたし。

「……………抱いて……………た？」

「ああ。下らないことで悩んでた俺に、義姉さんが言つたんだよ。
『姉は弟や妹を護るものだ。可愛がるこそすれ、迷惑には思わない
さ』ってな」

「……………」

「俺は、家族は支え合うものだと思つてゐる。この答をお前がどう思
うかは知らん。が、それぞれの答だ。自分で導き出せ。受け入れ欲
しいなら、誰かを受け入れる。殻に籠つてたらいつまで経つても答
は見つからん」

こんな時間だ。

わざとらしく呟き片付けを済ませる。

その間、彼女は何も言わなかった。

扉を開け、廊下に出る前に肩越しに言う。

「答を出すのが、受け入れるのが怖いなら、最初の一步位は手を引
いてやる。だから安心しろ。お前本人を、更識簪本人をちゃんと見
ている人はいるのだからな」

扉が閉まる。

その音をぼんやりと聞いていた。

さつき出ていった彼、織斑秋十。男で唯一のIS操縦者。

最初は彼が恨めしかった。彼自身には何の罪も無いのに、ただの八つ当たりだってわかっていてもそう思うことは止められなかった。噂で彼がクラス代表になった事も知っていたし、イギリスの代表候補に買ったのも聞いていた。

だから、彼も天才なんだろうと勝手に思っていた。

けれど違った。彼も何の才能も無く、姉と比べられ貶されていたらしい。

まるで私だと思った。

才気溢れる姉。成績優秀容姿端麗、生徒会長で、自分で専用機を造り、学生にしてロシアの国家代表。

そんな姉と比べられる私。

少しでも追い付こうと頑張っても『更識楯無の妹』というガラス越しにしか見られない。

誰も更識簪という人間を見てはくれなかった。

彼が、うらやましい。

周りに認められ、姉に受け入れられた彼が。

私も、彼みたいになれるかな？あの人に、お姉ちゃんに受け入れられるかな？嫌われたり、しないかな？

……怖い。

「……怖いよ、お姉ちゃん」

涙で視界が滲み、恐怖で混乱する。

『受け入れ欲しいなら、誰かを受け入れろ。殻に籠ってたらいつまで経っても答は見つからん』

不意に彼の言葉が頭に浮かんだ。
力強く、ぶっきらぼうな言葉を。

「……私が……受け入れる？」

ああ、なんだ。逃げていたのは私か。
意地になって、一人で専用機を作ろうとしていたのは。

「……フフツ。……不器用な人」

彼の最後の言葉を思い出す。

『答を出すのが、受け入れるのが怖いなら、最初の一步位は手を引いてやる。だから安心しろ。お前本人を、更識簪本人をちゃんと見ている人はいるのだからな』

なんて……、なんて不器用でぶっきらぼうで、優しいのだろう。

そうだ。まずは彼を誘ってみよう。
きっとそれが私の一步だ。

『ハア〜イ。元気にしてる?』

携帯から聞こえる声に思わず顔をしかめる。

「何故俺の番号を知っている? スコール」

『あら、愚問ね。貴方の情報源、一体誰だと?』

「はあ、まあいい。……それで? 一体何の用だ」 『貴方の模擬戦、
実力……』とは言い難いけど、見せて貰ったわ』

「そうか。それで、依頼はどうなった?」

『請けてもらうわ。ただ、今は丁度いいのがないのだけれど』

「ならいい。タダで請けるのは最初の二つだけだからな?」

『わかってるわ。期待してるわよ、秋十』

電話が切れる。

「ハア……。面倒な事になった。だがそれも答のため…か」

遅くなっちまったなあ。一夏に怒られる。

寮への帰り道、そうばやく顔はきつとわらっていただろう。

EP005—語る鴉と暗躍—（後書き）

簪登場！！

中々書きにくい。可愛く書けたかな？

それでは

感想、意見、歓迎しよう。盛大にな

EP006―導く鴉と踏み出す少女―（前書き）

難産だった。その上、無理矢理感が否めない。

それでは、どうぞ

EP006―導く鴉と踏み出す少女―

翌日も退屈な座学の授業が終わり、一夏達に断ってから整備室に向かう。

「お？お前さんか。今日は早いな」

室内には既に彼女がいた。

「……………うん」

そのまま適当に挨拶を済まし作業を始めようとしたが、いつまで経っても彼女は始めようとせず、俺の背中をジッと見続けていた。

「……………何か用か？そんなに見られると集中出来ないんだが……………」

「えっ！？……………あ……………」

慌てて目を逸らす。けれど、何か言いたそうにチラチラこっちを見ている。

ため息を一つ吐いてから彼女に向き直る。

「言いたいことがあるならはっきり言え。ここには俺とお前しかないんだから」

「……………い……………一緒に……………て……………い……………」

「なんだ？」

「一緒に……手伝って、欲しい」

「手伝う……専用機のか？」

「……そう」

「……それが答への第一歩か？」

昨日の会話。それに彼女は律儀にも応えようとしている。

「……ううん。これは、スタートラインに立つため。……今まで逃げていた私が、……変わるための！」

「そう、か」

一日でこうまで変われるとは。

自然と口が緩む。

「……むう……わたし、子供じゃ……無い」

「……お？スマンな。」

どうやら無意識のうちに彼女の頭を撫でていたようだ。

……しかし、撫で心地がいいな。

「いつ……いつまでも、撫でないで」

口ではそう言うものの、手を振り払おうとはしない。存外悪く思われてはいない……いや、それこそ自惚れか。

「ああ、スマンな。お前さんが可愛いもんだからつい……」

「か、かわ……」

顔を赤くして俯く。

「さて、時間も余り無いことだし始めようか？」

「……うん。あと……名前で、呼んで……ほしい」

その言葉に口元が綻ぶ。

「そうか……じゃ、頑張ろうか……簪」

「うん！」

「とは言ったものの、俺にはそういう知識は無いんだよなあ……」

頭を掻きつつ呟く。

「システム面が出来てないんだよな？」

「……そう」

「どんなシステムだ？モノによっちゃあ俺のデータ使えるけど」

「…マルチ・ロックオン」

マルチ・ロックオンだと……複数ロックと同じでいいのか。

「なら、FCSのデータを使うといい。複数ロックできるタイプを使ってるから」

PLS―SRA02が無難かね。

「いい………の？」

「勿論だ。ただ、それ以外は役に立たないだろうけど」

「ううん。………大丈夫、だよ」

「ならいいんだが。………やっぱり誰か他にも頼まないと無理かな」
その言葉に簪は顔を暗くする。

「怖いのか？」

「………うん」

「どうして？」

できるだけ優しく問いかける。

「………あまり、知らない人が………受け入れてくれるか、分かんなくて」

「だったら、知ってる人に頼めばいいじゃないか」

「……………え？」

「いるだろ？お姉さんが」

「おねえ……ちゃん？」

「そう、会長だ。簪にとっては遠い存在かもしれない。けど、いつまでも逃げてないで。せつかく今日勇気を出したんだ。ならあと一歩を踏み出そうぜ」

「でも……………」

躊躇う簪に手を差し出す。

「言っただろ？手を引いてやるって。ほら、行こうぜ。それでどんな答に辿り着こうと、俺が着いていつてやる。」

確かにどう思われてるか分からなくて怖いだろう。でも本当の思いを話さなきゃ、いつまで経っても変わらない」

自分のコンプレックスが相手だ。その恐怖は計り知れないだろう。けど、それに勝たなきゃ意味がない。

「弱い自分が嫌いなんだろ？何も出来ない自分が嫌なんだろ？」

口を閉ざしたまま、首肯するだけ。

「だったら、がむしゃらでいい。一歩ずつ、少しずつ歩いて行こう。そうすればいつか、自分の好きな所が、自分の強さを見つけられるから」

あと一押しかな。

こんなにいい子なんだ。できれば幸せになってほしい。なら、たとえ強引にでも引っ張って行つてやる。

「その道のりに何があるか分からない。険しい道かもしれない。壁に行き当たるのかもしれない。一人では無理なら、その時は俺と一緒に歩いてやる」

震えながらも、少しずつ手を伸ばす。

「だから、踏み出そう。最初の一步を」

そして簪はその手を――

「……………うん！」

――握った。

生徒会室の前、簪は不安と恐怖と緊張で震えていた。

「怖がるな、とは言わん。ただ本音を、どんなに不恰好でもいい、お前の気持ちをありのままぶつけてやれ！」

それだけを言い、横に移動する。

顔を上げた簪はその眼に決意を秘め、生徒会室の扉を叩いた。

『開いてるわよ』

扉の向こうから聞こえる声にピクリと肩が跳ねる。

震える手を伸ばし、扉を開く。

「……………えっ……………簪……………ちゃん？」

中に入った私と目があり、呆然とした表情でお姉ちゃんが呟く。

「……………したの？」

怖い。恐怖で頭がぐちゃぐちゃになる。足が震えて逃げ出したくなる。

イヤだ。嫌われたくない。拒絶されたくない。イヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ。

……………怖いよ。

『怖がるな、とは言わん。ただ本音を、どんなに不恰好でもいい、お前の気持ちをありのままぶつけてやれ！』

そうだ。彼が言ってた。

『言っただろ？手を引いてやるって。ほら、行こうぜ。それでどん

な答に辿り着こうと、俺が着いていつてやる』

『がむしゃらでいい。一步ずつ、少しずつ歩いて行こう。そうすればいつか、自分の好きな所が、自分の強さを見つけられるから』

『一人では無理なら、その時は俺と一緒に歩いてやる』

『だから、踏み出そう。最初の一步を』

私はやっとスタートラインに立ったんだ。

彼が立たせてくれた。勇気をくれた。道を探してくれた。手を引いてくれた。

貰ってばかりでダメダメな私でも、彼は……秋十は優しく言ってくれた。

あの言葉が心に響く。今こそ、今だからこそ勇気を出して、一步を……私の一步を！

「……おねえ……ちゃん……」

「ッ！……うん……簪……ちゃん」

掠れて、震えて、弱々しくて。

そんな私の言葉にお姉ちゃんが返事をしてくれる。

「……わた……わたし、の……専用機……てっだ……て……」

「……簪……ちゃん……」

お姉ちゃんの目からポロポロと涙が零れはじめた。

「……やっと……… やつと私を頼ってくれたのね………」

溢れる涙を拭わず、私をそっと抱きしめる。

「ずっと……… 頼って欲しかったの。簪ちゃんが私をどう思ってるか知ってて、大好きな簪ちゃんにどうもしてあげられなかったことが、歯痒かった」

その言葉に嗚咽が止められなくなる。

「……おねえ……… ちゃん………」

「……… うん」

「……わたし……… わたしも………」

「……… うん！」

「わたしも……… ほんとは……… おねえちゃんが……… すきだった。かつこよくて、懂れてた。……… でも……… 意地になって………」

心が融けていく。ずっと固まっていた私の本音。気づかないふりをしていた。きつと嫌われてると思って、心の奥底にしまい込んだそれ。

でも彼のおかげで勇気を出せて、お姉ちゃんに受け入れられた。

私……… 強くなれたかな？

ありがとう…………秋十。

——side 秋十

微かに聞こえた嗚咽もやみ、暫くして簪と会長が出てきた。
二人とも目が赤いが、手を繋いでる。その姿を見て、結果は十分理解できる。

「よかったな、簪」

「うん！……………ありがとう、秋十」

小さいが、しっかりしたその言葉に、つい手が頭に伸びる。

「ん……………」

されるままな簪に、顔が綻ぶ。

「私からもお礼を言うわ。ありがとう、織斑君」

「気にしないでください。俺がほっとけなかっただけですから」

二人のスッキリした声と表情が、少し眩しく感じる。

「さて、こんな時間です。二人で夕食を食べてきたらどうです？」

「……秋十は？」

首を傾げて聞く簪に苦笑をする。

「せっかく仲直りしたんだ。積もる話もあるだろう？二人で行ってきな」

「え？……うん」

「そういうことです会長。どうぞ、行ってきたください」

「ええ、そうするわ。重ね重ねありがとうね？」

「構いませんよ。じゃあな、簪。また明日」

「うん！」

仲良く話ながら去っていく二人。その姿を出来る限りの笑顔で見送る。

やがて見えなくなり、廊下が静かになる。

ドンッ！！

壁を叩く音が廊下に響く。

「（ちくしょう。眩しすぎるぜ、この野郎）」

薄汚れた俺には直視できない。余りにも住む世界が違いすぎる。なにより、

「（あれを羨ましいとまだ思えたのか、俺は……）」

そのことが一番動揺させた。嘗て切り捨て、もはや手の届かぬその光に。

暫くして立ち直り、寮へ戻る。とてもではないが、食堂へ行く気にはなれなかった。

部屋へと歩いてると、背中に軽い衝撃が走った。

「にーいさん！……どうしたの？」

どうやら一夏が飛び付いてきたようだ。

「………何でもないさ。それで、何か用か？」

「あ、うん！一緒に夕食に行こー！！」

パツと離れ、俺の腕を取って食堂へと引っ張る。

「ちょっとは落ち着け。食事は逃げないんだから」

俺の顔には苦笑が浮かんでいるだろう。

だが、こんな日常も………悪くない。

EP006—導く鴉と踏み出す少女—（後書き）

学校が始まるので、更新速度が落ちると思います。

意見、感想よろしくお願いします。

EP007―戦う鴉と完成させた少女―（前書き）

遅くなつてすみませんでした。

追試の課題が大変で大変で。

このままだと二年生を繰り返すハメになりそうだという……。

相変わらず無理矢理感があるかもしれませんが、どうぞ

EP007―戦う鴉と完成させた少女―

「義兄さんは、私達と一緒に練習するの!」

「秋十は、私と闘うの!」

目の前で簪と一夏、箒、セシリアの三人が睨みあっている。
四月も終わり頃、アリーナの一角で一触即発な空気が漂う。

どうしてこうなった。

視界の隅に入るニヤニヤしている会長にうんざりしつつ頭を抱える。

あれから、会長と仲直りができた簪は彼女と整備科の生徒の協力を
得、数週間で専用機―打鉄式式の完成に至った。

俺の荷電粒子砲とFCSのデータ、会長の稼働データを使ったそれは
第二世代ながらもかなりのスペックに仕上がり、簪も満足な様子。
門外漢な俺はデータを渡した後すぐに退散。一夏達とISの練習を
しつつ暇な時には差し入れを兼ねて様子見に行った。

何も出来ないかわりに完成したら試験運用は相手になる、と約束を
していた。

そして完成し、今日の放課後模擬戦をする予定だった。

だが、今起きているのは一対三の睨み合い。

簪も成長したなと場違いな事を考えながら原因となったほんの小一
時間前の事を思い返す。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑兄妹、オルコット。試しに飛んでみせる」

今日の最後の授業。晴れた空の下、義姉さんが担当のクラスで俺達専用機持ちは前に立たされている。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

せかされて、集中する。

思い浮かべるのは数十年前の愛機。レイヴンとして戦場を翔た俺の翼。消せぬ罪の証。

「（来い）」

心の中で呟く。すると、全身に薄い膜が広がる感覚と共に粒子が溢れ、ISとしては歪な全身装甲のACが展開される。

ふと見るとセシリアは既にブルー・ティアーズを装備して浮いている。少し遅れて一夏も白式を展開する。

「よし、飛べ」

まず、セシリアが反応し、急上昇し始める。俺も飛ぶため、膝を曲げてから足のスラスターを噴かしながらジャンプする。背中のブースターも起動させ、セシリアがいるところまで昇っていく。

しかし、便利だな。ノーマルACは空中で留まってられないのに、ISだとPICだとかの関係で浮かんでいられる。

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

通信回線から叱咤の声が聞こえふと見ると、一夏が遅れてやってきていた。

「一夏、所詮はイメージだ。やり易いようにやれ」

「そう言われても……。大体、空を飛ぶ感覚自体あやふやなのよ。なんで浮いてるの、これ」

俺は知らん。とばかりに視線を逸らし、セシリアの方を見る。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「わかった。説明はいいわ」

げんなりした表情で断る一夏。

貴方は？と視線で問いかけてくる。

「いや、俺も結構だ。正直その類いの話は理解できん」

「そう、残念ですわ。ふふっ」

頭を掻きつつ断るが、セシリアは嫌味も皮肉も無く、楽しそうに微笑む。

変わったものだな、と思う。

最初のような高圧的な態度も無くなり、一夏や箒と競うように俺をISの練習に誘ってくる。

「秋十さん、よろしければまた放課後に一緒に練習なさいませんか。その時はふたりきりで――」

「秋十っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

通信回線からの怒鳴り声に遠くの地上を見下ろす。

そこには、箒にインカムを奪われおたおたしている山田先生がいた。無茶をするなあ箒もと考え、視線を戻すと一夏とセシリアが睨みあっていた。

「抜け駆けは禁止だよ、セシリア」

「あら、なんのことですか、一夏さん」

何をやっているんだコイツらは？

「織斑兄妹、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では、秋十さん、一夏さん、お先に」

言って、すぐさま地上に向かうセシリア。ぐんぐん小さくなり、難なく完全停止もクリアしたらしい。

「んじゃ、一夏先に行くぜ」

軽く手を振り、PICを切りフリーフォールする。重力加速でかなりのスピードに達するが、途中から背中ของブースターを点ける。だんだんと落ちる速さも遅くなり、停止すると同時にブースターを切

り、PICを起動。

見ていたクラスメートがわき上がり、チラリと見た義姉さんも一つ頷いていた。どうやら十センチは出来たようだ。

次は一夏の番なので上を見ていると、勢いよく降りてきた。

「——キャアアアアアア——」

——ズドオオンツ!!!!

…………訂正。落下してきた。

「おーい。大丈夫かー？」

穿たれた穴に呼びかける。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けて
どうする」

「…………すみません」

フラフラと上昇してきて俺の横に浮かぶ。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

「教えたって……。あんな擬音じゃわからないじゃない」

どうやら筈の教えたってのはそうとうらしい。

しかし、お前ら今授業中……。

「おい、馬鹿者ども。今は授業中だ。後でやれ」

箒を押し退け一夏の前に立つ義姉さん。

「織斑妹、武装を展開しろ。それくらいは自在に出来るようになっただろう」

「は、はい」

「よし。では始めろ」

目を閉じ右手を突き出す一夏。そこから光が放出され、像を結ぶ。光が収まると、その手には一振りの刀―雪片弐型が握られていた。

「遅い。〇・五秒で出せるようになれ」

その言葉にガクツとうなだれる一夏。

義姉さんは気にも留めず俺の前に立つ。

「よし、では織斑兄。展開しろ」

「了解」

ふむ、カラサワと月光でいいだろう。

代表戦の時に使った二つの武器が現れる。

「まあ、及第点だ。近接武器は……」

「これです」

左腕に着いている月光（MLB―MOONLIGHT）を見せる。

OKなのだろう。そのままセシリアの方へ行く。

「オルコット、武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、横に突き出す。

一瞬だけ光り、その手にスターライトmk？が握られる。

「さすがだな、代表候補生。――ただし、そのポーズを止める。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ？正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。いいな？」

「――、はい」

義姉さんに睨まれ反論を呑み込むセシリア。

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ？あ、はっ、はいっ！」

何かを考えていたのか、反応が鈍るセシリア。

銃器を光の粒子に変換（『収納^{クロース}』）、そして新たな近接用の武装を『展開^{オープン}』する。

「くっ」

「まだか？」

だが、さっきの一夏みたいに中々形にならず、光が空中にさまよっている。

「す、すぐです。——ああ、もうっ！《インターセプター》！」

ヤケクソ気味に叫ぶ。それによって光は武器として構成される。だが、これは教科書の頭の方に書かれている、所謂『初心者用』の手段だ。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑兄との対戦では最後に一太刀浴びたように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

歯切れが悪く言い淀む。ややあってこちらをキッと睨まれた。

『貴方のせいですわよ!』

プライベート・チャンネルが送られてくる。

『あ、貴方が、私に飛び込んでくるから……………』

んなこと言われてもな…………。

『せ、責任をとっていただきますわ!』

責任って…………。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑妹、グラウンドを片付けておけよ」

潤んだ目で助けを求めてくる。

「わかった。わかったから、そんな目で見るな」

「やったー!ありがとう、義兄さん!」

とたんに嬉しそうな顔になる。

ハア。一体いつ義兄離れできることやら…………。

「秋十、今日こそは練習するぞ!」

制服を着、鞆を取ってからアリーナへ向かおうとすると、箒に話しかけられた。

「いや、今日は……」

「そうですわよ！昨日もやっていませんもの。今日こそは一緒に練習していたたきますわよ！」

そのまま右手を箒に、左手をセシリアにとられ、一夏に背中を押されながら問答無用でアリーナまで連れ去られていった。

着いたら、待っていた簪とそのまま言い争いが始まり、今に至る。

「義兄さん、どっちとやるの！？」

いつの間にか一夏が詰めよって来ていた。

「もともと簪との約束があるんだ。話を聞かなかったお前らが悪い」

むくれる一夏達。対照的に喜ぶ簪。

「むう……。わかった。後で説明して貰うから」

「わかった、わかった。………すまん簪。準備はいいか？」

「うん」

ある程度離れ、両者共にISを展開する。

「二人とも、準備はOK？」

「こっちは大丈夫だ」

「こっちも……だいじょうぶ」

「それじゃ、始めましょ」

その言葉を合図に模擬戦が始まる。

まず先手は簪だった。式式の機動性で間合いを詰め、近接武器の超振動薙刀―夢現で斬りかかってくる。

俺には実体剣は無いので、軽く避け牽制にスラッグガンをばら蒔きながら後退する。

ある程度下がったところで、細かくブーストを点けながら上下左右に動く。

その間にも右腕バズーカを放つが綺麗に避けられる。

簪も式式の両肩にある荷電粒子砲―春雷を撃ってくるが、距離があるため簡単に避けられる。

このままでは千日手だ。あくまでもデータ収集なので、満遍なく使わせなければならない。

意を決し、スラッグガンと両腕の装甲を収納。補助ブースターとデュアルブレードに換装する。

「行くぞ、簪！」

春雷を放った直後、隙間を縫いOBで急接近する。

「くっ………!!」

ガキッ！！

簪も夢現で応戦するが、犠牲覚悟で左腕で受け止める。装甲にダメージが入りシールドエネルギーがガリガリ無くなっていくが、すぐさま右腕のブレードを振るう。

ザシユッ！！

近距離からクリーンヒットし、それに今度は簪が距離を取ろうとするが夢現が離れたところで左腕を振る。ブレード自体は届かないがそこから光波が飛び、さらにダメージを与える。

さらに追撃をかけようとするが、粒子砲が眼前に迫っており、慌て回避。直撃は免れたものの、多少擦りダメージを喰らった。

「クソッ！」

姿勢を戻し腕を変換。通常の腕に戻しマシンガンを展開する。

だが、こちらが撃つ前に簪が山嵐を使用。数十発のミサイルを打ち出した。

胸部の銃口から細かいレーザーが出、二三発撃ち落とすが大して意味もない。PICを切り落下する。ミサイルも追尾して来るが、着地する直前に少しだけブーストを使用。着地硬直を無くしすぐに前へ全速で逃げる。

曲がりきれず半数は地面に着弾するが、それでもまだ追ってくる。だがそれを無視し、簪に向けてマシンガンを乱射しつつ、OBして近づく。

「ウオオオオオオオ………！！」

「……………ッ!?」

ザシュッ!!

殺られる前に殺る。

驚く簪に対し月光を使い斬る。

ISが相手の残りシールドエネルギーを伝えて来る。その僅かな数値にもう一撃を与えようと近づく。

が、警告音と共にブーストが切れる。

「何ッ!?……………チッ!ここでエネルギー切れかよ……………」

「これで……………終わり!」

突如止まり、落下し始めた俺に粒子砲を撃ってくる。
前から粒子砲。後から十発近いミサイル。
なす術無く着弾し、爆発した。

「試合終了。勝者——更識簪」

「お疲れさま、二人とも」

模擬戦が終わり、ISを解除したところに会長がやってきて労いの言葉をかける。

「どう、だった……お姉ちゃん？」

「十分よ、簪ちゃん。頑張ったわね」

「うん！」

すっかり仲がよくなった姉妹について苦笑してしまう。

「秋十っ！！」

「ん？どうした、簪」

会長と話終えた簪がトコトコ駆け寄ってくる。その可愛い動作に頬が緩んでしまう。

「手伝ってくれて、ありがとう！」

「最初に言っただろ？出きることは手伝って。俺に出きるのはいくらいいかない。それ以外はお前の頑張りの結果だ。よくやったな」

微笑みながら頭を撫でる。

「……………うん」

顔を赤くし、俯く。

ふと会長を見ると、こちらを微笑ましいものを見る眼差しで眺めていた。

「ンンッ。…………ほら、簪。さっきのデータを見に行くぞ」

「あ……………うん」

一瞬足りないような表情を浮かべたが、了承する。

「会長も、皆さんもいいですね？」

「ええ。構わないわ」

ニヤニヤしながら言う会長。他の整備科の人達も同じように返事をする。

「ああもう！ほら、行きますよ！！」

その視線に耐えられず、さっさと外へ向かう。

「あら、拗ねちゃった？じゃあ、行きましょう」
ハイ

背後から聞こえた声に溜め息がでる。

……………調子狂うなあ

「ふうん、ここがそうなんだ……」

日も暮れ、出歩く生徒も少なくなった時間。IS学園の正面ゲートにポストンバックを持った、小柄な少女がいた。左右の高い位置で結んである、肩にかかるくらいの髪が夜風になびく。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットからくしゃくしゃになった紙を出し確認する。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよ」

文句を言っても何も変わらない。少女は少しイライラしながら紙をポケットにねじ込む。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

ぶつくさ言いつつも歩き出す少女。

一瞬ISで飛んで探そうか、などと考えたが余計面倒なことになると思い自重する。

歩きながら少女は、再びこの日本に来た理由を思い返していた。

「（元気にしてるかなアイツ）」

思い出したのは、初恋の男の子。

嘗て余り馴染めずクラスから浮いていた少女を救ってくれた、歳不相応に大人びた少年。

「（まあ、何だかんだで元気なんだろうな）」

「今日は……………がとう……………」

ふと、話し声が聞こえた。

そちらを見ると水色の髪をした女子生徒が校舎から出て来ていた。

「（ちょうどいいや。場所聞こつと）」

声をかけようと近づく。

「そう何度も言わなくても構わんよ。俺が好きでやってることだから」

新たに聞こえた声に少女は反応し、足を止める。

男の声。それも自分が知っている人の。

予期しなかった再開に、少女の鼓動が早まる。

「（！！あ、あたしってわかるかな……………？さ、三年ぶりだし……………）」

大丈夫、大丈夫と言い聞かせ再び歩き出す。

「しゅー——」

思わず裏返った声に恥ずかしくなり、赤くなる。

「でも、わたしが秋十に助けて貰ったのは事実だから……………」

「そうか。お前が満足するなら、受け取っておこつ」

「うん!.....あ.....あと、少し遅くなっちゃったし、.....その.....いつ、一緒にご飯食べよ!!」

「おう、いいぞ。なら少し急ごうか」

仲良く話ながら歩いていく二人。

「——誰あの人?どうして、そんなに親しそうなの.....?」

少女が男子を見る瞳に既視感を感じた。

そう、まるで中学の頃の男友達の妹のような視線。恋する乙女のそれに.....。

さっきまでの胸の高鳴りが嘘のように静まり返って、逆にひどく冷たい感情と苛立ちが流れ込んできた。

「(ふーん。また秋十は別の女と仲良くなるんだ.....)」

女癖が悪いような言い方だが、彼に自覚が無い分質が悪いのかもしれない。

それからすぐ、少女は総合事務受付を見つけることができた。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、鳳鈴音さん」

相想のいい事務員の言葉も少女——鳳鈴音の耳には届いていなかった。

鈴音は不機嫌そうに唇を尖らせながら聞く。

「織斑秋十って、何組ですか?」

「ああ、噂の子？一組よ。鳳さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって」

事務員の言葉を無視するかのようには鈴音は質問を続ける。

「二組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうするの？」

鈴音の質問に戸惑ったように聞き返す。

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってって——」

ニツコリと笑っているが、その口の端はピクピクひきつっていた。

EP007―戦う鴉と完成させた少女―（後書き）

昼間ラストレイヴンをやっていたら、NIOHと月光だけでレイジングトレント？の撃破ができた。

ハッ！？これがドミナントの力か

などと一人で戦々恐々としていた。

四脚パル以外にとっつきで倒したのは初めてな自分。
ネットの動画を見て、自分の未熟さを感じてしまう……。
でわ。

意見、感想お願いします。

EP008―再会する鴉と少女―

「というわけです！　織斑くんクラス代表就任おめでとー！」

女子の誰かがそう言ったと同時に、ぱん、ぱんっとクラッカーが乱射される。

今は夕食後の自由時間。場所は食堂。一組のメンバーは全員揃っていて、それぞれ飲み物を手に盛り上がっている。

壁には『織斑秋十クラス代表就任パーティー』と書かれたデカイ紙。実際のところ、パーティーという名目で騒ぎたいんだと思う。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

おい、さっきから相槌を売ってるやつ。お前は違うクラスだろ？

明らかにクラスのメンバー以上の人数が食堂にいる。おかしいだろ。何故にこんなに集まる。

というか、直前まで知らされてなかったんだが……。

「人気者だね、義兄さん」

「はあ……、こんな人気はいらんよ。というより、騒ぐ名目になっているだろ」

「あはは……」

引き攣った笑みで言葉を濁す一夏。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑秋十君に特別インタビューをしに来ました〜!」

女子一堂がオー、と盛り上がる。それとは逆に盛り下がる俺。

「あ、私は二年の黛薫子^{まゆずみかおるこ}。よろしくね。新聞部部长やってまーす。はいこれ名刺」

渡された名刺の名前を見る。画数多い名前だなあ…書くのに一苦労しそうだな。などと現実逃避する。

「ではまず織斑君! クラス代表になった感想を、どうぞ!」

「……は?」

ボイスレコーダーを突き出される。どうぞ、と言われてもな…。

「ほら、義兄さん。ガツンと言っちゃってよ」

「そう言われてもな……。まあ、がんばります?」

「えー。もつといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか!」

「……そんなセリフを言えと?」

この人が何を望んでるかわからん。
む、アイツの言葉がいい感じか？

「んじゃ、マツハで蜂の巣にしてやんよ……で」

「おお、いいね〜！ 捏造のしがいがあるよ！」

…堂々と捏造宣言していいのかよ。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方がないですね」

とか言ってるが、すぐ横でスタンバイしていたのは気のせいかな？

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したのかというと、それはつまり——」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑くんに惚れたからってことにしておこう」

「なっ、な、ななっ……！？」

恋だのなんだのはよくわからんが、

「何を馬鹿な」

いつそんな場面があった？

「そ、そうかなー？」

「そ、そうですね！　何をもって馬鹿としているのかしら！？　だ、大体あなたは――」

セシリアから責められる俺。何が気に食わなかったんだ？

視線で一夏と篤に助けを求めるが、ため息を吐いて相手にされない。

「はいはい、とりあえず二人で並んで。写真取るから」

「えっ？」

「せっかく代表をかけて争ったんだからねー。ツーショットもらうよ。あ。握手をしているといいかもね」

「そ、そうですね……。そう、ですわね」

何故かモジモジしながらチラチラとこっちを見るセシリア。
なにがそんなに恥ずかしいのか。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて――」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

先輩は俺とセシリアの手を引いて、握手させる。

「……………」

なんだろう。一夏と筭の視線が怖くなったのだが。

「よし、それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え、えつと…？」

「ハイ、時間切れ」。正解は74・375でした」

パシャッと切られるシャッター。

「……なんで全員入ってるんだ？」

いつの間にかその場にいた生徒が全員俺たちの周りにいる。さらには一夏が恐るべきスピードで俺と腕を組んでいた。

結局この『織斑秋十クラス代表就任パーティー』なるものは十時を過ぎるまで続き、俺に女子の恐ろしさを見せつけたのだった。

「ああ、やっと終わった。疲れたぜ」

部屋に帰るなりベッドに倒れ込む。

「そうかな？義兄さんも楽しそうだったように見えたけど」

「んなわけあるか」

「そう……。ならいいけど。ところで、にいさん」

「……………どうした、一夏？」

突然声の雰囲気が変わったのでそちらを向くと、目のハイライトが消えた一夏が立っていた。

「ほうかこのあのこはだれなのかな？」

「あ……。ああ。簪のことか」

「へえ。簪っていうんだ。仲、よさそうだったよね。いつの間になかよくなったのかな？」

「……………知らん。いつの間になつかれてただけだ」

今の一夏には、姐さんや義姉さんとは違う恐さがある……………。

「ふーん。じゃあ、いつ会ったの？」

「……………俺の専用機を調整するために整備室に行った時です」

「へえ……………あの時か。……………私も着いていけばよかった。……………じゃあ、その時何があったの？」

途中小声で聞き取れなかったが、聞き返せる雰囲気ではない。

「簪が、専用機を造るのに難航していたから手伝っただけだ」

「それだけ？それだけじゃないよね？」

「……………アイツと不仲だったアイツのお姉さんを仲直りさせた」

事実を伝えた筈なのに眉間を押さえてため息を吐く。

「ハア……………何で義兄さんはそんなに直ぐ女の子と仲良くなるかな？」

あの威圧感は消えたものの、ブツブツ言う一夏。

「今回は許してあげる」

……………そもそも、何故に責められていたんだよ。

「じゃあ、もう寝ても——」

「ただし！暫く私と一緒にのベッドで寝ること！」

「ハア？お前、いくら兄妹とはいえそれはマズイだろ」

「わかった？」

「いや、だから……………」

「わかった！？」

「……………ハイ」

その返事に嬉々として俺のベッドに入り腕を組んでくる。

「それじあおやすみっ」

「……………ああ、おやすみ」

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

昨日のパーティーと一夏の尋問により、いつもより就寝時間が遅くなった翌朝。眠気をこらえながら教室に入り、席に着くと近くのクラスメイトにそう言われた。

「へえ、この時期にねえ……………」

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

中国……………ね。

そう言えば、あいつも中国出身だったな。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」
自分の席に鞆を置きに行っていた筈のセシリアが、いつの間にか隣に腰に手をあてながら立っていた。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？ 騒ぐことのものであるまい」

これまたいつのまにかそばに来ていた筈。何故ここでたむろする。

「そうそう。他の女の子の事なんか気にせずに、義兄さんは目前の試合に備えてればいいんだから！」

隣の席の一夏も参戦。

「織斑くん、がんばってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてくるクラスは一組と四組だけだから、余裕だよ」

口々に応援？をするクラスメートたち。

「——その情報、古いよ」

教室の入口から割り込む声がした。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

そこには腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっている少女がいた。というよりあいつは——

「ん？……おお、鈴じゃねえか」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

トレードマークのツインテールを揺らしながら、ふっと小さく笑う
幼なじみだった。

「何格好つけてるのよ。似合っていないわよ、鈴」

「んなつ……！？なんてことを言うのよ、一夏は！」

普通のしゃべり方で一夏にツッコミをいれる。

確かにさっきの気取ったしゃべり方は似合わないな。

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！

そんな強烈な音と共に鈴の頭部に出席簿が振り下ろされた。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

相変わらず義姉さんが苦手だな、鈴は。

「また後で来るからね！逃げないでよ、秋十！」

「さつさと戻れ」

「は、はいっ！」

猛ダッシュで二組へ引き返していく。

「っていうか、アイツ代表候補やってたんだ」

帰っていった鈴の背中を見ながらなんとなく口に出した。だが、それに食いついた人がいた。

「……秋十、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「し、秋十さん！？あの子とはどういう関係で——」

クラスメートから質問責め。おい、馬鹿。今の時間を考えろよ——
|。

バシンバシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿ども」

義姉さんの出席簿の餌食に。ホントに容赦ないのな……………。

——side 篇

「（さっきの女子は何なのだ……秋十とずいぶん親しそうに見えたが…………）」

朝の一件。それが気になってなかなか授業に集中できない。

「（それに、秋十も一夏もまるで——）」

まるで、幼なじみと再会したような反応に見えた。

ムカつく。

「（幼なじみは私だろう……）」

怒りが込み上げてくる。それをどうにか押さえながら秋十の方を盗み見る。

秋十は真面目にノートをとっているようだ。

……………私が集中できていないというのに、お前は……………。

ますます腹がたつ。

少しくらい私を気にしたらどうなのだ。

「……………」

ふと、気づいた。

「（最近、私は空気になっていないか？）」

同じ部屋で暮らす一夏。イギリスの代表候補のセシリア。さらには昨日見た見知らぬ少女。

「（……………マズイ。マズイではないか！）」

ISの練習においても、秋十は十分強い。それこそ不慣れな一夏や訓練機では相手にならないほど。だから、忌まわしくもセシリアに頼らざるをえない。

日常においても、常に一夏が一緒だ。四六時中、おはようからおやすみまでずっと。一緒にいられるのは放課後や食事の僅かな時間のみ。

放課後も大抵用事とやらでない。

あのいつの間にか仲良くなっていた女子。どういう経緯で仲良くなったかは知らないが、放課後いないのもそのせいかもしれない。

「（……………！？私には幼なじみという肩書きしかないではないか！ー）」

衝撃の事実。さらに先ほどの転校生との関係によつてはそれすらも無くなる。

「（どっ、どうすれば……………）」

愕然としてしまう。

「篠ノ乃、答えは？」

「は、はいっ！？」

突然名前を呼ばれ、思わずすっとんきょうな声が出てしまった。

……………しまった、今は授業中だ。それも織斑先生の……………。

「答えは？」

「……き、聞いていませんでした……」

ばしーん！

と頭にきた痛みに頭を抱えてしまう。

それ以外にも理由はあるのだろうか……。

——side セシリア

授業中、一番後ろの席でぼんやりと考え事をしてしまいます。

「（なんなんですよ、さっきの方は！）」

やけに秋十さんと親しそうでした。

さらには一夏さんもお存知のようで……。

現時点で、一夏さんや篤さんという強力なライバルがいるというのに、さらに増えるなんてどうすればいいんですの？

おまけに……

「（昨日の方とも仲がよろしそうでしたの）」

昨日アリーナで会った方。どういった関係かは一夏さんもお存知ないようでしたが、ライバルには違いありません。

現状で一番秋十さんとの関係が小さいのに、さらに増える——しかも、秋十さんとの距離は先ほどの方がリードしているようでした。

「（ど、どうすればいいんですの？）」「

同じように走っていたら絶対負けてしまいます。おまけにあちらも代表候補の専用機持ちですし……。大きかったリードも無くなつてしまいます。

「（い、インチキですわ）」「

何がインチキなのはわかりませんが、そう思っています。どうイニシアチブをとればよいのでしょうか……。それも、他の方を突き放す程の。

「オルコット」

「……例えばデートに誘うとか。いえ、もっと効果的な……」

「……………」

ばしーん！

強制的に思考が中断させられました。

——side 一夏

「（ああ……。義兄さん）」

授業中にも関わらず昨夜の事を思い出してしまふ。

「（怒っていたとはいえ、あんなことを言ってしまうなんて……）」

暫く一緒に寝る。その一文のなんと素晴らしいことが……。

「（それに義兄さん、結構身体しまつてたな……）」

寝るときに抱きついた腕の感触を思い出す。それだけで興奮してくる。

どうして前から一緒に寝なかったのだろう。と昔の自分に文句を言ってしまう。

昔から義兄さんのことが好きだった。何だかんだ言いながらも優しくても気にかけてくれていた義兄さんが。

だが、それは今程ではない。ここまで好きになった理由は、私が誘拐されたあの事件。誘拐されて意識が曖昧になっていたが、確かに聞いた。

『もう、大丈夫だ。兄さんが助けにきたぞ。だから安心して寝てな。次に起きたら温かいベッドの中だ』

その言葉が私の不安を消し飛ばし、義兄さんの暖かさを感じて完全に気絶した。

それ以降、危険を省みず私を助けてくれた義兄さんに今まで以上の感情を覚えた。

「（温かかったな……）」

思わずニヤついてしまう。義兄さんへの感情が溢れ出すのが止めら

れない。

「（ああ、義兄さん、義兄さん義兄さん……………）」

「おい、織斑妹」

「……………はへ？」

目の前には出席簿を持った姉さんの姿が。……………あ、授業ちゅ

——
ばしーん！

——side 秋十

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

「義兄さんのせいよ！」

昼休み。三人とも開口一番に理不尽な文句をつけてきた。

「……………何がだよ」

この三人。午前中の授業だけで山田先生に五回注意、義姉さんに三回叩かれている。

義姉さんの授業中にぼーっとするなんてノーマルACでAFに挑む

ようなものだぞ？

「とりあえず食堂行こうや」

「ま、まあ……そうね」

「む……お前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですね。行つて差し上げないこともなくつてよ」

何か上から言われるが、気にしない。その程度で相手をしていたらコイツらだと面倒なことになりかねない。

その他数名のクラスメートも付いてきて、俺たちは学食に移動した。

券売機で日替わりランチを買い、カウンターに向かう。

「待っていたわよ、秋十！」

やせいの りんが あらわれた！

俺の前に立ち塞がったのは二組の転校生こと鳳鈴音だった。

「おう、鈴。今朝方ぶりだな。とりあえずそこをどけ。通行の邪魔だ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

「……………のびるぞ？」

「わ、わかってるわよ！大体、アンタを待ってたんでしょうが！なんで早く来ないのよ！」

ラーメンを持ちながらも待ってたようだ。
とりあえず食券をおばちゃんに渡す。

「にしても久方ぶりだな。……ちょうど一年か。元気だったか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病氣しなさいよ」

「人の不幸を願うのか……。なんてヤツだ」

少しおどけて返す。ふむ、こんなやりとりも懐かしいな。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！秋十さん？注文の品、出来てましてよ？」

大げさに咳払いする二人に会話を中断させられる。鯖の塩焼きを受け取り空いてる席に向かう。

「それで、鈴。いつ帰ってきたんだ？」

「そうよ、鈴。いつの間に代表候補になっちゃってるのよ」

「ここに来るためだからつい最近よ。代表候補だってそんなに前じゃないし。アンタこそ何IS使ってるのよ。びっくりしたじゃない」

「秋十、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！秋十さん、まさかこちらの方と付き合ってたっしやるの！？」

今まで蚊帳の外だった箒たちが棘のある声で訊いてきた。

「べ、べべ、別に付き合ってる訳じゃ……」

顔を赤くしてセシリアの言葉を否定し様とする鈴。

「別に鈴は幼なじみよ！義兄さんと付き合ってる訳じゃないわ」

「……………」

一夏の否定に睨み合う二人。

「何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

いきなり怒り出す鈴。

「幼なじみ……？」

怪訝そうな声を出す箒。

「ああ、そうだったな。箒が引越したのが小四の終わりか。鈴が転校してきたのが小五の頭なんだよ」

「それで、中二の終わりに中国に帰って行ったから会つのは一年ち

よつとぶりね」

「で、こっちが箒。言わなかったか？最初の幼なじみだ」

「ふうん、そうなんだ」

じろじろ箒を見る。それに負けじと鈴を見返している箒。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

挨拶をする二人だが、その間に火花が散った気がした。

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！！まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

顔を赤くして言葉に詰まるセシリア。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

妙に余裕と言った感じの鈴。嫌みでも何でもなく素だ。

「……………」

「い、言ってくれますわね……………」

箒は無言で箸を止め、セシリアはわなわなと震えながら拳を握りしめた。

それを気にも留めず何食わぬ顔でラーメンを食う。
そして何を思いついたのか顔を上げて聞いてくる。

「ねね、秋十。今日の放課後って時間ある？あるよね。久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あそこは去年潰れたぞ」

「そ、そう……………なんだ。じゃ、しゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？」

んー。特には無いのだが。去年はこれと言って言えるようなことは無かったしな。

「——あいにくだが、秋十は私とESの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

そんな話は微塵もなかった筈だが。

「そうですね。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの。特にわたくしは代表候補生ですから？ええ、秋十さんの練習には欠かせない存在なのです」

お前ら、勝手に決めるなよ。そんなだから何度も予定が合わないんだよ。

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、秋十！」

スープを飲み干し、返事も待たずに食器を返しに行ってしまう。戻ってくることもなく食堂を出ていった。

「秋十、当然特訓が優先だぞ」

「秋十さん、わたくしたちの有意義な時間も使っているという事実をお忘れなく」

お前らより簪の方がいい練習相手になる——なんて言える筈もなく、なし崩し的に放課後の予定が埋められたのだった。

EP008―再会する鴉と少女―（後書き）

最近空気になっていた気がする筈とセシリア。何とか書けた。

簪が出せなかったけど。

ああ、可愛く書けるようになりたい。

意見、感想よろしくお願いします。

EP009―出場する鴉と対抗戦―（前書き）

……タイトルが思いつかない。

本当は昨日投稿しなかった……。けど、知らぬ間に寝落ちしてしまったのでこんなに遅れました。

いつも以上にクオリティが低くて凹みました。あまり気にしないでください。

EP009 ― 出場する鴉と対抗戦 ―

放課後の第三アリーナ。

昼休みに強制的に約束させられた練習をしていた。打鉄を借りてきた箒を加えた三人対俺一人といういじめ的状况でやることになった。

が、伊達にレイヴンやリンクスをやってきた訳では無い。

オービットもどきを使うセシリアには、またオービットキャノンを使い、回避に専念して周りがおろそかになっているところをカラサワ連発。

さすがに雪片は少しマズイので、一夏には突撃してきたところを左腕の実シールドで受け止め右腕のつつき二三発で撃沈。

箒はカラサワを撃ちつつ刀を使わせ、近くにいるところを月光で終らせた。

確かに最初はコンビネーションはよかったものの、セシリアがリタイアしてからは一気に崩れ、ほんの数分で全滅。

セシリアの弱点であるビット稼働中に他の動作が出来なくなるところや、そもそもISどころか戦闘に馴れていない一夏。剣はできるものの、動きが型にはまっている箒。

色々問題点があるとはいえ、こんなじゃダン・モロやCUBEの二人の方が強い気がする。

……いや、どうだろうか？あのヘタレリンクスや紙装甲な穴。実際戦ったことは無いから何とも言えんが……、似たり寄ったりか。

さすがにチャンピオン・チャンプスよりは強いだろうがな。

まあそんな練習もどきを終え、ピットへ戻りISを解除して休んで

いるとスライドドアが開いた。

「秋十っ！」

着替えようとISスーツに手をかけていたが、手を止め振り返ると鈴が入ってきていた。

「おつかれ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね」
その手に持っていた、タオルとスポーツドリンクを渡してくれる。
それをもらい、ありがたく使わせてもらった。

「スマンな鈴」

一口飲むと疲れた体にスポーツドリンクがしみわたる。
あの程度とはいえ多少は疲れるから鈴の気遣いはありがたい。

「ね、ねえ秋十。私がいないと寂しかった？」

「ん？まあな。いつものメンバーが一人減るからな。そりゃ物足りなく感じるさ」

「そうじゃなくってさあ」

いつになく上機嫌でにこにこ話す鈴。

「……………それ以外には特に無いが？」

「あ、アンタねえ……………久しぶりに会った幼なじみなんだから、色々と言っことがあるでしょうが」

呆れた表情に変わる鈴。そう言われても思い当たらんなのかな。

「例えばさあ――」

「し、秋十つ！」

鈴の言葉を遮るようにドアが開き簪が入ってきた。少し息がきれているから走って来たのだろうか。

「おお。そんな急いでどうした？」

「やつ…………やくそく。…………時間…………過ぎたから、探しに…………」

…………あ、しまった。鈴が来たりとか色々あったせいで忘れてた。

「す、スマン簪！すぐ行くから！」

昨日別れ際に放課後に部屋に来て欲しいと言われていた。理由はわからんが、どうしても頼まれたので了承したんだった。

「スマンな鈴。急がなきゃいかんくなっちゃった。話はまた今度聞くから」

「えっ！？ち、ちょっと！？」

面倒なのでISスーツの上から制服を着る。
鈴が何か言っているが気にしてる余裕は無い。

「んじゃあ、また！」

着替え終わり、荷物もさっさと纏めてドアに向かい、鈴に片手を挙げてから走り出す。

「……………秋十のバカーッ!!」

「いやー、ごめんな忘れてて」

「うっん。…………来て、くれたから」

簪の部屋に行き、謝る。が、何とも可愛らしい反応を示すな。思わず撫でたくなるほどだ。

「あ……………」

「ほら、早く入ろうぜ」

「……………う、うん」

簪を促し中に入ると、いかにも女の子らしい部屋をしていた。

「あ、あんまりジロジロ……………見ないで」

さすがに失礼だったな。

とは言いつつも、初めて入る部屋なのでいろいろ気になってしまっ

「お?…………へえー、簪はこういうの好きなのか?」

目についたアニメの絵が描いてあるDVDを手に取り聞いてみる。

「だ、ダメッ！」

顔を赤くした簪が慌て隠すように奪い取る。

「……み、見た？」

DVDのことだろう。

「まあ、パッケージだけは見えたけど」

「そん………な」

何がショックだったのか、簪の目が潤みだしていく。

「なっ、なんで泣くんだよ!？」

「だ、だって………」

「アニメが好きなのが恥ずかしいのか？」

簪は俯いたまま小さく頷く。

「気にすること無いのに。アニメが好きだって関係無いだろ？お前は
お前なんだから」

頭を撫でつつ諭すように優しく言う。

「…………ホント？」

少し顔をあげ、こちらを見る。それが自然と涙目で上目遣いになり、あまりの可愛さに何かグツときた。

「あ、ああ。ホントだよ。……………そ、そうだ。俺、こっこの見たこと無いんだよ。だからさ、一緒に見ないか？」

何かを押さえつつ、なるべく自然を装って言う。

「いい、の？」

「ああ。どっこのが面白いのか、簪が教えてくれ」

そう言うと、簪はパアツと顔を明るくしてDVDを探しに行く。

「じ、じゃあさーこれ、見よー」

さっきの涙はどこへやら。俺におすすめとおぼしきDVDを持ってくる。

「おう。じゃあ、見ようや」

その返事を待ってたとばかりに簪は俺の手をグイグイ引き、机の前に座らせる。そのままDVDをセットして、お茶とクッキーを持ってくる。

「あと、これ……………わ、私がつってみた……………の」

どうやらワザワザ俺の為に作ってくれたようだ。礼を言ってから一

っ食べてみる。

「……………どう、かな？」

「うん、うまいじゃないか。たいしたものだな」

寝めると不安な表情から一転、花が咲いたような笑顔になる。そのまま俺のすぐ隣に座りリモコンで再生させる。

そのあと、夕食の時間まで二人でアニメを見ていた。

途中、簪は嬉しそうに解説したり、主人公が活躍する場面で興奮のあまり俺の手を握ったまま振り回したりしていた。

アニメもまあまあだったが、俺としては簪の方が面白かった気がする。

「お、もう夕食の時間だ」

キリのついたところで時計を確認すると、いい時間だった。

「飯を食いにに行こうぜ。続きは今度にしてさ」

「うん！」

軽く片付けをしてから廊下に出る。

「ところでさ、アニメでうやむやになったけど本当の用事はなんだったんだ？」

食堂に向かいながらふと気になり、隣を歩く簪に問いかける。

「え？……あ……えーと……こ、今度の対抗戦で」

「で？」

「わ、私が秋十に勝ったら……い、……いう……」

何が恥ずかしいのか口ごもって中々話さない。

「い……一緒に出かけて欲しい！！」

「？そんなにいいのか？」

「う、……うん」

「わかった。なら、俺が勝ったら一つ頼みを聞いてもらおうか」

「……ふえっ！？」

少し意地悪に言ってみると、ボンツと音がしそうな程一瞬で顔を赤くした。

「……う、うん。それで、いいよ」

小さく了承の言葉を口にする。

正直、了承するとは思わなかった。

まあ、変な頼みなんかする気は無いんだかな。

「んじゃ、そういうことだ。互いに頑張ろうぜ」

「うん！」

飯も食い部屋に戻って一夏と話ながら寛いでいると突然鈴がやってきた。

「アンタ。昼のは一体どういうことよ！」

「昼？……………ああ、放課後のことか。いや、あれは元々あいつと約束してたんだけど、鈴が来たことに驚いたり、昼のゴタゴタですっかり忘れてたんだよ」

スマンスマンと言いながら言い訳をする。

「ハア。だったらそう言いなさいよ。

突然行くもんだから驚いたじゃない」

「？どうしたの、鈴？」

奥から一夏がやってきた。

「あ。一夏もこの部屋なんだ。まあそうね、兄妹だからか」

「うん、そうだよ。それで、お昼になにかあったの？」

「なっ、なんでもないわよ！」

「ふーん。どうなの、義兄さん？」

何故かどもる鈴。恐らく本能的に何かを感じたのだろう。そして一夏、俺に振るな。

「なんでもないさ」

「と、ところで約束といえはさ、秋十。私が中国に帰る前にしたの覚えてる？」

ジト目の一夏を誤魔化すように話題を変える鈴だが、ナイスだ。しかし、約束か……。

「確かあれだろ？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――」

「そ、そうっ。それ！」

「――食べさせてくれるってやつだっけ？」

いや、毎日酢豚は飽きるけどな。

「って、ええええええええええええええええっ！？」

突如一夏が叫びだした。

「ッ！………うるせえぞ一夏」

「り、鈴！いつの間にそんな約束したのよ！？」

一夏は俺を無視して鈴に詰め寄る。そして勝ち誇ったようにする鈴。

「ふっふーん。早い者勝——」

「……？あの約束にどんな意味があるんだ？毎日酢豚はいらんだが……」

純粹な疑問をぶつけるが、その言葉に凍りつく鈴。

「し、秋十？まさか約束の意味、履き違えてない？」

「は？他にどんな意味があるんだよ」

何が違っていたのだろうか。鈴は俯き拳を握り肩を震わせていた。

「……の……」

「は？」

「秋十の、バカアアアアツ！！」

「グオツ！？」

怒鳴り、拳を鳩尾に叩き込んでから背を向けて走り去っていく。

鳩尾を押さえながら壁に寄りかかり、呆然とその後ろ姿を見送っていた。

「……なあ一夏。何がいけなかったんだ？」

「……義兄さん、『毎日私が作った味噌汁を食べてくれる？』って言葉知ってる？」

「なんだそれ？まったく知らんのだが」

正直に答えると何故か呆れたようにため息を吐かれた。

「……これは、鈍感以前の問題よね」

一夏の吐いた溜め息だけが廊下に残った。

そしてクラス対抗戦当日。

あれから鈴とは話せずにこの日を迎えてしまった。その上一回戦は簪と。ますます話せなかった。

「ああ、まったく。なんだってんだよ」

「どうしたのだ秋十」

ピットで控えていると、俺のため息を簪が拾った。

「いや、何でもねえけどよ……」

どうしたもんかねえ？

『では、選手は入場してください』

アナウンスが入り、思考を切り替える。

「頑張つてね、義兄さんっ！」

「勝つてこい秋十」

「頑張ってください秋十さん」

三人の声援に片手を挙げて応えてから外に出る。

女子の姦しい声援に顔をしかめる。

「よろしくねっ、秋十！」

向かいから打鉄式を纏つて簪が出てきた。

「ああ、お互い本気でやろうや」

『それでは両者、規定の位置まで移動して下さい』

アナウンスに促され、俺と簪は5mの距離を置いて浮遊する。

だが初めての試合に緊張しているのだろうか、簪の動きが僅かにぎこちない。

「簪、初舞台なんだ。勝ち負けは気にせずただ試合を楽しめばいいさ」

「う、うん」

軽く頷いてから目を閉じ深呼吸をしている。数回したあとに開かれ

た目には、しっかりと力強さが見受けられた。

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーツとブザーが鳴り響く。それと同時に簪が夢現を展開し、突っ込んでくる。

とつつきのトリガーを引いておき、夢現を左腕の実シールドで受け止める。それと同時にパイルが射出されるが、さすが代表候補生か防がれたと見るや直ぐに後退。射出範囲外へと出ていた。

とはいえこれはただの様子見だし、これで決まるなんて思ってもいない。

とつつきが外れたら直ぐに距離を取る。両手の武器を収納。マシンガンと投擲銃、右肩に垂直ミサイルを展開。小刻みな三次元機動を描き、春雷を避けながらミサイルを打ち出す。

上空へ飛び出し、視界の外から飛来するが故に普通より避けにくいそれ。さらに空中にいるため、避けたとしても地面に着弾せず、ミサイルの飛翔限界が来るまで追い続ける。

ミサイルを必死に避けている簪に重ねてミサイルを撃ち、時折投擲銃を放つ。

弾速は遅いが、放物線を描いて飛んでいく。ミサイルに気をとられている簪に着弾、爆散する。

被弾し、僅かに止まった瞬間に残っていた二三発のミサイルが着弾。追加ダメージを与える。

だが簪もやられっぱなしではない。即座に体勢を立て直し、春雷を連射。機動力を生かして近づいてくる。

それにつれて粒子砲の被弾率も上がる。後退しながらマシンガンを乱射して牽制をするが、それでも間は縮まっていく。

夢現の間合いに入るり左腕に実シールドを再展開するが、最初の一

撃でかなり消耗している。

ガリガリ削れていくシールド。その間にショットガンを展開。ゼロ距離で何発も撃ち込む。簀は散弾の衝撃で軽く後に飛ばされながらも粒子砲で反撃する。

一度距離を離し、両者共に停止する。シールドはもうズタズタで耐えられないだろう。パリジする。

「チッ」

粒子砲でシールドエネルギーもかなり減っていた。だが、簀もそろそろだろう。

「まだ、まだっ！」

小さく叫び、山嵐を起動。大量のミサイルが撃ち出される。

それに対し俺はOBを起動。一気に時速数百kmへ加速。ミサイルの下に潜り込み数発くらいながらも、簀を通り過ぎた辺りで急上昇。追尾して曲がったミサイルと俺の間に簀が入る位置でOBを切り、振り返る。

その時に肩にMWMDM24/1を展開する。簀が自分の位置に気づく前に射出。肩先にある連動ミサイルと共に左右一発、前方四発の計六発射出される。

ミサイルの軌道に気づいた簀は横に避けようとするが、横から来るヤツに気づかずには追突。そのまま追うように残りの五発と簀のミサイル十発程が着弾する。

その間に接近し、当たらなかったミサイルがこっちに来るのを無視

し、既にロックが完了していたCWM—TITANを撃つ。

爆炎が収まり、振り返った簪の眼前にはノロノロ進む大きなミサイルがあり、そのまま直撃。たった一発で先ほどの何倍もの爆発が起きた。

『試合終了。勝者——織斑秋十』

「義兄さん……………えげつないよ」

「鬼畜だな、秋十」

「……………秋十さん、大人気ないですわよ」

勝利してピットに戻った俺を待っていたのは一夏達の冷たい視線だった。

「……………いや俺、勝っただけだ」

「オーバーキルにも程があるわよ」

「まったくだな」

「相手の方がかわいそうですわ」

ひどい言われようだな。

「ほら、謝ってきなさいよ。あの子絶対泣いてるわよ」

「というよりも、トラウマものだな」

「あまりにもひどすぎますわ」

あまりにもボロボロに言われ、その言葉と視線から逃げるようにピットから出ていく。

反対側のピットに着くと泣いている簪と慰めている女子が数人いた。

「あー、その……………すまなかったな、簪」

「……………グスッ……………」

周囲の視線が痛い。

「は、反省してるしさ、ほらっ、買い物くらい付き合っから。泣き止んでくれよ……………」

「……………グスッ……………ほん……………と？」

「あ、ああ。ホントだとも！なんだったら何か奢るから」

外野がうるさい。誰だ今へたれたとか言ったやつ。こっちは必死なんだ！

「……………なら……………いい」

ふう、よかった。泣き止んではくれた。

何か嵌められた気がしないでもないけど……………。

ああ、次は鈴と試合か。何か嫌な予感がするなあ……………。

オマケ。

主人公ハードモード

変更

腕部――C A W――D C――0 3

エクステンション――M W E M――R / 3 0

コア――M C L――S S / O R C A

春雷を避けつつ垂直ミサイルを放つ。

上空に六発、前方に四発同時に飛んでいく。

二方向から時間差でやってくるミサイルを避けてから反撃しようとするが、空中にいるために障害物に当たることなく戻ってくるミサイルに避けることを余儀なくされる。

再びロックが完了し、第二波を順次放つ。

いろんな方向からくる計二十ものミサイルを頑張って避けているがここで手を抜かずにE O ―イクシード・オービットを起動。

コアから分離し、背後に浮かんだ一つのビットのから小さいレーザーが高速で連射される。

ミサイルで手一杯だったところにさらに増えた弾幕に、被弾率が増えていく。

さらに照準を終え、両腕に内蔵された銃口から二発、グレネードが飛び出す。

殆ど無くなったミサイルとEOを避けていたところに着弾。大きな爆炎をあげた。

残りのミサイルとEOが続き、容赦なくシールドエネルギーを削り取っていった。

EP009―出場する鴉と対抗戦―（後書き）

鈴のターンと思いきや簪のターンだった。

鈴を書こうとしたら何故か思い浮かんで萌えて悶えてたので書いてしまった。

実はあまり簪が好きではない作者。これからもちよっとひどい扱いになってしまいかもしれません。簪スキな方々、ごめんなさい。

ネクストに破壊天使砲を積もうかな……………。

意見、感想よろしく願います。

EP010―本気を出す鴉と謎の敵―（前書き）

ハッハアー！！

連続投稿だせ！！

メルツエエエエル！！

EP010―本気を出す鴉と謎の敵―

『それでは両者、規定の位置まで移動して下さい』

予想通り鈴が勝ち上がり、俺対鈴の試合になった。

やはり簪との試合を観戦していた生徒は多く、試合を待っている間中周りからの視線がとても痛かった。鈴と戦うのは面倒だったが、出番が早く来てほしいと思わずにはいられなかった。

アナウンスに従いアリーナに出る。既に鈴は到着しており、俺を待っていた。

鈴が装着しているIS―中国の第三世代型の甲龍の持つスパイクアーマーの形をした非固定浮遊部位を視界に収めつつ、五メートル離れた位置で止まる。
アンロック・ユニット

「あ、アンタツ！あの攻撃はやめなさいよ？」

対峙した途端にまず言われる。……………そんなに恐いんかね？

「あんな反応じゃあさすがに自重するさ。……………にしても、そんなに駄目か？」

「当たり前よ！！何よあの爆発。核かと思っただじゃない！！」

確かに一発でグレネード二発やナパームよりも爆発するし、APもかなり減るけどな。

「そついうもんか」

「アンタねえ……。それよりも、何か私に言っべき事があるんじゃないの？」

「いや、特に思い当たらないが」

「なっ……」

何が予想外だったのか言葉を失くす鈴。

「約束のこと覚えてなかったでしょうが!!」

「は？ちゃんと覚えていただろ？」

「意味が違っの、意味が!!そんなんじや覚えていないのと一緒によ!!」

「んなこと言われたって、知らねえもんは知らねえよ」

どんな意味があるってんだよ。そんなに拘るってことは何か重要なものののか？

「あつたまきた。どうあつても謝らないっていう訳ね!？」

だから何を謝れと？

「いいわ。今更何を言っても手加減なんか絶対してやらないから。

——全力で、叩きのめしてあげる」

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーツと鳴り響くブザー。その音が切れた瞬間俺と鈴が動き出す。距離を取ろうと後退する俺に対して鈴は両端に刃のついた歪な形の青竜刀を展開し、距離を詰めてくる。

スラッグガンを肩に展開。散弾で牽制をしつつ離れようとするが、彼岸の距離は縮まるばかり。

ガギンッ！！

振り下ろされた青竜刀を左腕に展開した実シールドで受け止める。

「へえ、初撃を受け止めるなんてやるじゃない」

「だが、それだけじゃねえ！」

右手にショットガンをだし、ゼロ距離で撃ち込む。

「くっ！…なら、これでどう！？」

その言葉と共に、青竜刀をバトンのようにクルクル回し、縦横斜めと様々な角度から斬撃を与えてくる。

高速で回転するそれをシールドで受け止め、ショットガンで受け流しスラッグガンで少しでもダメージを与える。

けど、このままじゃ両手の武器がもたない。一旦離れないと…。

「——甘い！」

鈴の肩アーマーが開き、中心の球体部分が光っている。

何かは解らないが、距離を取ろうと後ろ向きにブーストを噴かし――

「ガッ…！？」

見えない拳に殴り飛ばされた。

弾かれた勢いも加わり結果としては離れることに成功した。だが、手痛いダメージをくらってしまったが。

「クソッ、一体何が……!？」

「まだまだいくわよ!」

再びアーマー内の球体が光り、何かが撃ち出されるがやはり何も見えない。

長年の勘が無意識に体を動かしかろうじて避ける。

「よくかわしたわね。「龍咆」は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

なんて厄介な。砲身が見えなければ銃口がどこを向いているのかが分からない。こんな攻撃今まで経験したことがない。

とにかく小ジャンプを繰り返し、エネルギー残量を気にしつつ三次元機動を描きランダムに動く。

アサルトライフルを展開し、少しずつでもダメージを与える。

「クッ、なんて精度なの!？」

正確に撃ち込まれるライフルに、鈴はイラついた声を出す。

それでも衝撃砲を止めることはしない。直撃し、掠る。その威力の差で確実にシールドエネルギーを減らしてくる。

「（集中しろ。AMSを受け入れろ。ISと一体になれ!）」

ハイパーセンサーの情報を受け止め、処理する。必要な情報を探す。鈴の目線、顔の向き、姿勢、細かな動き。その全てを考慮しろ！装甲に当たる微かな風すら己で直接感じる！衝撃が直に感じててもかまわない。

砲身が作られる時の空気の歪み、砲弾が射出されるときにできる僅かな空気の乱れ。些細なことでもなんでもいい。見極める！

「（……ここだ!）」

バズーカを放つ。それが衝撃砲とぶつかり炸裂する。だが、その衝撃で衝撃砲は拡散した。

「う、うそ……」

撃ち落とされたその事実には呆然とする鈴。

ダメージはこちらの方が多くくらっている。それでも一撃、たった一撃いなしただけで戦況が大きく変わってくる。

「ふ、ふん！まぐれで一回当たっただけよ!!」

認めたくないのか強がってみせる鈴。だが、

「…龍咆、既に見切った!!」

宣言し、全速力で前に出る。ブーストしながら左腕を払い、月光を展開する。

「ッ!？」

体が強張るように青竜刀を構える。近づかせないように不可視の砲弾を放ってくるが、少し動くだけ。それだけで顔のすぐ横を衝撃が通る。

鈴には俺の赤く光るメインカメラのモノアイが不気味に見えるかもしれない。月光を構え、蒼いレーザーの刃を出現させる。

「ハアアアアアアア！！！」

.....っ！！！！！！

ズドオオオオンッ！！！！

突如頭に何か聞こえたと思った次の瞬間、眩い閃光が俺と鈴の間に降り注いだ。

アリーナの地面が抉れ、砂埃が舞う。

——ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

慌てて急停止したところに入るISからの警告。アリーナの遮断フィールドを貫く程の火力がこちらに向けられている。

『秋十、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！』

プライベート・チャネルで退避を言ってくる鈴。……だがなあ、

「そうしたいのは山々なんだが、ゲートが全てロックされているんだよ」

AMSとの深い接続により、レーダーと視界が同調。全方位を確認したところ、全て閉じていた。

「じゃあ下がってなさい！先生達が来るまで時間を稼ぐから！」

「こいつの目的は俺らしい。だからお前が下がっている」

だが何故だ？殺気まったく感じない。対AC戦の時さえ殺気はあったというのに。……まるでサイレントラインにいた時のような――

「馬鹿！あんたの方が私よりも――」

「ッー！あぶねえ！」

砂埃の中から熱源を感知。抱えられないので突き飛ばし、その場を離れる。

「ビーム兵器？…しかもカラサワよりも高威力だと！？」

入れ替わるように過ぎて行ったレーザー。その熱量に驚愕する。だが、休む間もなくさらに撃たれるレーザー。

それを難なく避け、正面を向き直ると、ちょうど砂埃が収まった。

そこにいたのは異様なIS。つま先よりも下まで伸びている、異常に長く、ビーム砲口が左右二門ずつある腕を持ち、首のない、肩と一体化したような、センサーレンズが不規則に並んだ頭。そして全身を隙間なく覆う、灰色の装甲。

「貴様、何をしに現れた」

カラサワを構え問いかけるが、無言のまま答えない。

『織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！』

山田先生からのプライベート・チャンネル。

いつもと違って先生らしい威厳のある声だが、その言葉には頷けない。

「それまで俺たちで食い止めます。そもそもここから出られないんです。自分で何とかしなくては」

『織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあったら――』

プライベート・チャンネルを強制的に切る。戦いに集中しなくては。敵機が体を傾けて突進して来る。この程度は楽に避けれる。

「行けるな、鈴」

「わかってるわよ！アンタこそ着いて来なさいよ！！」

「くっ……！」

振った月光から光波が飛ぶ。
しかしその一撃すら敵に届かない。

「離れて！」

鈴の警告に反応し、即座に離脱。

その瞬間、敵がコマのように回転しながら、ビーム砲撃をしてくる。

「やらせないわよ！」

鈴が衝撃砲を放つ。

が、その長い腕で衝撃を叩き落とした。

そのやり取りだけでも既に何回も繰り返していた。

「チッ！……おい、鈴。残りのエネルギーはどれくらいだ？」

「ざっと一八〇ってところね」

「似たり寄ったりか……厳しいな」

俺一人で周りに誰もいなければなんとかなるんだが……。

「にしてもアイツの動き、なんか違和感がある」

会話中には攻撃してこない。動きが単調すぎる。殺気がない。

「……まさか」

M E S T | M X / C R O W を展開する。

「ちょっとアンタ、どうする気よ!？」

「なに、ちよつとした実験だ」

アサルトライフルを撃ちながら移動。こちらに気を引く。

「鈴はそこでまってる!!」

敵に近づき相手が腕を回そうとした瞬間に、C R O W を発動する。その効果は相手のロックとレーダーを妨害する。俺の予想が正しいければ……。

「ッ！ビンゴ!!」

腕を止め周りをキョロキョロと見回している。その間に後から月光で斬る。衝撃に振り返るが、既に俺は離脱。鈴の元へ戻っていた。

「ど、どういうことよ、あれ!？」

「さっき展開したやつの効果で、相手のロックとレーダーを阻害する一種のステルス装置だ。無論カメラでは捉えられるはずなんだが――」

一旦言葉を切り、敵を見る。既にステルスの効果時間は終わっている。こちらを向いているが、一向に攻撃してこない。まるで会話を興味深く聞いているように。

「つまりあれは無人ISってことだ」

「なっ！あ、あり得ないわよ。ISは人が乗らないと絶対に動かないのに」

「だが、現に奴は動いている。これは事実だ」

「……根拠は？」

「さっきのステルスとは別だが、彼奴からは全く殺気を感じない。そして、動きが単調すぎる。さっきから同じ動きしかしていないんだよ」

あり得ないといった顔をしている鈴。

だが、思い当たる節があるのか直ぐにこちらを向き直る。

「どうしたらいい秋十？」

目で『なんでも手伝うわよ』と言ってくる鈴。

「……なら」

俺が口を開こうとした瞬間、アリーナのスピーカーから大声が響いた。

「秋十っ!!」

ハウリングする程の声に振り向くと、中継室に箒がいた。

「な、なにしていやる彼奴は……」

思わず怒りが込み上げてくる。何故戦場に出てきた。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!」

再びハウリングする。だがそれも俺の怒りを助長するものでしかない。

無視するように敵に向き直ると、奴はジッと箒の方を見ていた。

まずい。今から注意しても間に合わない。普通に向かっていればその前に着弾する。

手は無いことはない。だが、それは奥の手だ。こんなところでジョーカーは切りたくない。元より俺は傭兵だ。利益がなければ動かない。

どうする? 無視するか? だがそうすると確実に箒は死ぬ。

それだと寝覚めが悪いし、一夏が悲しむ。——何より、あの兎が黙っていないだろう。

あれにこれ以上目を付けられるとかなり面倒だ。デメリットでしかない。

……ならばやるしかない、か。

「AMS最大接続！リミッターオールリリース！」

元々ACは十メートルを超す兵器で、特殊な防御スクリーンを持っている。それを超してダメージを与え、撃破するんだ。出力はISごとくではオーバーキルではない。

だから俺はこのISにリミッターを掛けていた。それを解き、本来の出力をえれば……。

音声コールする。すると、さつき以上の一体感が全身を包んだ。

即座にOBを起動。背面のスラスタにエネルギーが集まり、爆発的に加速する。

一瞬でトップスピードへ達し、ネクストに近い程の強烈なGが身体にかかる。その時速は千キロにも届かんとする程だ。

「ガッ……グガアアアアアアッ！！」

ネクストはノーマルACよりも速い分ある程度は対G性はある。しかし今はネクストではない。敵ISとの距離はほんの十メートル。一瞬とはいえ必要以上にかかるGに身体が悲鳴を上げる。

リミッターを切ったせいで段違いに威力が上がった月光ですれ違いざまに相手の腕を切り落とす。

「ウガアアアアアアアアアアッ！！」

OBを切りすぐに反転。急な停止にさらにGがかかり身体と神経が悲鳴を上げる。だがそれを押さえつけ、カラサワを放つ。

さらに、普通のブーストで四百キロを出しながら近づき頭を切り落とし、残った腕を切り落とし、とっつきを胸に突き立てる。ガシュツと音をたてて高速で撃ち出される杭は装甲を突き破り反対側まで突き抜けていた。

超高速で小さな的確に狙う、その行為がどれ程AMSを酷使するか。どれ程神経を磨り減らすだろうか。

「秋十おっ!!」

敵ISが完全に沈黙したのを確認し、鈴に返事をする余裕も無く全身の激痛にのまれるように意識を失った。

オマケ

もしも主人公がラストレイヴンの世界で中立2のルートを経験していたら。

ズドオオオオンッ!!!

鈴との間に眩い閃光が降り注ぎ、砂埃をあげた。

『秋十、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！』

プライベート・チャネルで退避を言ってくる鈴。

しかし、すぐに砂埃が晴れた。

「……なによ、あれ」

鈴が呆然と呟く。

そこにいたのは赤っぽいベースに鉄色をした機体。ところどころ青いの血液みたいに流れている。

その腕に指はなく、青く光るブレードがそのままついていた。

そして、その姿は――

「ば、馬鹿な。何故パルヴァライザーが………」

それは倒すたびにデータを蓄積し、無限に強くなり元を破壊するまで造られ続け、インターネサインを護る最悪の破壊兵器だ。

「いかん！そいつには手を出すな！」

「手を出すなと言われても！」

鈴を止めようとするが、それよりも早くパルヴァライザーが向かってきた。

「クツ……。こうなりゃ」

腕と肩武器を変更。全てマイクロミサイルで固める。

「鈴、下がってる!!」

叫びつつ両手から十発のミサイルが一気に出る。

パルヴァライザーは離れたところで両腕を上に掲げ、振り下ろす。すると、光波が飛び出してくる。

それを避け、何度もミサイルを放つ。
だが相手も連続で何発も放ってくる。

「オモ・・・シロイ・・・」

何回かミサイルが当たったところで声がした。

「まさか、人が乗っているのか!?!」

あれは無人兵器の筈……………。
だが、放ってはおけない!

さらにミサイルを放つ。

「・・・コウカイ・・・
・・・スルゾ・・・」

「ッ!?この声、どこかで……………」

だが、ジナイーダと比べると弱い!!
一撃は大きいが、避けやすい。

六十発ほど撃ち込んだあたりで突然宙に浮いていたパルヴァライザーが崩れるように地に落ちた。

「たお……………したの？」

鈴が恐る恐る聞いてくる。

だが奴はまるで人間のように起き上がった。

まだかと鈴が身構えるが、パルヴァライザーはフラフラしている。

「ナル……………ホド……………
オマエモ……………」

ドミナント……………!!」

その言葉を残して、パルヴァライザーは爆散した。

「……………ドミナント、だと？」

……………まさ、か……………エヴァンジェ、お前なのか？」

この呟きに答える者はいなく、ただ謎だけを残していた。

EP010―本気を出す鴉と謎の敵―（後書き）

あんまり進まなかった。

そして、ドミナントが書きたかった。ただそれだけ。

初期からオマケが頭に浮かんでいた割にはかなり雑。なかった方がよかった気がする。

もうすぐ一巻も終わり。

二巻も原作に沿うつもりです。

臨海学校が終わってからかな、本格的にオリジナルが混ざるのは。オリジナルを望んでいる方、それまで我慢してください。

では。

意見、感想よろしく願います。

EP011—怒る鴉とそれぞれの疑惑—（前書き）

少し遅れました。

今回は伏線？回です。あまり伏線にはなっていないかもしれませんが

EP011—怒る鴉とそれぞれの疑惑—

夢を、見ている。

夢だと認識できる夢。

『これより、第一次——の起動テストを行う』

目が眩むほど真っ白な部屋。大きなガラスと扉が一つあるだけの何もない部屋。

その真ん中に金髪の可愛らしい少女が立っていた。その目の前にはガラスのような球体が置いてある。

ガラスの向こうには白衣を着た大人が大勢いた。それぞれ計器を見たり、何かに祈ったり、モニターの中を操作したり、さまざまなことをしている。

『さあ、——。展開してみてください』

その言葉に少女は何も躊躇わずに目の前の球体に触れた。その瞬間、

『ッ！？——』

声にならない叫びを上げた。

少女の身を包む装甲。本来身を守る筈のそれがまるで拷問具のように少女を苛む。

ガラスの向こうでは大人が慌てていた。指示を出す声も少女に呼び

かける声も荒れて、機械を操作する手も焦りを見せていた。

やがて一つの計器から単調な音がし、大人達が悲痛な悲鳴を上げた。そのガラスの向こうでは、ちょうど少女が崩れ落ちるように膝から倒れていた。

『第一回、起動テストを行う』

何度も同じような光景が流れる。

違うのは立っている少女と大人達の顔つき。次第に疲れ、諦め、後悔の色を濃くしていった。

『駄目！！触らないで！！』

いや、もう一つ違っていた。それは何回目からか、ガラスの球体に重なるように金髪の少女が存在していた。

その姿は最初の少女と同じもの。だがその表情は、その声は悲しみに染まっていた。

静止を呼びかける悲痛な叫びは、しかし誰にも届かず、また変わらず同じ悲劇が繰り返される。

『どう………して？どうして誰も止まらないの？どうして皆——ななきやいけないの？』

誰もいなくなった部屋に、少女の泣き声が寂しく消えていった。

「ガッ……………」

頭に走った激しい痛みが俺の意識を覚醒させた。

まだぼんやりする思考に鞭を打ち、現状を把握する。
どうやら保健室のベッドで寝ていたらしい。

強化された脳で自分の身体の状態を確認する。

——身体機能、損傷軽微

——AMSの過剰接続により多大な過負荷有。現在神経系の再生を行っています。

やはり神経にきていたか。AMSは諸刃の剣だな。再生するまではしばらくかかるか。

「気がついたか」

シャツとカーテンが引かれ、誰かが顔をのぞかせる。

「ねえ……………さん、か」

「体に大した損傷はないが、一部に打撲がある。数日は地獄だろうが、まあ慣れろ」

辛辣に言葉を放つが、その表情はいつもより穏やかだった。

「静止状態からの急激な加速、そして反転。かかる膨大なGをその身で受けたんだ。むしろその程度で済んだんだ、幸運だと思え」

……その程度で怪我するとは、鈍ってしまったかね。

「クッ……」

痛みを無理やり押さえつけ上体を起こす。

「無理をするな。まだ寝ている」

「義姉さん」

「うん？なんだ」

「いや、さ。心配かけてごめん」

俺の言葉が意外だったのか、一瞬キョトンとした表情を見せる義姉さん。

「心配などしてないさ。お前は私の義弟だ。そう簡単には死なないさ」

小さく笑って言う。変な信頼だが、これは義姉さんなりの照れ隠しだからな。大して気にならない。

「では、後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

それだけ言って保健室から出ていく。普段はずぼらだが、仕事にはまじめだ。まったく、どれだけ姐さんに、いやスミカに似ているのだろうか。あの頃を思い出してしまうのではないか。

「あー、ゴホンゴホン！」

「義兄さん、大丈夫？」

入れ違うように誰が入ってきた。というよりも一夏と箒だった。箒の顔を見た瞬間、あの時の怒りが再び出てきた。

「義兄さん！目、覚めたんだ。よかった、心配——」

「秋十。あ、あのだな、今日の戦いだが——」

パシンッ！

「——へ？な、何をっ——」

「に、義兄さん！何を——」

「黙れ」

箒の頬をはたいた俺に、うろたえ文句を言おうとする二人。だが、威圧して黙らせる。

「箒、あの時何故あんなところにいた？」

それが許せなかった。じゃなけりや、余計な手札を見せることにならなかったのに。

ただでさえ唯一のIS乗りだからという監視されているのに、これ以上動きにくくなったら傭兵稼業ができなくなる。

「わ、私はお前が心配で！」

「ふざけるなよ？あの方は既に殺すか殺されるかの戦場だった。何の力もない奴がいていい場所ではない」

「せ、戦場つて。言いすぎだよ。そもそもISだから――」

「戦場だ。それにあのレーザーの威力、生身の人間じゃ直撃せずとも蒸発して死ぬぞ？」

温い、温すぎる。遮断シールドを突き破った時点で理解できるだろうに。

「なっ、し……」

「チッ。……気分が悪い。一夏、一人にしてくれ」

熱くなりすぎたな。

ベッドに寝っ転がり目を瞑る。片手をヒラヒラさせ、退出を促す。

「……うん。行こう、箒」

扉が閉まり、とたんに静かになる保健室。

「ハッ……俺もまだまだ、だな」

自嘲するように呟く言葉がやけに大きく聞こえた。

「秋十……」

どうやら眠っていたようだ。呼びかけられる声に気がついた。

「……鈴、か？」

目を開くと鼻先三センチに鈴の顔があった。

「おっ、お、おっ、起きての！？」

「お前の声で目が覚めたんだ。んで、いったいどうしたんだ？」

「どうもしないわよっ！！」

真っ赤になって顔を離し、ベッドの脇の椅子にドカリと乱暴に座り込む。

黙って俺を見る鈴。互いに何もしやべらず、ただジツとしていた。

「ところでよ鈴」

「……何よ」

「結局あの約束はなんだったんだ？」

「ああ、もういいわよ。一夏に話聞いたし」

鈴がいいと言うならそれでいいのだろう。

再び何も会話が無くなる。

窓から外を眺める。黄金色の光が照らし、眩しさに目を細める

「ねえ、秋十——」

「秋十さん、具合はいかがですか？わたくしが看護に来て——あら？」

鈴が何か言おうとしたのを遮るように、バーンツとドアを開けセシリアが入ってきた。

「どうしてあなたが　　？秋十さんは一組の人間、二組の人にお見舞いされる筋合いはなくなつてよ」

「何言つてんの？あたしは幼馴染なんだからいいに決まつてるでしょ。あんたこそただの他人じゃん」

「わ、わたくしはクラスメイトだからいいんです！」

そのままぎゃあぎゃあ言い争う二人。たまに俺を巻き込んでさらに加速していく。

けが人の前で何をやっているんだ、と二人に辟易としながら思う。そのころには先ほどの筈の事など忘れていた。

— s i d e o t h e r —

学園の地下五十メートル

そこにはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

機能停止したISはすぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。それから二時間、千冬は何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ている。

「
」

暗い室内の中、ディスプレイの光に照らされる千冬表情は硬く、冷たかった。

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みウィンドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、真耶が映っていた。

「どうぞ」

許可を出しドアが開く。中に入ってきた真耶は普段とは一変し、きびきびとした動作をしている。

「あのISの解析結果が出ましたよ」

「ああ。どうだった？」

「はい。あれは——無人機です」

世界中で開発が進むISの、そのまだ完成していない技術

「どのような方法で動いていたかは不明です」

「コアはどうだった？」

「それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

やはりな、と続ける。どこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をする

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ——な」

そう言つて千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す。

そこにはちょうど秋十が無人機の腕を切り落としているところだった。

「彼のISについては？」

「いえ、本体のデータを見ようとしたんですが、ロックされてました」

「なに？」

ピクリと片眉が動く。

「彼が使用した調整室の機材の履歴を復元したんですが、殆ど削除されていてこれしか残っていませんでした」

ディスプレイに新たなウィンドウが開き、データが表示される。

そこには、AMS—Allegory Manipulate

S y s t e m と書かれていた。

「AMS、か。だが、これではあの速度と威力は説明できないな」

「はい。それに殆どと言いましたが、このデータ以外は完全に削除された形跡があったのに、これにだけ手をつけた跡はありませんでした」

「わざと、ということか」

「おそらくは。あと、最後の加速ですが、初速から時速千キロにも及ぶ勢いでした。彼の診断結果には、加速でかかるGによる被害と思われるものはありませんでした」

「……どうなっている？」

その疑問に答えられるものはおらず、千冬はディスプレイを見たまま考え込むのだった。

— s i d e 秋十

あれからセシリア達に飯に誘われたが、トイレに行くからとやんわり断り一人で廊下を歩いている。
だがトイレには行かずに人が通らない場所に行く。周りに人がいないことを確認して携帯を取り出す。

ロックを解除し、隠してあるアドレスにコールする。

『はい、何かしらヴィレン』

「よう、スコール。聞きたいことがあるんだが」

『昼間の乱入騒ぎかしら？』

「やっぱり視ていたか。……それで？あいつに関する情報は？」

『そうね。まず分かっていると思うけど、あれは無人機よ』

やはり、な。

『あと、IS学園にハッキングをかけて解析結果をみたのだけれど』

「おいおい、そんなことできるのかよ。……まあいいか。で、何があつた？」

『登録されていないコアを使用してあつたそうよ』

「フン……なるほど、な」

『？心当たりでもあるのかしら？』

「いや、無いさ。今はまだ……な」

『そう。あと他に伝えるべきことは……。ああそうそう、あの無人機が乱入した時、アーリーナのシステムが乗っ取られていたわ。そのせいで全てのゲートがロックされていたのよ』

だから非難が遅れていたのか。……ん？じゃあ何故箒は

「一つ、いいか」

『どうしたの？』

「全て閉じられていたのなら、何故箒……中継室に割り込んだやつは来れたんだ？」

だったら箒もあそこまで行けなかったはずだ。まるで――

『まるで誘導されたみたい？』

「ッ！？」

『後から確認したのだけれど、あの子の通った道だけ開いていたわ。誘導、というよりもあの子のために開けた、と思った方がいいわね』

「つまりは、俺が本気を出さなければいけなくなったのもそのせいなんだな？」

『やっぱりあれが本気なのね。あの速さでブレードを当てるなんて言うだけはあるわね。私の眼に狂いは無かったわ』

「お眼鏡に適ったようだなによりだ。情報はこれだけか？」

『不満だったかしら？』

「いや、十分すぎるよ。助かった」

亡国機業の情報網、まさかこれほどとはな。

『こちらとしてもいいものが見れたわ』

「情報料は？」

『今回はいらないわ。それと、もうすぐ依頼を請けてもらうわよ？』

「分かった。じゃあ、その時にまた連絡をくれ」

『それじゃあね、ヴィレン』

通話が切れる。しかし、思っていた以上に情報が入ったな。

元凶も大方把握できた。

「あの兎め。何を考えている」

— s i d e o t h e r —

夜。寮の門限も怪しい時間。校舎内のある部屋で月明かりだけが照らす中、二つの人影があった。

「当主。彼のデータの洗い直しをしました」

結果です、と渡される資料。それを受け取った人影はそれをざっと

流し見る。

「やっぱり。何度調べてもおかしなところはないわね」

「しかし、彼の戦闘の動きは……」

「歴戦の猛者のよう。けど、この経歴と矛盾する」

「あと、彼の機体のデータです」

「製作は……クレスト？初めて聞く名前ね」

「ええ。あれほどの性能を出せる機体を作れるならもつと知られてもいいはず」

「ますます怪しいわね。けど、どこにも改竄の形跡はないわね」

ハア、とため息を吐きつんざりするように言う。

「彼にはあの子との仲を取り持ってくれたからあまり疑いたくはないのだけれど……」

「そういう訳にはいきませんよ」

「分かってるわ」

つらい立場ね

まったくです

これからの対応と報告によるものが、二人の言葉は疲れた響を含んでいた。

EP011—怒る鴉とそれぞれの疑惑—（後書き）

三日連続投稿。

書いていると楽しいけど疲れる。

あまりヒロインが活躍しないな……と思うこのごろ。

鈴を書くこうも思っても多く書けない。

どうしてだろうか……。

意見、感想お願いします

EP012―困惑する鴉と波乱の転校生―（前書き）

昨日のうちに書き上げるつもりが寝オチしていた。

学校が台風で昼に帰らされたから、何とか書けた。台風に感謝。

EP012―困惑する鴉と波乱の転校生―

六月頭の日曜日。

俺は一人で久しぶりに街に出ていた。

とは言え特に用事があるわけでもなく、現在は中学の頃の友人の五反田弾の家にお邪魔させてもらっている。

「で？」

「ん？一体どうした？」

弾の部屋に上がり、対戦方式のゲームをしているといきなり話しかけてきた。

「だから、女の園の話だよ。いい思いしてんだろ？」

してねえよ。つか、いい思いって何だオラ。

この五反田弾だが、中学の三年間ずっと同じクラスで事あることにこういった話をしてくる。

「嘘をつくな嘘を。お前のメール見てるだけでも楽園じゃねえか。なにそのヘヴン。招待券ねえの？」

ねえよ。何がヘヴンだ。こっちの方がいづらいわ。

「ああ、そうか。そっぴやお前はそっぴやだった」

呆れたように肩を竦める弾。そういうヤツが何を指すのが全くわ

からん。相変わらず一人で納得して、教えてくれん。

「ほれ、隙あり」

「のわっ！きたねえぞ」

「すみません。手段を選ぶつもりも無いものですから」

弾が肩を竦めた時にできた隙に大技を発動。残りHPを削り俺の勝利。

「ほれほれ、次の対戦が始まるぞ」

ちょうどキャラの開始のセリフが入るところだった。

「へえ…調子に乗って殺されに来たのね

野良犬が、死になさい」

『面白い素材と聞いている…。期待するぞ…』

その言葉のすぐ後にゲームが開始される。

このゲーム、ISとは違ってメカメカしい、ACに似た機体进行操作できるので俺たちは気に入っていた。ただISのゲームのせいであまり売れなかったそうだが。

だがネタ武器などロマンに溢れる機体ラインナップで、好きな人にはかなりの人気がある。

「そっついや、鈴が転校してきたって言うってたな」

「おお、そうだな。——つと、ほらよっ！……またあの頃のメンツで遊びに行かねえか？」

「ぬあ、てめっ！至近距離で重ショットガンはきちいぞ！……そうっ、だな。それもいいかも、な」

「まあ、その辺は任せるぜつと。——まだまだいくぜ！」

「おい、ここで散布ミサイルかよっ！……ああっ！また負けた」

「そんな遠距離用の機体を使うから」

『くっ……離れられない……！！
嘘……でしょ……？』

画面では弾の操作していた機体が負けセリフを言い、爆発していた。

「クッソ！再戦だっ！次こそは——」

「お兄！さっきからお昼出来たって言ってんじゃん！さっさと食べに——」

どかんとドアを蹴り開ける音に弾の言葉が破られた。

部屋に入ってきたのは弾の妹、五反田蘭。一ツ年下の有名私立女子校に通う優等生。

「おう、久しぶり。邪魔してる」

「しっ、秋十……さん！？」

俺がいたことを知らなかったのだろう。かなり驚いている。

その格好は肩まである髪を後ろでクリップに挟み、服装もショートパンツにタンクトップという、かなりラフな状態だ。

そんな格好だが、IS学園にいるからか見慣れてしまった。何せ周りには女子しかいないしな。

まあそういうのにあまり興味は無いから大した苦では無い。

「い、いやっ。あのっ、き、来てたんですか……？全寮制の学園に通っているって聞いてましたけど……」

「そうなんだけどさ、今日は只の外出。せつかく近くに來たから寄ったんだ」

「そ、そうですか……」

む？相変わらず俺にはたどたどしいな。敬語なんか使わずに普通に話せばいいのに。

「蘭、お前なあ、ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思われ――」

ギンツと蘭の一睨みでみるみる小さくなる弾。

変わらん、この二人も。

「……なんで、言わないのよ……」

「い、いや、言ってなかったか？そうか、そりゃ悪かった。ハハハ

……」

「……………」

弾にまた睨みをきかせ、そそくさと部屋を出ていく。

「あ、あの、よかつたら秋十さんもお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「あー、そうだな。ちょうど昼飯時だしな、いただくよ。ありがとう」

「い、いえ……」

ばたん、とドアが閉じて部屋にゲームのBGMの音が響く。

「……しかし、蘭はいまだに俺にだけ敬語だな。なんでかねえ？」

「は？」

何言っつてんだコイツ？って顔をする弾。

「俺としては普通に話してほしいんだがな……」

「……………」

ハア、とため息を漏らす。

「お前も変わらねえな」

「は？」

「まあ、わからなければいいんだ。俺もこんな弟はいらん」

また出た。なんなんだ、弟って。コイツには妹しかいなかった筈だが。

「まあ、いいや。とりあえず飯食ってから街にでも出るか」

「おう、そうだな」

「じゃ。ま、行こうぜ」

一旦外に出てから正面の食堂入口に戻る。

「うげ」

「お？」

「……………」

入口を開けると露骨にイヤそうな声を出す弾。後から覗き込むとそこには昼食が用意してあるテーブルがあるんだが、先客がいた。

「なに？何か問題でもあるの？あるならお兄一人で外で食べてもいいよ」

「おい、聞いたか秋十。今の優しさに溢れた言葉。泣けてきちまうぜ」

「ほら、さっさと座ろうや。他の客もいるんだから」

「そつよバカ兄。さっさと座れ」

「へいへい……俺の味方はいねえのか？」

テーブルに三人とも座る。

「いただきます」

手を合わせてしっかりと言う。いつもの習慣だし、言わなきゃ奥からおたまが飛んでくる。

「む？蘭、着替えたのか？」

飯に手を着けはじめてから違和感に気づいた。蘭の服装がさっきとは変わって、ばっちりおしゃれをしていた。

「えっ？あ、ああ、まあ、はい」

蘭の頬はさあ、と赤く染まり、台詞もたどたどしくなる。

「俺にはよくわからんが、似合っていると思うぞ」

「えっ！？ほ、ほほほ、ホントにそう思いますか！？」

身を乗り出してまでそう聞いてくる蘭。もともと世間一般では可愛らしい部類に入ると思う。

何か弾が

「うわーまた出たぜ」

とか言っているが、気にしない。

「ところでよ、最近何か面白いことなかったか？飯の話題になるよ

うなの」

蘭が上機嫌になり、ニコニコと飯を食べているのを不思議に思っていると、弾が話題をふってきた。

興味があるのか蘭も箸を止めこちらを見ている。

「んー、これと言っては……。お？ああそうだ。こんなことがあったんだが、どういう意味かわかるか？」

その出来事は、クラス対抗戦の日にまで遡る。

スコールとの通信を終え、何事もなく夕飯も食べた後、部屋に戻ろうと寮の廊下を歩いていたら時のことだ。

「しっ、秋十！！」

ばったり簪と会ったんだが、俺の姿を見た途端に抱きついて泣き始めたんだ。

「お、おい。一体どうしたよ？」

「……ヒック……。だ、だって……。心配……したし、私がお見舞いに行ったとき……。まだ、寝てたんだもん……。……」

「………心配かけてすまん」

そうとう気にかけてくれていたんだろう。そう思い泣き終わるまで、できるだけ優しく頭を撫で続けていた。

「……………う、ごめん」

暫くして泣き止んだはいいが、恥ずかしかったのだろう。真っ赤になって俯いていた。

「気にするな。心配かけた俺が悪いんだから」

そのまま静まりかえる二人。

「あ、あの……………さ。対抗戦、結局秋十が勝ったけど約束、どうする……………の？」

俺の頼み事一つ聞いてくれるってやつか。

「だけどな……………お前を泣かせちまったしなあ……………」

「っー？……………気に、しなくて……………だいじょうぶ」

いや、かなりビクツとしてたけど。

「ま、これは俺のけじめの問題だ。無効にしようや」

「う……………うん」

？どことなく残念そうだが。そんなに俺の頼み事が知りたかったのか？

そもそも冗談のつもりだったから、して欲しいことなんてなかったのに。

「じ、じゃあ……………さ」

おお。突然大声だしてどうした？顔も真っ赤だし。風邪でもひいたか？

「らっ、来月の個人トーナメントで」

そんなのあったのか。そりゃ知らなかったな。

「わ、私が優勝したら——」

真っ赤な顔をしつつ俺の目をしっかりと見据え、身を乗り出すようにしながらやけに気合いの入った声で告げる。

「つつ……つつ、付き合ってくださいっ!!」

顔の赤さが限界を越え、湯気が出そうな程になっている。

いきなりバツと身を翻し、走り去っていく。

おい、そんなに急ぐと——

べたっ。

何も無いところで躓いて転んだ。

「大丈夫か？」

怪我がないか声をかけるが、すぐに跳ね起き、わたわたとしながら去っていった。

しかし、付き合っってって何をだらうか。

「つて、ええええええええええええつ！？」

必要な部分だけ事実をかいつまんで話すと、ガタンツと椅子を倒しながら取り乱したように蘭が立ち上がった。
横では弾がやれやれとやっている。

「どうした、落ち着け」

「そつだぞ落ち着け」

宥める弾を睨み縮ませる。

「し、秋十、さん？付き合ってたっていうのは、つまり……………」

「さあな。何を付き合えばいいのかは知らんよ」

俺の返答に、安心したような切迫詰まったような器用な表情をする
蘭。

「…………お兄。後で話し合いましょ……………」

「お、俺、このあと秋十と出かけるから…………。ハハハ……………」

「では夜に」

有無を言わせぬ口調に、鋭いものを感じた。

「……。決めました」

「な、なにを……だよ」

「私、来年IS学園を受験します」

「お、お前、何言つて——」

がたたっ

ビュッ

ガン！

椅子を倒した弾に厨房からおたまが飛んできて顔面に直撃した。相変わらずおやつさんは蘭に甘いな。

「お前、良い学校行ってなかったか？そもそも適性がなきゃ入れないぞ？」

「問題ありません」

蘭は自信満々にポケットから切れの紙を取り出した。

そこに書いてあったのは——

「IS簡易適性試験……判定A……」

早々に復活した弾が読み上げる。

「おお、俺より高けえ」

ちなみに俺はBだ。義姉さんはSらしい。正しく規格外だな。

「で、ですので、秋十にはぜひ先輩としてご指導を」「いや、まあ。それは構わないんだが……………」

そもそもIS学園にいるかどうか。

「や、約束しましたよ！？絶対、絶対ですからね！」

ああ、また何か面倒な約束が増えちゃったな……………。

弾とゲーセンに行ったりした翌日。

クラスに着くとカタログ片手に賑やかに談笑していた。

「やっぱり、ハヅキ社製のが良いよね」

「でも、あそこってデザインだけって気がしない？」

「そのデザインが良いんじゃない！」

「私は性能とかを見たら、ミューレイのが良いなあ、特にスムーズモデル」

「でもさ、確かにモノは良いけどさ、あれって結構高いよね？」

などなどよくわからん意見交換をしていた。

「ねえねえ！織斑君のスーツってどこのを使ってるの？見たこと

のない型だよね」

「ああ、あれね確か……」

「…… スコールに頼んでおいたから分からんな。というより俺スコールに頼りすぎでは無いか？」

「…… ちょっとわからんな。どこかが特別に作ったことは確かだが」

俺には必要ない気がするんだが。

ISの操縦はAMSだし。

そもそもどんな機能があったわけ？

「ISスーツは肌表面の微妙な電磁差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに伝達し、ISは必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れてますので、一般的な小口径拳銃の弾程度であれば、受け止めることが出来ますが、衝撃自体は消えませんので、あしからず」

スラスラと説明しながら現れたのは、山田先生だった。

その説明だと俺には必要ないらしいな。拳銃だって強化人間の身体には致命的ではないし。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。って、や、山ちゃん？」

「山ピー見直したよ！」

「今日が皆さんのISスーツ申し込み開始日ですからね、ちゃんと予習してきてあるんですよ、えへん……って、や、山ピー？」

皆から弄ばれる山田先生。年上を渾名で呼ぶのはどうかと思うが？まあ俺からしてみれば大抵の人は年下なんだがな。

「諸君、おはよう」

「「「「「お、おはようございます」「」「」」」」

気がつけば義姉さんが教室に入ってきていた。その瞬間にざわざわしていた教室が一瞬で静まり返り、厳格な雰囲気に変わる。相変わらず仕事面ではこれ以上ないほど厳しいな。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練ではあるが、ISを使用しておこう事から各自気を引き締めて行え、各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うように、忘れたものは学校指定の水着で行ってもらう、それさえも忘れたものは、まあ下着で構わんだろう」

いやいや、普通は構うだろう。周りは女子しかないんだ、俺は興味が無いとはいえ羞恥というものがあるだろうよ。

「では山田先生、SHRを」

「は、はい。それではSHRを始めますよ」

義姉さんがいるから静かに進む。

「今日は皆さんにお知らせがあります。なんと、このクラスに新し

いお友達が二人増えます。転校生です！」

その言葉にクラスがざわつく。

それじゃあ、2人とも、入って来て下さい！！」

「失礼します」

「……………」

という山田先生の言葉に教室の扉が開いて、件の転校生が入ってくる。

だが、二人が教室に入ってきた瞬間、教室は静寂に包まれていた。

一人銀髪赤目で眼帯という外見をしている女子なのだが、もう一人が問題だった。

「お、男……？」

誰かが呆然とした様子で放った一言で、他の皆も状況を理解したらしい。

騒ぎそうだな、なんて考えた瞬間に男子の方が一步前に出て、自己紹介をしようとする様子を見せたので、全員がそれを聞こうという体勢に入っていた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことが多く何かと面倒をかけると思いますが、よろしく願います」

ああ、またかよ。

いいか、俺は面倒が嫌いなんだ。

……勘弁してくれ。

EP012―困惑する鴉と波乱の転校生―（後書き）

現在ノブリス・オブリージュを作ってます。ああ、破壊天使砲はかっこいいな。

最近コジマが足りないと言われるので頑張ろうと思ったのですが、そもそも4もfaも持ってなかった……。

だからセリフをどっかから拾ってくるしかできない……。アスピナよっ！もっと俺を汚染してくれ！

ん？アクアビット？ナンノコトヤラ。企業戦士など知ったことかっ！！

トーラス？ハハハ聞こえんなあ。

あんなものを浮かべて喜ぶか！変態どもが！！

では。

意見、感想よろしく願います

EP013—自己嫌悪する鴉と練習—

男の子転校生。その事実教室が静まりかえっている。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃああああ——っ！」

鼓膜が破れそうなほどの歓喜の叫びが起きる。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった~~~~！」

耳を塞いだ上から聞こえてくる。……………どれだけでかいんだよ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

ほら、義姉さんも顔をしかめてる。鬱陶しがってるじゃねえか。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんかっ！」

男子ということが衝撃的だったからか影がうすくなってしまっているが、こちらにもいろいろ面倒を運んできそうだ。

見た目からして軍人という感じがする。

身にまとう気配が抜き身の刀というより、安全装置セーフティのかかっている拳銃だな。

低い背丈だが、冷えきった目が放つ威圧感はとてもではないが友好的ではないだろう。

「……………」

女子を下らなそうに見ていたが、今は義姉さんにだけ向いていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

どこの方式かは知らんが、義姉さんに敬礼をする転校生。

というよりもドイツしかないだろうな。義姉さんが軍隊教官として働いたのはドイツしかないしな。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

敬礼を解き、足を踵で合わせて背筋を伸ばす。

「ラウラ・ボーディヴィツヒだ」

「……………」

名前だけ告げてそれ以上話そうとしない。

「あ、あの、以上……………ですか？」

「以上だ」

山田先生が出来る限りの笑顔で訊くが、無慈悲な即答だった。

「！貴様が――」

何気なく見ていた俺と目があつたと思えばいきなりつかつかやってくる。

パシッ！

「……………何のつもりだ」

「ッ！」

目の前に来て平手打ちをかまそうとしてきやがった。咄嗟に左手で受け止めたが反射的に右手が懐に入っていた。

銃が無いことを思い出し、右手を戻すが視線はラウラとやらから離さない。

ヤツは受け止められたのに驚いていたが、すぐに眼に力をいれて睨んでくる。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

ああ、ほらクラス中が注目してるじゃねえか。一夏もぼかんとしてるし、義姉さんが俺の右手を注視してる。ああ、癖とは怖いな。義姉さんの前でやっちゃまうとは……………。

「勝手にしやがれ」

「ふん……………」

手を振り払い、空いている席に向かっていく。席に着くと腕を組んで目を閉じて微動だになくなる。

「あ…………ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩いて義姉さんが行動を促す。

「おい織斑。デユノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

教室から出ようとした俺を呼び止めて押し付けてくる。

「君が織斑君？初めまして。僕は——」

「別に構わん。とりあえず移動が先だ」

急ぐために手を取り歩きだす。

「とりあえず着替えはアリーナの空いてる更衣室を使え。実習のたびに移動があるから、早々に慣れることをすすめる」

「う、うん……………」

途端に落ち着かなくなるシャルル。というより手の感触が男のものとは思えん。

とにかく速度を上げながら一階へ降りる。

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君と一緒に！」

「チツ。もう来やがったか」

情報収集のために女子がかなりやってきた。

「いたっ！こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

さらに増える女子の軍団。何か妙な空気を醸し出している。

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

「……………何言ってやがんだ、コイツ。
そんなことより、時間がねえ。」

「先に言っとく……………すまん」

軽く断ってからシャルルを小脇に抱えて全力ダッシュをする。

「え……………ええっ！？ちょ、ちよっと！？」

「ええい、暴れるな。遅刻するぞ」

抱えたまま女子の集団を強化人間の脚力で引き離し、更衣室に入る。

「ほれ、さつさと着替えな」

シャルルを立たせ、服を脱ぎ始める。その時何か言っていたが、無視をする。

「おい、着替え終わったか？」

「えっ！？ちよつと早いよ！」

見ると、まだスーツを着ている最中だった。

「お、終わったよ」

「ん。……なら、さつさと行こうか」

急いだから、少し余裕が出来たので歩いていく。

……しかしさつきは急いでいたが、シャルルを抱えたときやけに軽かったな。男の体格とは思えなかった。

ふむ、情報が足りん。今は何とも言えないな。

「あのさ、名前で呼んでいいかな？」

「ん？別に構わんが。……ならこちらでもシャルルと呼ばせてもらおうか」

「うん。これからよろしく、秋十」

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同ともあって、出てくる妙に気合が入った返事も倍になっている。

「鳳、オルコット」

「は、はい！」

「な、何故私まで！？」

「専用機持ちならすぐに準備できるからな」

義姉さんに呼ばれた二人、鈴はやや不満そうに、何でアタシが、と
呟きながら前へでる

「やる気を出せお前等。・・・あいつに良い所を見せる良い機会だぞ？」

「やはり！　ここはイギリス代表候補生であるこの私が！」

「専用機持ちの実力、見せたげるわー！！」

義姉さんが何かを囁いた瞬間、二人の態度がコロツと変わった。一瞬でやる気をマックスに上昇させた二人に皆驚きを隠せない。

「で、誰と闘えばよろしいのでしょうか？」

「何時でもやれるわよ」

「慌てるな。お前等の相手は」

キイイン……

ん？なんだ、この音？

「あああ——！！ど、どいて下さ——い——！！」

——レーダーに上空から高速で接近してくる機影一機を確認

強化人間のオプションの一つのレーダーに激突するコースで飛来する物体を感知した。こんなところで撃墜する訳にもいかないので、前にダッシュして避ける。

そして俺が先程まで居た場所に何かが墜落した。

明らかにでかい物が落ちた音と、大量の土煙が舞う。

何事？と言いたげに皆が落下地点を見ている。

「あう、失敗しちゃいました」

土煙が晴れた先には倒れた姿勢の山田先生の姿があった。だが、その姿はいつもと違う。ダークグリーンの装甲を持つ機体、おそらくは学園の訓練機を身にまとっている。なんか盛大に墜落したけど、まあISを装備してるなら怪我の心配はないだろ。

「さて、小娘共、何時まで呆けているつもりだ？ お前達の相手は山田先生だ」

「え、えつと……」

「その、流石に」

山田先生も落ち着いて二人の向かいに立つ。

「安心しろ、貴様らではすぐに負ける。山田先生は元代表候補生だからな」

「む、昔の話ですよ！昔の！！それに候補生止まりでしたし……」

義姉さんの言葉に照れているらしいが、二人はすぐに負けると言われてその瞳に闘志ををたぎらせている。

つつか、もっと言い方がなかったんだろうか？

「では、はじめ！」

号令と同時にISを展開したセシリアと鈴が飛翔する。それを目で一度確認してから、山田先生も空中へと躍り出た

「手加減はしませんわ！」

「すぐに終わらせるわ！」

「い、行きます！」

いつもの山田先生じゃないな。目が鋭く冷静なものに変わっている。なるほど、元候補生。伊達ではないか…。

「さて、今の間に　　そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

戦闘を見ながらシャルルが説明を始める。

長つたらしい説明をしていたが、興味はないので試合を観戦していた。何とも一方的な試合だったが、義姉さんがシャルルの説明を中断させたところで勝負が決まった。

山田先生の射撃がセシリアを誘導させ、鈴とぶつからせたところでグレネードを投擲。爆発が起こって、煙の中から二つの影が地面に落下する。

未熟な、練習も何もしていないのに連携をとろうとした相手だからこそできた対処の仕方だな。どちらも自己主張が激しかったから、互いに邪魔しあう形になる。

だがこれはレイヴン、リンクスには通用しないだろう。最初から連携なんて考えていないからな。問答無用で味方を巻き込むヤツもいたし、完璧に後方支援に特化したヤツもいた。だから、思い思いに自由に戦闘を行っていた。

「くつ、うつ　　まさかこのわたくしが　　」

「あ、アンタねえ　　何面白いように回避先読まれてんのよ　　」

「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないの

ですわ！」

「こっちの台詞よ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐつ　　！」

「ぎぎぎぎつ　　！」

なまじ誤射を恐れるから、そうなるんだ。

ほら、他の奴らもくだらないがみ合いにくすくす笑いが起こってじゃないか。

「さて、これで諸君にもISS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

でも普段の様子からすると、あまり変わりそうにはないんだよね…。

その後いろいろな面倒なことがあったが、無事午前の実習も終わり、昼休みになった。

「ええと、僕まで同席しても良いのかな？」

屋上で昼食を執ることになり、俺達が到着した時には一夏に鈴、セシリアと篤達が既に席を確保していた。

「飯は大人数で食う方がいいに決まっているだろう。それに、シャルルはまだ学園のことをあまり知らないだろ？ならきっちり面倒を見なきゃならん。義姉さんに言われたし、何より同室になったらし

いしな」

「ありがとう」

そう、俺とシャルルが同室になっっているらしい。どうりで数日前に山田先生から一夏の部屋移動を頼まれたわけだな。しぶっていたが何とか説得して今は箒と同室になっているらしい。

「取り敢ず食べてようや。昼休みは無限ではないからな」

俺の言葉にそれぞれが弁当を取り出す。

「あれ？秋十のお昼は？」

「はい、秋十」

そう言つて鈴が俺にタッパ―を差し出す。

「ん？酢豚か」

「そうよ、今朝作ったの」

「へえ。美味いじゃねえか」

「義兄さん！」

酢豚を食べていると一夏が声をかけてきた。

そちらを見ると、一夏と箒の前に弁当が一つ余分に置いてあった。

「今朝私たちも作ってきたの。ほら、箒」

「う、うむ。……ほ、ほら秋十」

あれ以来微妙な関係になっている筈。一夏と一緒に作ってきてくれたようだ。俺は全くできないし、義姉さんもできない。必然的に家事は一夏の領分になっていたから、料理の腕はなかなかだ。開いた弁当の中身は唐揚げをメインとした本格的なものだった。

「へえ。なかなかうまそうじゃねえか。どれ、お味は……」

唐揚げを一つつまんでみる。

むむ。なかなかうまいじゃないか。この味付けは……

「これ、作ったの筈か？」

一夏のと違うな。

「う、うむ。……どうだ？」

不安そうにうかがってくる。

「一夏とは違った味付けだが、うまいぞ」

うん、昔はこんなに旨いのは食えなかったからな。俺もスミカも家事が一切できないから、あの穢れた大地ではこういった手作り感のあるものは一度も口にできなかった。

筈はその言葉に気をよくしたのか、上機嫌だった。そのまま適当に話しながら昼休みの時間を過ごした。

「えっと、織斑さんが秋十にオルコットさんや凰さんたちに勝てないのは、主に射撃武器の特性を把握していないからだろうね」

「そ、そうなの？一応わかっているつもりだったけど……」

シャルルが転校してきてから五日ほど経った。今日は空いていたので、午後の自由時間に一夏の練習に付き合っていた。

「知識だけで、実践した事はないって感じかな？ さっき僕と模擬戦したけど、ほとんど距離を詰めれずに終わったよね？」

「うう……、確かに。『瞬間加速』も完全に読まれていたし……」

「織斑さんのISは近接オンリーだからね、射撃武器の特性をより深くを把握しないと大戦じゃ勝てないよ。瞬時加速自体の軌道は直線だからね、反応できなくても軌道予測で実際に対応するのは、そんなに難しいことじゃないんだよ」

「直線的かぁ……」

「あ、でも瞬時加速中は無理に軌道を変えようとかしちゃうダメだよ？ あんな速度の状態で無理に軌道を変えようとしたら、最悪の場合骨折しちゃうから。」

「……なるほど」

シャルルの説明をうんうん頷きながらすっかり聞く一夏。まあ今ま

では箒と鈴とセシリアに見てもらっていたんだがなあ……。

『こうズバーツ、とやってからガキンツ、ドカンツ、と言った感じだ』

『何となく分かるでしょ？ 感覚よ感覚・・・何で分かんないんのよ！』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だったというのかしら」

「お前らは黙ってる」

あんなのは教えるとは言わん。

「ところで秋十の教え方ってどうだった？」

「え？義兄さんの？うーん、一回しか教えてもらってないからなあ」
シャルルが気になったのか一夏にきいている。

「たしか、『まずは敵機の位置を確認しろ。絶対に見失うな。常に緩急をつけて動き続ける。決して法則性を作るな。まずはそれからだ』……って言われたよ」

「まあ、まともだね」

「おいおい、俺を何だと思ってやがる」

「えっ、いや、そういうわけじゃ。…ほ、ほら織斑さん射撃武器の練習を試みようか」

慌てて話題を変えるシャルル。まったくひで野郎だ。

「え？他のISの装備って使えないんじゃないっけ？」

「ふつうはね。でも所有者が使用許諾すれば使えるんだよ」

そして五十五口径アサルトライフル『ヴェント』を渡す。

「なんだったら俺のを使うか？マシンガンからバズーカ、ハンドグレネードもあるぞ？もちろんライフル系も全種類な」

「い、いや、大丈夫だよ。まだ初めてだから」

アサルトライフルを受け取り、構えをとる。

「こ、こうでいいのかな？」

「えっと……もっと脇を締めて。左腕はこう。わかる？」

構え方を指導している。そのまま少し話、戻ってくる。

「じゃあ、撃ってみて」

パンツ！

「キャッ！」

初めて撃った反動に身をすくめている。怖がれるだけ平和だな。俺の時はそんなこと思ってる暇なんて無かったからな。そんなことしていたらすぐに殺されていたよ。

「そのままマガジン使い切っていいよ」

考え事してる間になにか指導をしていたらしい。他の三人娘が不満そうな顔をしているがしらん。

「にしても秋十のISって変わってるよね」

「ん？そうかね？」

「うん。武器の種類が豊富だよ。どれくらいあるの？」

武器の種類か、どれくらいだ？

アサルト、スナイパー、リニアライフル。マシンガン、ハンドガン、バズーカ、ショットガン、投擲銃、火炎放射器、ハンドミサイル、ハンドロケット、ハンドグレネード、パルス、レーザー、プラスマライフル、射突型ブレード

「右腕だけで十七種類ある。だから実際はもっとあるな」

「そ、そんなに……」

愕然とするシャルル。

「まあ実際は殆ど使わないのもあるし」

「でも十分多いよ。そんなにあって入りきるのが驚きだよ」

「デュノア君、ありがとう」

ちょうど一夏が撃ち終わって戻ってきた。

「どうだった？」

「うーん、やっぱり慣れないかな」

「あはは、そんなものだよ」

そろそろ次の練習に移ろうかという時だった。

「ねえ、あれって……」

「嘘でしょ！？ ドイツの最新の第三世代型……」

「正式採用に向けて、まだトライアル段階だって聞いてたけど……」

いきなり騒がしくなるアリーナ内部、俺達がそこに視線を向ければシャルルと一緒に入ってきた転校生の軍人がそこにいた。

それもISを身にまとい、殺気だった様子であるからして碌な用事ではないのだろう。

「おい」

俺達に気付いたらしいボーデヴィツヒが通信で呼び掛けて来る。

「貴様も専用機持ちらしいな。ならば話は早い。私と戦え」

いや、一夏に言っている。

「なっ、なんで私が……」

「貴様等さえ居なければ教官が大会二連覇の偉業を成し遂げただろうことは容易に想像できる。だから私は貴様等を——貴様等の存在を認めない！」

ああなるほど。そういうことかい。おかげでお前が俺達を敵視する理由が分かったよ。

大会二連覇の邪魔をしたか一夏を狙い、義姉さんの弟だから目の敵にするのか。ああ………まったくもってくだらない。

「くだらない。くだらなさすぎて笑い物だぜ。………おい、軍人さんよ」

「なんだ」

「俺には戦う理由が無いのだが？」

嘲笑うように言い放つ。

「フン。ならば戦わざるを得なくしてやる」

言うやいなや黒いISの大型の砲台が火を噴く。

ドン！！ガキン！！

「……こんな密集空間で、いきなり大火力戦闘を行おうとするなんて、ドイツの人は随分と沸点が低いものだね。ビールだけじゃなくて頭もホットになっちゃってるのかな？」

砲弾は一瞬で盾を呼び出したシャルルが大砲の射線に入って防いだ。

だが、俺は嗤いを必死にこらえていた。

「貴様、フランスの第二世代アンティークごときで私の前に立ち塞がるか」

「未だに量産の目処すら立ってない第三世代ルキーより動けるだろうからね」

そのままシャルルとボーデヴィツヒが睨み合う。一触即発の雰囲気だった。が、

「クツ……ククツ………ヒヤハハハハ！！」

「貴様！何がおかしい！」

俺の嗤い声が響いた。ああ、嗤いが止められん。

「ハハハハハッ！………俺は軍人が嫌いだ、いいぜえお前さんは。なんせ私情で民間人に手を出す規律破りなんだからなあ！！…

…それともなにかあ？ドイツは民間人に対して自由に武力行使していい国なのかあ？ハハハッ！そりゃステキな国だなあ！！」

「き……貴様あ！」

キレたのかさらに銃口をこちらに向けてくる。いつ戦闘になるか分からないほどの状態だ。

『その生徒！！何をやっている！！！学年とクラス、出席番号を言え！！』

この騒ぎを誰かが先生に言ったのだろっ、スピーカーから担当教師の怒号が響いてくる。

「ふん……今日は引いてやろっ」

このままではまともに戦えないと思ったのだろっ。銃口を下げ、去って行った。

「大丈夫、秋十？」

「……………ああ。ちょっと頭冷やしてくるから先に戻ってるな」

どうしてもああいう微温湯に浸かりきったやつを見ると感情が抑えられなくなっちまうな。

右手で頭を抱えながらさっさと更衣室に戻る。

顔を冷水で洗ってからベンチに腰掛けて自己嫌悪していた。

「あのー、織斑君とデュノア君はいますかー？」

「？はい、織斑だけいます」

「入っても大丈夫ですかー？」

「ええ、大丈夫ですよ」

パシユツとドアが開いて山田先生が入ってくる。

「あれ？まだ着替えて無かったんですか？」

「ちよつと考え事をしていたもので」

「そうですか。あ、それですね、今月下旬から大浴場が週二回使えるようになりました」

「おお、そうですか。ありがとうございます」

「いえ、仕事ですから。あと、デュノア君にも伝えといて下さい。それと、書いてもらいたい書類があるので、着替え終わったら職員室に来て下さいね」

「わかりました」

諒解の返事をするに出ていく山田先生。ドアが閉まったのを確認してから着替える。とはいえ着替えなんてすぐに終わる。ちゃっちらと着替えて山田先生に声をかける。

「着替え終わりました。じゃあ、行きましょつか」

書類とはいえ、名前を記入するだけだった。枚数はあつたが、やらなけりや専用機を持てないからまじめにやった。

気分転換に部屋でシャワーでも浴びるか、などと考えていると見覚えのある後姿をみかけた。

「おう、簪じゃねえか」

「ひゃっ!?!……し、ししし秋十っ!?!」

俺の顔を見ると途端に顔を赤くして慌てだす。呂律もまわっていないし。

「ほら、落ち着け。深呼吸だ深呼吸」

「うっ、うっうっうん!」

俺に言われてすーはーすーはーとする。

「ど……どうした、の?」

多少落ち着いたようだがまだ顔が赤いままだ。

「いや、ただたまたま簪を見かけたから声かけただけだが」

「そ、そうなの」

なんか落ち込んだようだが、よくわからんな。

「俺は部屋に戻る途中なんだが、お前は？」

「わ、私も……そう」

ちょうどいいな。なんというか俺も誰かと話して気を紛らわしたい。さっきの黒歴史を新たに作ってしまつて荒んだ心を癒したい。

「んじゃ、途中まで一緒に行こうぜ」

「うん！」

おお、とたんに元気になった。

部屋までの分かれ道まで他愛もない話をして過ごした。時々示す反応が可愛らしくて俺の心が癒えた気がした。

「んじゃ、またな」

「うん！またこんどっ！」

笑顔で別れ、部屋への廊下をトテトテ走っていく。またコケないか心配だったが、何事もなく簪の姿が見えなくなった。

「ん？シャルルがシャワーを浴びてるのか……」

部屋に戻るとシャルルの姿は見えず、水の流れる音がしていた。

仕方ない本でも読むか、と床に座ろうとして思い出した。

「……たしかボディーソープがなくなっていたはずだ」

詰め替えのパックを取り出し脱衣所に向かう。

ガチャ

ガチャ

ドアを開けたらちょうど浴室のドアを開けたのだろう。二つ音が聞こえた。

「おお、シャルル。ほれ、詰め替え用の………」

「へ？し、しゅ……しゅう、と？」

「あ？」

出てきたのは、金髪の『女子』だった。

これは…面倒な…事になっ…た……。

EP013—自己嫌悪する鴉と練習—（後書き）

投稿完了です。

萌え、薄くなかったですか？

最近内容が駆け足する気がする。展開早すぎやしませんかね？

簪をもつと愛でたいのに、今回もちよつとしか出れなかった。バランスが難しい。

それでは、また。

EP014―悔やむ鴉と黒い子兎―（前書き）

遅くなって申し訳ありませんでした!!

木曜日、学校祭の準備

金曜日、部活の試合

土日、学校祭

という忙しさに加え、なかなか思い浮かばなかったのです。

ちょっと雑かもしれませんが、どうぞ

EP014―悔やむ鴉と黒い子兎―

「それで？」

シャルルが女である事が発覚し、裸を見られてしまったパニックからようやく落ち着き、机に向かい合って座っている。

「何故男装なんかしていた」

「うん。実家の方からそうしろって言われて」

「実家　って言うとデュノア社か」

「そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

「命令　」

「僕はね。愛人の子なんだよ」

黙ってシャルルの言葉を待つ。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でIS適応が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになったの」

年頃の少女にはつらいであろう事実を話す。

「父にあったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸

で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときは酷かったなあ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が!』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのに」

あはは…、と自嘲するように乾いた笑みを浮かべる。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「……第三世代型か」

「うん。もともと第二世代も最後発だったからね。圧倒的にデータも時間も不足しているの。政府からの通達で予算も大幅カットされて、もう後が無い状態なの」

「だから注目を浴びるために男装した……と」

「そう。それに――」

視線を逸らし、どこか苛立ちを含んだ声で続ける。

「同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう　ってね」

「なるほど。ノーブライートのデータを……か」

まったく、しょうもない理由で。それにまったくの見当違いだ。

「残念ながら俺のISは第二世代だ。データを得たところでどうにもならんよ」

「うそ……でしょ？記録を見せてもらった事があるけど、第三世代以上の性能をだしてたじゃない」

「だが俺が今まで特殊兵器を使った事があるか？」

「で、でもあんなにたくさん装備が入るんじゃない——」

「あれも、コアの容量に任せた荒技だ。何も特殊なことはしてないさ」

「……ハ、ハハハ。僕の行動は結局無意味だったんだね」

もはや諦めたように、様々な感情が混ざった嗤い方をする。その目からは涙が流れていた。

「……お前はどうする気だ？」

「秋十にバレたから、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「そんなことを聞きたいんじゃない。シャルル、お前自身のことを聞いている」

「時間の問題じゃないかな？フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな？」

どこへ行っても、いつまで経っても、自己の利益しか求めない自分勝手な企業に振り回されるのは力のない人間なのだな。

俺に出来るのはこの少女が俺のような道を進むことが無いようにすることだけ。ならば

「特記事項第二十一」

「……へ？」

「特記事項第二十一を言ってみろ」

突然の言葉に驚くが、俺の態度に震える口を動かし言葉を紡いでいく。

「え、えっと……本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする、だったっけ？」

「そうだ。確かにこれには抜け穴があるが、今のお前には身一つしかないようなものだ。ならばここにいる三年間は何者にも干渉されず、侵害されない時間になるんだ。その間にどうするか、自分の答を探してみせろ」

「自分の………答？」

「ああ、そうだ。お前がどうしたいのか、自分の歩む道を自分の意思で決めるんだ」

立ち上がり、片手を対面に座るシャルルに差し出す。

「ほら、お前を戒めていたものはもう何も無いんだ。鳥籠から飛び立とうぜ」

決心がつかないのか、不安な表情を見せているシャルル。

「なに、行き先が分からないのなら止まり木くらいにはなつてやるさ。……だから、お前はここにいていいんだ。ここにいて、行き先を見つければいいんだ」

シャルルはその言葉に目を見開く。

「ここにいて………いいの？」

「ああ、勿論だ。ここにいて誰を咎めはしないさ」

軽く頷きながら言うと、シャルルはその丸く開いた目からポロポロ涙を流し始めた。

「泣くんじゃねえ。お前は今、囚われていた籠から飛び立つんだからよ」

「だ………だつて、ここにいていいなんて言われたこと無いんだもん」

「……………まったく」

ため息を吐きながら、差し出していた手でシャルルの頭を撫でる。

ああ、やっぱりこの世界は温すぎるな。この程度のことでは悲劇のヒロインとは……………いや、俺もぬるま湯に浸かりすぎたかね？こん

な日常茶飯事な出来事なんかに手を差しのべるなんてな。

「あ……………ありがとう」

おや？いつの間にか泣き止んでいたようだな。何か顔を赤くしてるけど。

「んで？お前さんはどうするんだ？」

「う、うん。がんばってみる……よ」

「そうか。……………ほら」

「へ？」

再び手を差し出すが、シャルルは分からないように小首をかしげている。

「飛び立つんだろ？だったら少しくらいは手助けしてやるさ。だから立ちあがってみろ。まずはそれからだ」

「う……………うん！」

シャルルは心からの笑みを浮かべて手を取った。

……………俺は、その重石が取れたような眩しい笑顔につい顔を背けてしまいたくなった。

消灯時間を過ぎ、薄暗くなった部屋。向かいのベッドで寝ている人物の顔をのぞき見る。

「秋十はずるいよ。あんな事をピンポイントで言ってくるんだもん」
最初に男装のことがバレたときはもう終わりかと思った。いや、本来は終わりだったのだろう。
けど、秋十は道を示してくれた。騙していた自分を責めることなく、飛び立て、と背中を押してくれた。

『お前はここにいていいんだ』

力強く言われた言葉を思い出すだけで心が温くなる。きっと今僕の顔は真っ赤になっているのだろう。

「思わず泣いちゃったけど、秋十の手……温かったなあ」

撫でてくれた手のひらの感触がよみがえる。それだけで頬が緩んでいく。

『少しくらいは手助けしてやるさ』

「ホントにずるいよ。……あれだけで僕の心を救っちゃうんだもん」

流れた涙が僕の心を洗い流してくれたから、母さんが死んでから初めて心から笑えた気がする。

ありがとう、秋十。

「…………でも」

どうしてあんなに苦しそうな表情を浮かべたのだろうか。まるで自分を責めるかのような顔。

「そういえば僕、秋十の笑顔をみたことないな」

たまに笑うけど、記憶にあるのはどれも一歩引いたような笑い方。本当の、心からというのは見たことが無い。

「なんで笑わないんだろう？」

いつか見たいな。

軽くなった心のまま、のんきにそんな事を考えながら布団にもぐりこんだ。

—— s i d e 秋十

「う、ウソついてないでしょうね!？」

月曜の朝、教室に入ろうとしたところで大声が聞こえてきた。

「なんだ？」

「さあ？」

隣を歩いているシャルルもその声に目をしばたたかせていた。

「本当だつてば！この噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき——」

「俺がどうしたつて？」

「」「きゃああつ！？」」「」

普通に声をかけたはずなのに、取り乱した悲鳴が返ってくる。
……地味にシヨックだな。

「で、何の話だったんだ？俺の名前が出ていたみたいだが」

「う、うん？そうだったけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

怪しすぎる。明らかに俺関係の話で間違いない。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですね！わたくしも自分の席につきませんと」

よそよそしい様子で二人はその場を離れていった。

「なんなんだ？」

「さあ？」

途中の休み時間、例の軍人崩れが義姉さんにドイツに云々言っていたが、特に何事もなく放課後になった。

だが、問題は起きた。それは空いているアリーナへとシャルルと向かっている最中のことだった。

ドゴオオオン！

突如アリーナのシールドバリアー越しに大きな爆音がした。

いや、それだけだったらとるに足らない模擬戦のヒトコマだったかもしれない。

だが俺が見たものは…………

ボロボロになり、装甲も一部剥がれているセシリアと鈴の倒れ伏す姿。

そして――

「アッハハハハハッ！！貴様がッ！貴様ごときが教官の妹だと！！」

「イヤッ！助けて！たすけてよ……………お兄ちゃん！」

これをしたであろう軍人崩れと、セシリア達以上にボロボロなのにまだ攻撃を加えられて泣き叫ぶ義妹の姿だった。

「…………… A M S 強制接続」

「しっ、秋十!？」

ISを展開した俺にシャルルが何か言っているが、無視してOBを起動する。

一瞬でアリーナのシールドバリアーまで到達。とっつきでぶち破り一夏の元へと行く。そのままとっつきをもう一発放ち、軍人崩れの右肩をぶち抜く。

右肩のアーマーが吹っ飛び、衝撃で一緒に軍人崩れも飛んでいく。

「お……………おにい、ちゃん」

「貴様はっ!！」

高速なため、いきなり現れたように見えるであろう俺に軍人崩れが驚いている。

「……………一夏、すまないな。こんな思いをさせて」

「ありがとう……………お兄ちゃん。また……………だね」

「いいんだよ、気にすんな。妹を護るのも兄の勤めだ」

脚部だけ一部展開して一夏を優しく抱き抱え、涙を拭ってあげる。安心したのか、ISも解除され気絶してしまった。

……………また一夏に巻き添えをくらわせてしまったな。誘拐のときと
いい、な。

「ちょうどいい。貴様もこの場で――」

「――黙れよ軍人崩れが」

体勢を直したのか、俺を睨みながら何かを言ってくるがカンケイナイ。

「――ああ、いいぜ。お前がそうくるんだったら、手加減抜きで完膚無きまでに……」

殺してやる

軍人崩れから感じる暫く忘れていた感覚。怒り、妬み、憎悪などの負の感情。そして肌に刺さるような殺意。だが、まだだ。こんなものじゃ温すぎる。あの世界を生き抜いた俺には稚戯にも等しい。見せてやるよ俺の――レイヴンの力を。

「ッ!?!……なっ……あ………」

俺から放たれる殺気に吞まれる軍人崩れ。武器を構えられる気概くらいはあるのか。

「行くぜ子兔。安寧の揺りかごに守られ続けている雑魚が」

一夏を地上に下ろし、静かに横たえる。一撫でしてから子兔を見据え左腕を構える。一瞬だけ光り、月光が展開される。

一夏達に被害がいかないよう少し離れてからブースターに光が集まり高速に動き出す。

彼我の差はあつという間に縮まり、身が竦んで動けない子兎に蒼白い刃が叩き込まれる―――
筈だった。

「何をしている」

それを阻んだのは、右側から割り入ってきた影だった。

目の前に現れた切っ先に急ブレーキをし、その姿を見る。

IS用の近接ブレードを持っているがISスーツではなく、いつものスーツ姿の義姉さんだった。

「模擬戦をやるのは構わん、だが、アリーナのバリアまで破るような自体となれば、教師として見逃すわけにはいかん！」

「……………義姉さん」

その義姉さんの姿を見て、俺は冷静になれた。

普段と変わらない様な表情だが、子兎に見えない左手は血が出そうなほど握りしめて震えていた。

当たり前だ。血の繋がった実の妹があんな目にあつたし、起こしたのが自分の嘗ての教え子だ。悔しさややるせなさは俺以上だろう。

「……………申し訳ありませんでした」

潔く刃を引き、ISを解除する。

「決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「わかりました」

「き、教官が……そう仰るなら」

まだ恐怖に震えているが子兔も義姉さんの言葉に頷きISを解除する。

その姿を一瞥してから一夏の元へ向う。

ちょうどストレッチャーに乗せられるところで、俺はそれに着いていた。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

背後では銃声のような手を叩く音が聞こえていた。

EP014―悔やむ鴉と黒い子兎―（後書き）

ラウラの評価

セーフティーのかかっていない拳銃↓危なっかしい軍人↓規律破りのステキな軍人↓軍人崩れ↓子兎

揺りかごに守られ続けている

……つてのは、ケージのなかで安穩と暮らす兎のこと。

ISという守られた戦場しか知らない軍に対する揶揄のつもり。
上手くできたかな？

思ったのだけど、ACは実際は両手両肩の武器を同時に使えるのでは？とかだと、右手か肩のどちらかしか使えなかったけれど。

だから、四門同時ガトリングとかどうですか？
何か凄いことになりそうだけど。

日常パートは浮かんでいるのに、ラウラが揃うまで書くことが出来ないでいる。

はやくトーナメントも終わらせたい。

それでは、
また。

EP015（前書き）

タイトルが……………思い付かなかった。

遅くなって申し訳ありませんでした。

EP015

「……………」

あれから数時間。保健室に運び込まれ処置は既に済んでいる。

セシリアと鈴は悔しいだの何だの言っていたが、今は静かにしている。

というよりもこの場にいる全員が黙っている。それは、一夏が未だ目覚めていないからだ。

「……………一夏」

幸いな事に痕が残るような大した怪我は無い。この点はISさまさまだな。だが、ショックからか時折うなされている。

「……………ごめん、ね。秋十」

「何故、お前が謝る」

「あたし達が弱いから一夏にまで怪我をさせちゃってさ……………」

つたく。鈴はいらんことまで気に病みおつて。

「お前らのせいではないさ。これは……………これは俺達織斑の問題だ」

そう、アイツを指導しきれず盲目的な崇拜にまで至らしめてしまった義姉さんと、一夏を護れず誘拐させてしまった俺。二人のツケがこんな形で返ってきたんだ。これは俺がちゃんと払わなければいけ

ない。

「それでも……………さ、あたし達がもつと――」

「……………おにい……………ちゃん？」

「っ！？気がついたか、一夏」

不甲斐なさに拳を握りしめていると、一夏がうつすらと目を開けてこちらを向いた。

「気分はどうだ？」

「うん……………まだ、ちょっとクラクラするけど……………だいじょうぶ」

「そう……………か」

胸を撫で下ろす。もしもこれ以上何かあったら、俺はアイツを最悪殺しかねない。

「ごめん……………ね、義兄さん。私、また……………」

「ごめんな……………また、怖い思いをさせて。俺が不甲斐ないばかりに……………ごめんな」

そのまま一夏を抱きしめる。

「ん……………少し痛いかも」

少し身動いで言う。

普段からは考えられないその弱々しさに、己の弱さと甘さを突きつけられる気がして思わず齒軋りをしてしまう。

「……………したの？」

「なんでも、ないさ」

いかな、一夏に心配させるとは。安心させるように抱きしめたまま、胸元にある一夏の頭を撫でる。艶やかな黒髪を梳くようにゆつくり動かすたびに、一夏は気持ちよさそうな声を出す。

空気を読んでか、他のメンバーは何も言わない。そのことがありがたかった。

「さ、もう一眠りしな。俺が側にいてやるから」

「あ……………うん」

一夏を離れたときに淋しげな声を上げたが、もう一撫でしてからベッドに寝かせて布団をかける。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？どうかしたか？」

「わたしが寝るまで、頭……………撫でてくれる？」

「……………フッ。そのくらい、構わないよ」

その可愛らしい甘え方に拒むことなく、優しくそつと手を置く。

それだけなのに、安心しきった表情で目を瞑る一夏。

暫く慈しむ様にゆっくり手を動かしていると、規則正しい寝息が聞こえ始めた。

「ようやく眠ったか……………」

眠ったことを確認して、椅子から立ち上がろうとしたが、一夏の手が俺の服を握っていた。そのことに苦笑して、椅子に座り直す。

「……………一夏さんは大丈夫ですか？」

「ああ、もう大丈夫だろう。ありがとな」

「いえ、心配するのも当然ですわ」

まったく、いい友人を持ったな一夏は。

「まあいい。……………お前らは今日は早いとこ部屋に戻ってゆっくりしな。俺は一夏が起きるまでここにいるから」

少し強引かもしれんが、退出を促す。

「……………ええ、今日はそうしますわ」

「……………そうね。正直疲れちゃったし」

「……………致し方があるまい」

「…………秋十も無理しちゃダメだよ？」

…………まったく、ホントに俺には勿体無いくらいのいい友人だな。

あの後、数時間経ってから一夏が目覚まし、食堂に向かうことにした。

一夏を気遣いながらゆっくり歩いていたら、シャルルと合流。そのまま一緒に行くことになり、食堂に入ったところで女子の襲撃を受けた。

「なっ、なに！？」

「…………何の騒ぎだ」

せつかく一夏をゆっくりさせようと思っていたのに、こんなに騒いでたらゆつくりできないじゃねえか。

「これ見て、織斑君」

近くにいた女子に一枚の紙を渡された。

そこに書いてあった内容は、トーナメントを二人のペアで組んで行うというものだった。

「私と組んで、織斑君！」

「私と組もう、デュノア君！」

「え、えっと……………」

ああそうか。シャルルが女つてことを秘密にしなけりゃならんからな。……………面倒な事になった。

「ったく、俺はシャルルと組む。だから諦めてくれ」

「……………まあ、そういうことなら……………」

「他の女子と組まれるよりはいいし……………」

少しの間場が沈黙したが、納得したのか口々に仕方ないかと言いなから離れていく。

「……………ふう、大丈夫だったか一夏？」

「うん。……………そんなことよりも義兄さん！」

おいおい、そんなに大声だして大丈夫なのかよ。

「私と組んでよっ……………いつっ」

「まだ完治してないんだから無茶するな。それに今のままだとお前は出場できないぞ」

「……………へ？どうして？」

「お前が寝てる最中に山田先生が来てな、伝えてくれたんだよ。お前ら三人のISのダメージレベルがCを超えてるって」

どうやら一夏は理解できてないようだ。頭に？を浮かべている。…

……コイツ、勉強はできる筈なんだがなあ……。

「織斑さん、IS基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三だよ」

「え、えつと………」

「……『ISは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働も含まれ、ISのダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまつたため、それらは逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがある』」

「そ、そう。それよそれ！」

それくらい言えるようになれよ。

「……まあ、そういうことだ。今回は諦めるんだ」

ここまで言えばさすがに理解したようだ。……しゅしゅと、いかにも不本意ですと言わんばかりだった。

何でそんなに出場したいのだろうか。理解できんな。

六月も最終週に入りトーナメント当日。月曜から包まれていた慌ただしさも来賓の誘導などでさらに増していた。

そんな中、俺とシャルルは更衣室で既に待機していた。

モニターには観客席の様子が映し出され、各国政府関係者、研究所員、企業エージェント等々の相当な顔ぶれが会している。

「この人達は三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認の為にそれぞれ来ているからね。一年には今のところ関係ないけど、上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ。将来性があれば自分のところに取り込もうって感じかな」

「へえ、そりゃまたご苦労なことだ」

正直興味がない。企業やお偉いさんの覇権争いなんて知ったことではないからな。

結局セシリアも鈴も出場を許可されなかった。

一夏に関してはまだ完治していないから当然として、あの二人はISの修理が間に合わなかったようだ。代表候補生がトーナメントに出れないのはマズイだろう。いや、俺と親しいという事実がまだ彼女達を候補生のままにしてくれるだろう。国としては、あわよくば俺を自国に引き込みたいだろうからな。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

その言葉にモニターを見ると画面がトーナメント表に変わっていた。

「——ほう？」

「——え？」

表示された一回戦の組み合わせ。それはラウラと箒のペアだった。

「一回戦で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「ハッ、そりゃ行幸だ」

アリーナで向かい合い、奴を見据える。開始のカウントダウンが始まる。五、四、三、二、一——開始！

「叩きのめしてやる」

「子兔風情が。格の違いを見せてやる」

早々子兔は右手を向けてくる。

奴のISの特殊武装、AICを使う気なのだろう。だが、そんな見え見えの攻撃など。

OBを起動。即座に横に移動し、停止範囲から逃れる。そのまま奴を正面に収めながら小さくブー스트を噴かし、カラサワを撃ちながらランダムに移動する。

「ふん、その程度！」

ガキン！とリボルバーの回転がし、ISが警告をだしてくる。

だがな——

「させないよ！」

背後からシャルルが飛び出し、アサルトカノンの爆破弾で妨害をする。

「ちっ……！」

さらに畳み掛けるようなシャルルの連射に後退を余儀なくされる。

「逃がすかよっ……！」

即座に距離を詰める。その間に両手にショットガンを展開。そこから放たれる散弾は薄く弱いながらも弾幕となり、A I Cに必要な集中力を削ぐ。

「私を忘れて貰っては困る」

さらに接近しようとする俺の進行上に打鉄を纏った箒が遮る。シールドで散弾を防ぎながら俺へと斬りかかってくる。

「チッ！………邪魔だ！」

振り下ろされたブレードを咄嗟にショットガンをクロスさせ受け止める。

力勝負では勝ち目が無いとわかると箒はブレードを引き、手数で勝負しようとさらに攻撃を加えようとするが、片側だけスラスターを点けてシオルダータックルをする。予想外であろう攻撃に姿勢を崩す箒。だがその隙にまたスラスターを点ける。

左側だけのそれは俺の身体を横向きに回転させる。そのまま一回転をしてさらに左足も点けて勢いを増し、箒の脇腹に蹴りを放つ。

ズガンッ！

その威力に吹き飛ばされる箒。そこに更に変更した右腕の武器、C
WG G—HG—10—ハンドグレネードを撃つ。

そのまま蹴りの衝撃とグレネードの反動に任せその場から移動。次の瞬間、先程までいた場所をレールカノンの弾が通過する。

「箒の方を頼むぜ、シャルル」

グレネードの直撃を食らってそれなりにダメージを与えられただろう箒へのトドメをシャルルに任せ俺は子兔に向き直る。

「……まったく、貴様はフレンドリーファイアも辞さないのか」

「ふん、私の邪魔をするからだ」

「……………ハハハッ！！……………こりやますますどうして。義姉さんはこんな雑魚も指導しきれなかったのかっ！」

「ッ！？…き、貴様ア！！教官のことを侮辱するのか！」

義姉さんのことを出すと案の定すぐさま激昂しだした。

「だってそうだろう？軍規を無視し、民間人に手を上げ、怪我を負わせる。タッグ戦にも関わらず余裕でフレンドリーファイアをして拳句邪魔扱い。集団戦の大切さも理解していない。さらには少し言われただけですぐに激昂する。……………よくもまあ軍人ができたものだな。いや、義姉さんの指導が悪かったのか？」

少し高圧的な態度で嫌味ったらしく言うだけで子兎はさらに冷静さを失っていく。

「……………教官を、侮辱するなぁッ!」

「ハッ!侮辱するなだど?笑わせるな。……………貴様の言動が『教官サマ』の名を貶めているのだよ!」

俺を睨み付けてくるが、殺気が温すぎる。だが、冷静さが完全に無くなったのだろう。次の瞬間には叫びながら突撃してきた。

「貴様アアアアアアアッ!」

一気に接近し、両手のプラズマ手刀で何かを振り斬るように乱雑に斬りかかってくる。

だが力任せの攻撃が当たるはずもなく、身体を逸らしながら、時折月光で往なしながら対処する。

コイツは頭に血が上って完全に忘れている。——これがタッグ戦だということ。

「はあああ!」

パンッ、タタタタ……

「クッ!?!」

背後に躍り出たシャルルの放った弾丸が全弾命中する。

ふと見ると、アリーナの隅にはシールドエネルギーがゼロになった
だろう筈が悔しそうな顔をして膝をついていた。

「邪魔を……………するなあ!!」

すでに冷静さを失った子兎は、シャルルへと右肩のレールカノン
を向ける——俺を無視して。

「おいおい、俺を忘れるなよ？寂しいじゃねえか」

とりあえず砲身にとっつきを当てて射線をずらす。
それによって見当違いなところへ飛んでいく砲弾。

憎々しげにこちらへとプラズマ手刀を向けようと振り向くが、既に
俺は距離をとり両肩の武器CWX―GND―30―グレネードラン
チャーを構えている。

「なっ!?!……………くっ!?!」

射出された二発のグレネードをAICで停止させる。だが、その選
択は間違いだ。

「とつた!!」

「なにっ!?!」

その驚きは何に対するものだろうか。

データに無いであろう初めて使った瞬間加速^{イグニッション・ブースト}か、その手に持つリボ
ルバーと杭が合わさったパイルバンカー、盾^{シールド・ピアース}殺しか。…………いや、そ

の両方だろう。

「この距離なら外さない！」

「くっ、クソッ!!」

悪態をつき、避けようとするがもう遅い。

「「おおおおおっ!!」」

OBを使い、シャルルと挟む形でつつきをぶちこむ。
俺の背後からの攻撃に気づいたが、その時にはトリガーを引いていた。

「これでっ——」

「おわりだっ！」

シャルルの言葉を繋ぎ、叫ぶ。それと同時に奴の腹部と背部に叩き込まれる。

その圧倒的高火力に絶対防御が発動。エネルギー残量を奪っていく。盾殺しの連射に、さらに装甲ごと削られていき、次弾の準備が完了した俺のつつきで最後の一撃を与える。既に満身創痍な状態の子兔は、その衝撃に吹っ飛ばされて地面を転がって停止した。

「（こんな……こんなところで負けるといつのか、私は………！）」
確かに力量を見誤ったし、挑発に乗ってしまい冷静さを失いもしていた。

……………けれど！

「（私は負けられない！負けるわけにはいかない！）」

遺伝子強化試験体である私は常に勝利を得るためだけに作られた。そのためだけに鍛えられ、それを望まれていた。

だが、ISの登場によって一変してしまった。

疑似ハイパーセンサーの役割を果たすため、ナノマシンを移植して『境界の瞳』を植え付けられた。

だが制御不能に陥ったせいで私はISの訓練で遅れをとり、トップの座から転落した。

『出来損ない』と嘲笑されていた私は、教官と出会ったことで再びトップに君臨した。

その教官の姿に憧れた。強さに、凛々しさに、堂々とした様に、意志のこもった瞳に憧れた。

いつしか教官のようになりたいと願うようにさえなっていた。

「どうしてそこまで強いのですか？どうすれば強くなれますか？」

ある日、こんなことを聞いてみた。

「私には弟と妹がいる」

「ご姉弟……ですか？」

「妹もそうなんだが、特に弟を見ていると時々思うことがある。何をもって強さとするのか、その先の答つてものを」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいさ。そうだな、いつか日本に来ることがあるならば会ってみるといい。……ああ、忠告しておくがな、あいつに――」

いつもの凜々しくて厳しさを持った顔ではなく、優しい笑み。気恥ずかしそうな表情。

……そんな表情は違う。もつと強くて凜々しく、堂々としているのが私の憧れる織斑千冬の筈だ。

教官にこのような表情を浮かべさせる存在が許せない。認められない。

だから、この手で敗北させると誓った。完膚なきまでに叩き伏せるのだと。

「（力が、欲しい）」

『――願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？ より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。私は勝たなければいけないんだ。その為ならばなんだってしてやる。

だから、力をくれ！誰も抗えぬ、強者の力……………比類無き最強を
！！

D a m a g e L e v e l …… D .

M i n d C o n d i t i o n …… U p l i f t .

C e r t i f i c a t i o n …… C l e a r .

《 V a l k y r i e T r a c e S y s t e m 》 …… b o o t .

EP015（後書き）

最近あまり時間がない上に筆が進まない。
けれど、戦闘は一日足らずで書けたという。

台詞と武器の確認の為に久しぶりに3をやったけど、ぜんぜんできなかった。

機動兵器侵攻阻止をやったけど、分離したやつをどうしても倒せない。昔の僕はよくSランクをとったなあ……………。

あと、この小説はfaみたいに表すと、IS学園ルート（企業連）と亡国機業ルート（ORCAルート）にわけれるんですが、頭の中では亡国機業ルートをだいたい考えてますけど、それでいいですよ？

セカンドシフトしたときの名前が浮かばない。何かいい案ありませんか？アンサラーだとAFと被るんで、違うのにしたいのですが……………。

それでは、また。

EP016（前書き）

遅くなって申し訳ありませんでした！

原作と対して変わりませんし、文量も少ないですが、ご了承を。

EP016

「アアアアアアアアアアアッ！！！」

俺とシャルルのパイルバンカーが極り、試合終了の合図を待つていと、突如倒れていたラウラは身を裂かんばかりの絶叫を發した。

「なっ、なに……………あれ」

シャルルが呆然と呟く。それはこの場にいるほとんどの人の心境を代弁しているだろう。

視線の先では、奴のISシユヴァルツエア・レーゲンの装甲がどろどろと溶けていく。そして不出来な泥人形のように作り変えられていく。

その姿は今までの面影など欠片も無く、最低限のアーマーがあるのみで、頭部をフルフェイスで覆われ、ラインアイ・センサーの赤い光が漏れていた。

「……………そういう……………ことかよ」

だが、その手に持つ武器で理解した。

嘗て義姉さんが振るっていた刀―雪片。それと同じ形状をしている。

「……………ふざ……………けるなよ……………」

「……………し、秋十？」

手に入るからと安易に自分で掴んだ力でないものに頼るラウラ。そ

してアレを積んだであろう何処かのお偉いさん。その両方が許せない。

——俺には才能が無い。歩兵として戦場を生き残ったことさえ奇跡に等しい程に重火器に関する才能が欠如している。

生きるために血ヘッドを吐くほど練習し、効率よく殺す為に研究して、多くの人間をこの手に掛けた。矛盾しているかもしれないが、数多の戦場に出、常に最前線を駆け抜けた。安らげる時などなく、いつも命の危険に脅かされてきた。

ACに乗ってもそうだ。殺して殺して殺し尽くした。今の俺の技術はそうやって築いて来たんだ。

だからこそ、こんなISに護られた、死なんて程遠い生温い絶望しか知らなさそうな小娘がどこから力を与えられるなんて許せない。そんな逃げ道を用意した製作者が許せない。まるで………まるで俺の努力を否定されるかのようで。

「…………クソが」

ギリツと握りしめた手から装甲が軋む音がする。

「一体どうしたのさ、秋十」

「秋十、何をそんなに苛立っている？」

あれは俺が倒さなければならんだよ。じゃなければ俺のすべてを否定されてしまう。

「教師の部隊が收拾する！お前が行く必要はないだろう！？」

一歩踏み出した俺を咎めるように幕が言う。

「……………逃げえよ。やるかやらないかじゃない。やらなければ俺が俺でなくなる。……………それだけだ」

「なっ……………何を」

『やる気……………なのだな織斑？』

義姉さんからプライベート・チャンネルが入る。

「ハイ、そのつもりです」

『ならいい。……………すまないな、尻拭いをさせてしまつて』

「そんなこと気にしなくて大丈夫だよ」

『そうか。負けるなよ……………秋十』

「!?!……………フツ。わかってるよ、義姉さん」

まったく、義姉さんは。このタイミングで言うなんてよ。おかげで頭が冷えちまつたじゃねえか。

「じゃ、行こうか」

すべての武器を収納し、月光だけを展開する。

「行くんだね、秋十」

「ふん、当たり前だ。お前らはそこで観ている」

「うん、そうするよ。……………怪我、しないでね？」

「わかってるよ」

あまりの心配性に苦笑をしながら、向き直る。

一回振り払い、レーザー刃を出す。

「（頼む。ほんの数秒でいい、この状態をもたせてくれ）」

本来の使い方じゃないが、それでも！

その無茶な願いに応えるように左肘から先以外の装甲が消えていく。当たればたとえ強化人間とてただではすまないだろう。だが、一撃で十分だ。コイツはそれを理解している。

「（……………ありがとよ、ノーブライト）」

心の中で礼を言い、そのまま右足を踏み切る。補助も何も無いが、その一歩でトップスピードへ持って行き、距離を縮める。

擦れる刃が地面を焼き斬って線を残していく。それはまるで俺の軌跡のようだ。後悔しても、苦悩しても、まっとうな道じゃなくても只ひたすらに進むしかなかった俺の過去。

泥人形が刀を振り下ろす。その斬線は才能の無さ故に終ぞ修得できなかった義姉さんの剣。だが――

「……………そんな紛い物でエ……………俺に届くと思うなア！！」

ザンッ！！

斬り上げた刃が奴の刀を途中から断ち斬る。断たれた刃が回転しながら背後へと飛んでいく。

地面に刺さる音がするのとそう変わらないタイミングで袈裟懸けに斬り下ろす。

振り斬るのとほぼ同時にエネルギー切れを起こし、蒼白いレーザー刃が消失する。

ジジッと紫電が走って崩れる泥人形。中にいた奴の表情を見て、気分が萎えた。

「まあ、今回だけは見逃してやるよ」

崩れ落ちそうなのを支えて呟く。

その表情はまさしく子兔のようだった。

——side ラウラ

「忠告しておくがな、あいつに会うのならば覚悟しておけ。あいつの抱えるものは私やお前では比べ物にならん。それなのに何事も無

いかのように自然に手を差しのべてくる。油断すればその温かさに惚れてしまうぞ?」

あの時の教官の言葉を思い出した。

あの時は教官が浮かべた嬉しそうな、どこか誇らしげな表情について嫉妬してしまった。こんな表情を教官に浮かべさせる男に。

『んなこと言われてもよ……。というより、義姉さんはそんなこと言っていたのか?』

真っ暗で何も聞こえない筈の中、声が聞こえてきた。あの男の声。しかしそこにあるのは怒りではなく、優しげで呆れが混じった声。

『まあいいか。……………さて、ラウラ・ボーディヴィツヒ!』

——は、ハイッ!

突然の厳しい声に反射的に姿勢を正してしまう。

『ハハッ、そんなに気張らなくていいさ。……………んで、ラウラ。お前さんは自分が何を仕出かしたか理解しているか?』

——……………ああ。冷静になれた今ならわかる。八つ当たりであんなことをしてしまって……………すまなかった

『俺に謝るのはお門違いだぜ。俺も半ば八つ当たりだったからな』

——お前がか?

『おいおい、俺を何だと思っている?』

——いや、あんなに強いお前が八つ当たりなんて意外だな、と

『俺が強い……………か。俺はこれっぽっちも強くないさ。もし強かったら……………才能があつたら、俺はこんなに……………』

——こんなに……………なんだ？

まるで後悔しているような言い方。苦々しい表情。……………これが教官の言っていた抱えるものなのだろうか。

『……………何でもない、忘れてくれ。……………ラウラ、お前にとつて力とはなんだ？』

——……………わからない

『そうか。ならその答を探してみろ』

——……………答？

『ああ、そうだ。何の為の力か、お前自信が納得できる答をな』

——……………だが、私一人では

『だったら、まずはアイツ等に誠心誠意謝るんだ。そんで、その後に頼めばいい。アイツ等はいいやつらだからな、受け入れてくれるさ』

——……………でも

『まだ怖いのか？だったらそうだな……、俺も一緒に探してやる。だからさ——』

——……………？

目の前に手が出される。これはいつたい……………？

『まずはこの暗闇から抜け出そうぜ。お前が新しく一步を踏み出すためにさ』

微笑みと共に紡がれた言葉に心をつたれた気がした。

おずおずとその手を取る。

——……………あ

冷たい暗闇の中、初めて感じたその温かさに思わず声が漏れていた。ああ、確かにこれは教官の言うとおりだな。この温かさは

『ハハッ、まるで赤子だな』

——わっ、笑うなっ！

きっと私の顔は真っ赤になっているだろう。

『スマンスマン。……………まあそれじゃ、行こうか』

——……………ああ！

苦笑とも微笑みともとれる表情で告げられた言葉に力強く返し、最

初の一步を踏み出した。

「う、あ……………」

ぼんやりとした意識が徐々に覚醒していく。

「気がついたか」

聞こえてきた声に一気に目覚める。

「何が…………起きたのですか…………？」

上体を起こそうとするが、全身に痛みが走り顔を歪めてしまう。それを我慢し、教官に尋ねる。

「ふう…………。一応、重要案件である上に機密事項なのだな」

わざわざそう言う。つまり、ここだけの話ということなのだろう。無言のまま言葉を待っていると、ゆっくりと話し出した。

「VTシステムは知っているな」

「はい…………。正式名称はヴァルキリー・トレースシステム…………。過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かアレは…………」

「そう、IS条約によりどの企業・国家・組織であろうとも開発・研究・保有が禁止されているシステムだ。それがお前のISに搭載されていた」

「……………」

「巧妙に隠されてはいたがな。機体の蓄積ダメージに搭乗者の意思……いや願望か。それらが揃った時に発動するようにされていたらしい。現在ドイツ軍に問い合わせている。まあ、近く委員会から強制捜査が入るだろうな」

ギュツとシーツを握りしめて俯いてしまう。

「私が……望んでしまったからですね」

あなたになることを。

言葉にはできなかったが、きっと教官にはわかってしまっただろう。

「ラウラ・ボーディヴィツヒ！」

「は、ハイッ！」

いきなり名前を呼ばれ、驚きとともに顔を上げる。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……。私……は、……………」

言葉の続きがどうしても出てこない。自信を持って自分はラウラだと断言できない。

「わからないか？なら存分に悩むといい。そして自分の望むラウラ・ボーディヴィツヒを見つけれ。幸い時間は十分あるんだ。なにせ三

年間はここに在籍しなければならないのだからな」

「あ……………」

意外だった。教官にこんなことを言われるなんて。妹を傷つけたり、迷惑をかけていた私に。

私が呆然としていると、言いたいことは言いきったのか教官がベツドから離れていった。

「……………それに」

ドアの取手に手を掛けたところで背中越しに声をかけられる。

「アイツの手をとったのだろうか？アイツに何を問われたかは知らないが、まあ精々気をつけろよ——」

——惚れぬようにな

背中を向けているが分かる。きっと教官はニヤリと笑っているのだろう。

「は……………ハハハッ！」

もう、手遅れですよ。

静かになった部屋の中ポツリと呟いた言葉は私の中に奇妙な、だが不快ではない熱を残して消えていった。

EP016（後書き）

最近あまり思い付かなかったのと、追試があつたので中々時間とれなかった。それに今日試合あるし…………。

次か、次の次にオリジナルをいれたいと思います。また遅くなるかもしれませんが、気長に待っていただければ幸いです。

それでは、また。

EP017

「ほう、やはり言った通りになったな」

「まあね。そうしないと一年生のデータをとれないからね」

あれこれと面倒な事情聴取も漸く終わり、シャルルと食堂で飯をとっていた。

丁度備え付けのテレビでは一回戦のみ行うことが知らされているが、それを横目で見ながら関係ないとばかりに箸を進める。

「……優勝…… チャンス…… 消え……」

「交際…… 無効……」

「…… うわああああんっ!!」

だがその傍らでは女子達が落胆し、数十人が泣きながら走り去っていった。

「…… なんじゃありゃ」

「さ、さあ？」

そんな状況に俺は爪楊枝をくわえながら疑問の声を上げるのだった。

さて食べ終わったし部屋に戻ろうかと立ち上がった俺の視界に呆然と立っている水色の髪の少女を見つけた。…… というか簪だ。

「よお簪。どうしたんだそんなにぼーっとして」

「あつ…………し、秋十…………？」

おいおい、目の前に立つても気付かないなんてよ。

「ああ、そついや簪。先月の約束のことなんだがな」

「ふえ！？」

すつとんきょうな声を上げる。…………何を驚くのかねえ？

「何を付き合うのかは知らんが、まあ買い物くらいならば言えはいつでも付き合うさ」

結局弾達は何も教えてはくれなかったからなあ。あつてるのだろうか？

「……………へ？」

ん？簪の表情が固まった。違うのか？

でも、外出以外に付き合うつてなにかあるか？……………男女関係？簪が俺に好意を抱いてるとでも？

そもそも俺にはそんな感情とつうの昔に忘れたから何とも言えないし……………。

「……………うん……………買い物、だよな。買い物……………」

明らかに暗い雰囲気纏ってブツブツ呟きだす簪。あまりの黒さにいたたまれなくなり視線を逸らすと、半眼のままジトーっと見てくるシャルルと目があってしまった。

「……………秋十」

「……………どうした、シャルル？」

妙な威圧感を持って俺の名を呼ぶシャルル。

「もはや病気だね……………」

「……………は？」

病気って何のことだ？俺はいたって健康だし、そもそも病気になる筈もないんだが……………。

それよりも、いい加減簪がヤバくなってきたな。どうすりゃいいんだよ……………。

「…とりあえず簪、買い物でも遊びにでも何にでも付き合っから、機嫌を直してくれ」

なんとも情けないが、ダメ元で言ってみる。

「……………なん、でも？」

意外と食いついてきた。簪は小首を傾げ、？と頭の上につきそうな表情で見上げてくる。

「あ、ああ。なんでもいいさ」

「なんでも……………なん、でも……………うん、わかった。……………そ

れで、いい」

何か呟いてから嬉しそうに頷く。さっきまでのが嘘のようだ。……
ホントに女というものはわからないな。

「どこ、行くかは考えておくね」

「ま、まあゆつくり考えな」

じゃあねっ！と手を振ってからパタパタと駆けていく簪。犬だっ
たら尻尾をブンブン振りそうな位の仕草に、出来るだけ笑顔で返す。
……ああ、鏡で見なくても顔が引き攣ってるのがわかる。

「……………秋十、いつか刺されるよ」

隣ではシャルルがため息を吐いていた。

「あ、織村君にデュノア君。ここにいましたか」

自室への廊下を歩いていると、山田先生に声をかけられた。

「山田先生、どうかしましたか？」

「そうです、お二人に朗報です！！」

シャルルの質問に、山田先生は両手を握りしめ、身を乗り出してく
る。

「なんとですね、ついについに今日から男子の大浴場が使用可能になりました！！」

「おお、それはそれは。確かに嬉しいですね」

「そうですね、そうですね！時間を調節した甲斐がありましたよ！」

というよりも山田先生の方が喜んでないか？

「ささ、二人は早速お風呂にどうぞ。今日の疲れもスッキリしますよ」

「はい、そうさせて——む？」

そういえばシャルルは男装しているのだったよな？さすがにマズイと思うのだが……。

「どうかしましたか？ほらほら、早く着替えを取ってきてください。私は脱衣場の前で待ってますから」

それだけ言ってさっさと行ってしまふ山田先生。シャルルも気付いたのか、赤面して固まってる。

「……………とりあえず、部屋に行くか」

「……………そ、そうだね」

きこちない返事を返すシャルル。一緒だと可哀想だと思うが、かといって妙案が思いつくわけでもなく、会話も無いままに脱衣場まで

来てしまった。

「一番風呂ですよ！ゆっくり浸かってくださいね」

テンションが高い山田先生に押し込まれるようにドアが閉まる。

「……………」

「……………」

「……………あー、シャルル？」

「ひゃうつー！？……………なっ、なに！？」

お互い黙りで、話が進まないのととりあえず俺から話しかける。

「五分だ」

「……………へ？」

「五分間で入るから、その後ゆっくり入ってくれ」

入らないというのも、ここまでしてくれた山田先生に悪いから、男である俺がさっさとすませるべきだろう。

パパッと脱ぎ、タオルを片手に浴場に入る。

「へえ。こりゃ中々の広さだな」

並の公衆浴場よりも設備のよさに感嘆の声をあげる。できるなら打

たせ湯などにはゆっくりしたいが、時間もないので今回は諦めるしかないな。

体を洗い湯船へと浸かる。適温なそれに目を瞑り、一息吐く。

カラカラカラ…………。

脱衣場の引き戸が開く音がして、誰かが入ってくる。この場合、一人しかいないのだが。

「お、お邪魔します……………」

片目を開けて一瞥すると、スポーツタオルを体に巻いたシャルルが近づいてきていた。

「どうした？待ちきれなかったのか？」

再び目を閉じて、問いかける。

「……………それ以外に何かないの？」

顔は赤いが、少しむくれながら言う。

もう一度片目を開け、シャルルを見る。

薄手のスポーツタオルのせいか肌が多少透けて見え、スタイルのいいボディラインもくっきり見える。だが、俺が見ているのをわかったのだらう、首まで真っ赤になっていく。

「ふむ。……………そんなに恥ずかしいなら、もう少し待てばよかったものを」

「……………秋十の、バカッ!!」

率直な感想を述べた俺に対し、近くにあった桶を投げつけてくる。
「っと。……………危ないではないか」

危なげなく受け止め、傍に置く。

不躰に見るのもいけないので、背中を向ける。

「うつ……………、自信を無くしそうだよ……………」

うちひしがれたような声をあげる。

「……………それで?」

「……………へ?」

「話でもあるのだろうか?」

でなければわざわざ入ってくることもないだろう。部屋でも話す機会はあるのだから。

「……………秋十って、ホントにズルいよ」

湯船に入ってくる音がして、さらに近づいて背中に触れる感触があった。おそらく背中合わせに座ったのだろう。俺に身を委ね、暫く黙り込む。

「……………秋十にはね、感謝してるんだ」

水の流れる音が響くなか、唐突に喋り出す。

「まだ答はわからないけど、ここにいる理由をくれたし、それに……」

そこで会話が止まる。だが、根気よく待ってやろうじゃないか。

「……………秋十が僕の手を引いてくれたから、僕に勇気をくれたから。だからその秋十がいるここにいたいって思うんだよ」

「……………そつか。シャルルは前に歩きだした、か」

……………羨ましいよ。グイレン^{レイヴン}として死に、グイレン・ストレイド^{リンクス}として死んで、現在は織村秋十として生きている。そんな俺は前に進めてない。ずっと中途半端に留まり続け、子供のように迷子になっている。何をするでもなく、惰性的に流されるまま生きている。

「秋十のおかげ、なんだよ？」

「嬉しいことを言ってくれるな、シャルル」

こんな俺が誰かを導くなんてよ。

「あと、僕のことはシャルロットって呼んで」

「その名前は……………」

「そう、僕の本当の名前。お母さんがつけてくれた、大切な名前」

「シャルロット……………か。いい名だな」

「ありがとう……」

会話が途切れ、また静かになる。

「……さて、そろそろ出るか」

「へ？……キヤアッ」

俺という支えを失ってバシャーンと倒れ込むシャルロット。

「……っう」

「ハハハッ、悪い悪い」

軽く睨むような視線を背中に受けながら脱衣場へと退散した。

「っう……ひどいよ、秋十」

風呂から上がり、部屋へと戻るその道中。シャルロットはさっきのことを根に持つてるのか、ふてくされていた。こちらを軽く睨んでいるとはいえ頬を膨らませる姿には、可愛らしさだけでまったく怖くもないのだな。

「ハッハッハ……スマンかったな、シャルロット」

「……あう……本当に卑怯だよ」

わざと名前を強調するように言うと、シャルロットは顔を赤くして

俯いてしまっ。

「……あの、さ。秋十は——」

シャルロットが何かを言おうとした瞬間に、俺の携帯が鳴り始めた。

「あー、スマンシャルロット。先に部屋に戻っていてくれ」

名前を見て一つ断ってから人気のない方へ向かう。周囲をざっと走査し、盗聴器の類が無いのを確認してから電話にでる。

「ああ、ちょうどよかったよ。こっちからも聞きたいことがあったんだ」

『あら、どうかしたのかしら？』

電話の相手はスコールだった。

「いや、あのドイツの機体の事なんだがな……」

『ああ、あのヴァルキリー・トレースシステムのことね？』

「……いつも思っんだが、どうやってこいつは見ているのだろうか。そんな簡単に手に入りはしないはずなんだがな……」

『あれを組み込んだ施設は、さっき何者かに襲撃を受けて壊滅したわ』

「そうか。……まあ、誰かはだいたい予想はつくんだがな」

あの兎もどこかで見ていただろうしな。」

「俺としてもあれは気に入らなかったからな。ドイツ軍にダメージを与えてやりたいところなんだよ。とはいえ、俺は前線で戦うしか脳のない人間だから何もできんだよ」

『あら、それを亡国機業の私に言う?』

「ふん、そんなのに拘るのは一部の老害どもだろう?」

『……………フッフ、やっぱり貴方は面白いわね。さすが子飼の連中を除いた実働部隊に気に入られてるだけあるわね』

気に入られていたのか、俺は。

『でも、今手を切るのは得策ではないの。我慢してちょうだい』

「……………しょうがないか。ま、いつか襲撃でも請け負うさ」

資金源なのだろうか。…………俺には関係ないか。

「で、そちらの要件は?」

わざわざかけてきたんだ。それなりの用事があるのだろう。

『貴方の声が聞きたかった……………じゃだめかしら?』

「……………切るぞ」

『冗談よ。まったく、せっかちな。……………それで本題なのだけんど…』

……依頼よ』

『目標は日本国内にある研究施設。そこからデータの奪取してちょうだい。』

数日前にそこからの連絡が取れなくなったそうよ。その後送られた調査部隊も同じらしいわ。原因は不明、何が起こるか分からない危険な依頼よ』

「…請けるのなら、学園はどうすればいい？」

俺はそう簡単に外出許可が出るとは思えないのだが。

『貴方のISの武装テストで通ったわ。まあいろいろと無茶もしたのだけどね』

すでに請けること前提で進んでるな。断りはしないのだけだよ。

『それで、請けるのかしら？』

「ああ、請けるさ」

『そう、よかったわ。詳しいことは明日移動中に話すわ』

「谅解した。……そうだ。その研究施設の企業の名前は？」

『まだ言っていなかったわね。目標の施設は………』

『キサラギよ』

（前回のせ忘れた）オマケ

アリーナで四人が対峙している。シュヴァルツエア・レーゲンを纏ったラウラ・ボーデイヴィツヒと訓練機打鉄の篠ノ之箒。ラファール・リヴァイヴ・カスタム？のシャルルと白いISを装備した一夏がいる。

だがそのISには流麗さなどなく、ごつごつしたものだった。何より、その肩にある巨大な砲台が目を引く。

「ふん、そんなノロそうなISで私に勝とうなど」

そんなラウラの挑発にも応じず、一夏は腕を組んで眼を閉じたままだ。

「どうした？何か言ったらどうだ！それとも怖気づいたのか」

それすらも無視して一夏は開始の合図を待つ。シャルルが心配そうに声をかけても動かない。

カウントダウンの声が聞こえ、各々構え始める。それでも一夏は腕を組んだまま、宙に浮いている。

それを見てラウラは見下したような笑みを浮かべるが、カウントが一を迎えた途端、一夏は眼を見開いた。

突然襲った威圧感にラウラは思わず身体が硬直してしまう。

「……倉持技研、白式だ。……どこまで聞いているかは知らんが、豪気な事だな……貴様も！」

開始のブザーが鳴る。だが、一瞬とはいえ出遅れてしまったラウラ。その一瞬で最早勝敗は決していた。

肩の巨大な砲門を向け、合図とともに容赦なく撃ちだした。

EP017（後書き）

遅くなって申し訳ありませんでした。

定期試験が（いろんな意味で）終わりました。

オマケは最初のころから浮かんでいました（笑）
なんと言つか、語呂が良かったので。

次回、レイヴン諸君は予想がつくかもしれませんが、アレが出てきます。そう、アレです。
ちょっと時間がかかってしまいかもしれませんが、楽しみに待って下さい。

意見、感想、よろしくお願いします。

それでは、また。

『まもなく作戦目標の施設に着きます。もう一度ブリーフィングの内容を繰り返します』

輸送車の中、通信機越しに聞こえる声に耳を傾ける。

『数日前より連絡が途絶えたキサラギ社所有の研究所内に侵入し、原因の究明及び最深部にあるホストコンピュータから研究データを奪取してください。なおオペレーターは私、レーナ・ブレイクです』

照明の点いていない暗い荷台部分で、眼を閉じて瞑想する。昔と変わらない、思考を切り替えるための出撃前の癖。

常に死と隣り合わせ。一つのミスが死に直結する。そんな死が溢れる戦場で、躊躇わず、容赦なく、ただ冷徹に依頼をこなす……生き残るため自然に生まれた己。鋼鉄の翼で羽ばたく為の準備。

『斥候部隊の連絡も途絶えたため、キサラギ本社からの部隊の派遣が決まっています。彼らと接触しないうちにすべての作業を終了させて下さい』

キィイツと軽いブレーキ音と共に輸送車が停止する。

『最後に、作戦時におけるコードネームを指定してください。要望がなければこちらから提案するものになります……』

コードネーム……ね。戦闘時の俺を表すのは、やはりあれ以外には思い付かないな。

「……………レイヴン」

『……………は？』

「レイヴン、と呼んでくれ」

俺がいる後部のハッチが徐々に開いていく。
立ち上がりISを展開する。脳内にAMSの接続状況が表示され、
戦闘状態にまで上がる。

『了解しました。……………開始予定時刻です。レイヴン、気をつけて』

ハッチが完全に開ききる。目を開けて前傾姿勢をとり、薄くブース
ター光がちらつき始める。

『……………作戦開始！！』

システム 戦闘モード、起動します

レーナの声と脳内に音声が響き、メインカメラの赤いモノアイが点
灯する。

それと同時に俺は駆け出した。

「……………不気味なほど静かだな」

施設内に入り、探索しながら進む。だが、通路には微かなブースト音だけが響いて他の音は一切していない。

単に人がいない……では説明しきれない。

破れた壁。散乱した研究室。空いた穴から見える千切れた電線。明らかに何かがあった。

にも関わらず物音がしない。

「ッ！？…レイヴン、レーダーに複数の生体反応がありました！これは……地下からです！気をつけて下さい、何かおかしいです……」

そう言つてオペレーターからデータが送られる。

表示されたデータには、目標地点までの間の通路にいくつもの反応があることを示していた。だが、レーダーに映ったそれらの影は不審な形をしている。

「……………イヤな予感しかしないぜ」

地下部分へ繋がるゲートの前。例の反応はこの先からする。だが、ここを通らねば目的地まで行けない。

「……………こんなところで止まってもしかたないな。まあ、なるようになるだろう」

ぼやきながら武器を展開する。右手にアサルトライフル。左手にはレーザーブレード。

肩にはレーダーと一応チェインガン。

微かな光も収まり、武装すべてが展開されたことを確認。ロックを

解除してゲートの先へ進む。

その先は上の階のように荒れ果てていた。だが、ところどころ壊れて開きっぱなしのゲートから砕けたシリンダーや割れた培養機の残骸が覗いている。

『……これは、……一体なにが』

レーナはこれを見て呆然とした声をあげている。ここで動揺するなんて、恐らくは経験が少ないのだろう。

直線の通路を駆け抜ける。オートマップの機能で周辺の構造と目標の位置はわかるので、迷うこと無く進んでいく。だが最後の一区画へのゲートの前で、壁越しにFCSのロックが反応した。

「おいおい、最後の最後に来るってか？」

残りはここの部屋とそこから繋がる通路を通るだけ。

ゲートを開け、ブーストで飛び出す。

視界に入ってきたのは、緑色をした大きなノミのような形状の何かだった。

どうやら生体反応はコイツらのことらしい。この部屋にただで八匹はいるが俺が入ったのに気付いたのか、前面にある複数の赤い脚を使つてぴょんぴょん跳ねながら近づいてくる。

「面妖な……。チッ、駆除するしかないか」

動き自体はそう速くないので、普段のようにブーストしながら近づき左手のブレードを振るう。

だが今回に限ってはこれは悪手だった。

ブレードで斬った瞬間、このノミ擬きは爆発した。それだけに止まらず、その衝撃によって一瞬動きが止まり、接近していたヤツが自爆してきた。

「クッ！？……熱が……」

さらに爆発により機体の熱量が限界に達して熱暴走をおこし、シールドエネルギーが減り始めていた。

接近されないように後ろに下がり、レーザーブレードを格納。バズーカを出し、撃ち始める。

「……どうやらある程度ダメージを与えると爆発するらしいな。離れた所から撃つしかない、か」

アサルトライフルも連射し、部屋内の敵を全て掃討した。だが、これでこちらにもかなりダメージを負ってしまった。

熱も収まり、とりあえず先に進む。通路にも数匹いたが、ライフルとバズーカで近づかれる前に殲滅した。

コンピュータのある部屋に辿り着き、ブリーフィング時に受け取った装置でデータの吸出しを始める。

しかし、この施設の荒れようからして……。

「――自滅……………か」

途中で見かけた培養器の数からして、あの生体兵器はここで開発していたのだろう。何かの拍子に起動したか。

ここの研究員も爆発に巻き込まれたか……………喰われた、か。

「……………つと。もう終わったか」

終了を示す電子音に引き戻される。装置を回収し、来た道に戻ろうとする。

『レイヴン、緊急の通信が入りました。予定より早くキサラギの部隊がこちらに向かっているそうです。急いで離脱してください』

ズドーン！ズドーン！

通信が終わるのとはぼ同じくらいに、遠くから爆発音と何かが崩れる音がした。

「チツ……………レーナ、何が起こった!？」

『待って下さい……………レイヴン！上の階で先程の生体兵器が壁を破って通路上にまで出てきました!』

おいおい、つくづく俺は運に恵まれないな……………。

しょうがない。とりあえず急ぐしかないな。

「んじゃ……………行くとしますか!」

再度気合いを入れるように呟き、通路へ飛び出す。

とは言え、地下は既に敵反応は無いので脇目も振らずに地上部分に向う。上に近づくにつれ、レーザーに映る数が増えていく。その数は先程相手にしたヤツらの数倍にも及ぶ。

『レイヴン、あと数分もすればキサラギに捕捉されてしまいます。早く離脱して！』

全部相手する暇はないな。あとは殆ど直線だけだから……………。O
Bで一気に突き抜ける！

「レーナ、輸送車の後部を開けといてくれ。このまま突っ切る！」

言つのと同時にOBを起動。扉を開け放ち、天井付近を加速しながら飛んでいく。

とはいえ、ここ天井はそう高くない。俺が近づいたことに反応した数体が自爆し、その爆風に煽られることになる。

爆発自体は直撃しないが、それによる熱でOBの使用も相まって機体温度が上昇していく。

「ぬおおおおっ！！！」

それでもOBをやめない。曲がり角に來ても止まらずに横移動しながら少しずつ向きを変えて進む。

温度がレッドゾーンに突入し、シールドエネルギーが減少していく。

「ッ！……見えたっ！」

漸くエントランスに辿り着き、輸送車を視界に捉えることができた。

だがジェネレータのエネルギー残量もシールドエネルギーもかなり
際どいところまできている。

さらに運の悪いことに、輸送車までの間のヤツら数体が一斉に爆発。
爆炎の中に突っ込む形になり、一気にシールドエネルギーが削られ
る。

そのせいでシールドエネルギーが一割を切り、アラートが鳴り始め
る。

「間に……合えー!!」

入口のガラスをぶち破ったところでOBを切り、通常のブーストで
輸送車までたどり着き後部に入ったところで着地する。

そこで丁度エネルギーが無くなりジェネレーターがリチャージし始
める。

『脱出を確認しました。離脱します』

作戦目標クリア。システム通常モードに移行します

レーナの声が聞こえ、輸送車が動き出す。

ISを解除し、座席に座ったところで通信が入る。

『お疲れ様でした、レイヴン。取ってきたデータはもう送っておき
ました。さすがに予想外だったので、上には報酬の追加を打診して
おきました。恐らくは受諾されるでしょう』

そりゃ助かるわ。自分から約束したとは言え、タダ働きはキツイか
らな。

『それから、IS学園へのカモフラージュの為にこちらから追加武器をいくつか用意しました。データを転送するので確認してから後で報酬と一緒に受け取って下さい』

ISが受信したことを伝える。表示を許可すると数個の武器と思しき型番が写される。

「(KINNARAにKARURA……マイクロミサイルか。結構使えそうだな。他は……WB14RG|LADON、YWH16HR|PYTHON。どちらもレールガン。まあ面白そうではあるな……)」

『こちらからは以上です。それではレイヴン、これからもお願いします』

それでレーナからの通信が切られる。

依頼が終わったことに安堵し、揺れる車の座席に身を委ねて無機質な天井を見上げて一息吐く。

「はあ………相変わらず散々な依頼だった………」

ちなみに後日、スコールからの報告を受け取った。

『グイレンお疲れさま。データから分かったけどあの研究所にいた

ものは、AMIDAというものらしいわ。キサラギの中一派が熱心に研究していた生体兵器みたいね。正直こちらが引いてしまうほど詳しく書かれていたわ」

世界は違えどキサラギはキサラギということなのだろうか。キサラギだけだったもんなあ、射突型ブレードや火炎放射器を造ってたのは……。

『まあ、結局彼らはそのAMIDAにやられたのだから本望と言えるは本望なのかしら？』

「しかし俺が報われねえぜ。端的に言えば不要なデータだったんだろ？」

『たしかにそうなるわね』

電話の向こうから苦笑する声が聞こえてくる。

「あんな無駄に命張ってまで取ってきたのがそんなブツなんてよ……」

『なら私が慰めてあげましょうか？』

電話越しでも分かるほど艶のある声をだすスコール。

「ハッ、お前さんに相手してもらっなんて後が恐すぎるぜ」

なんせ俺が認めたイイ女なんだからな。

『あら？私は構わないわよ？』

本気が冗談か分かりにくい言い方だな。

「なら今度に期待しておくとするさ」

その後少し他愛ない話しをして今回の依頼の一貫は終了した。

オマケ

その時のIS学園

—side 一夏

トーナメントであんな事件があつたとしても、翌日には変わらず授業がある。その事に軽く嫌になるが、休む訳にもいかずちゃんと予鈴前には教室に着き席に座る。

「……………あれ？義兄さんは？」

そこでふと気付いた。いつもはもっと早くには席に着いている義兄さんの姿が今日は見当たらなかった。ついでにデュノア君も。

「み、みなさん。おはようございます……」

セシリア達に聞きに行こうかと思ったが、山田先生が入ってきたの

で断念する。けど何故だか元気がない。心なしか眼鏡もずり落ちて
るような気がする。

「今日はですね、転校生を紹介します。いや、転校生というか、も
う自己紹介はすんでるというか・・・」

困ったように頭を抱える山田先生を尻目にクラスは一気に騒がしく
なる。

今月だけで既に二人も転校生が来るというのにまだ来るのかな？

「それでは、入ってきてください」

「失礼します」

妙に聞き覚えのある声と共にドアが開かれる。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願いします」

ぺこりと皆に頭を下げたのは女子制服を着たデュノア君。

.....
つて女子！？

「え？ デュノア君って女？」

「おかしいと思った。男にしてはどうも線が細いと思ってたのよね」

「あれ、織斑君って同室だったんだから気付いて.....」

「というか昨日は男子が大浴場をつかつたんじゃない？」

.....フ、フフフそうだね。あの義兄さんが気付かないわけない

よね。まさか……まさか一緒に入ったわけないよね？どうなのかな、デュノア君……いや、さん？

「いやっ……えーっと……その……」

フフフフフフ……、なんでそこで顔を赤らめれのかな？かな？

「……だから……その——」

「秋十おっ！……！」

鈴が廊下から蹴破らん勢いで入ってきた。しかもご丁寧にイスアーマーを展開し終えている。

「しねっ………ってあれ？秋十は？」

義兄さんは今いないよ？………義兄さんはこうなることを予測していたのかな？もしそうだったら………フッおはなししなきゃね………。

「ちよっ、一夏落ち着きなさい」

フフフフツ、鈴ったら冷や汗かいてどうしたの？ワタシは十分おちついてるよ？

「いや、だから………もうっ！秋十のバカア——！」

「——安心しろ、馬鹿はここにいる」

バンバンッ！！

朝の教室に小気味いい音が二回響いた。

EP018（後書き）

こんなに遅くなって申し訳ありませんでした。

こんな作品を待っているかはわかりませんが、一応話の流れは決まっているので打ち切りとかはないつもりです。ただ僕自身の頭が追いついていかないだけです。

そのせいでせつかくのAMIDAもこんなお粗末になってしまいましたし。

次は出来るだけ早く投稿できるように頑張るので、どうかこの作品をこれからもよろしくお願いします。

それでは、また。

追記

原作でサイレント・ゼフィルスの強奪時期は明記されてましたっけ？
原作持っていないので、教えてくれると助かります。

それと僕は男子校生なので、女物の服はまったくもって分かりませ

ん。どなたかそれぞれのキャラの服装の案を下さい。
お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0081w/>

IS－インフィニット・ストラトスー ～一羽の鴉の得た答～

2011年11月17日17時47分発行